
時の彼方に咲く一輪花—Pokemon・D.P.P.—

納 平子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時の彼方に咲く一輪花―Pokemon・D・P. P.―

【Nコード】

N5818V

【作者名】

納 平子

【あらすじ】

あらすじで、じんぶつしようかい。（一話〜五話）
ダイ「主人公です。よろしくお願いします」
ハル「俺ライバル！よろしく！！」
フラ「えっと、ヒロイン…で、良いんでしょうか？」
ナ「私の名前はナナカマド。ポケモン学、特に進化について研究している者で、ワケあって隠匿生活を送っている。場合によっては表に顔を出すこともあるが、これについては少々込み入った事情があり、付け加えて言えば、現在私は拉致監禁された状態に陥っているのだが、まず…（長いので割愛）」
ハン「エイッジェーションツ、ハ

ンッサーム!!!(私の名前はハンサムです)」 ヒョ「僕のピッケルは、天を突き破るピッケルなんだよ!!」 ダイ「一人天○突破しています、スルーをお願いします」 アカ「…」 サタ「アカギ様。黙っていては自己紹介になりませんが」 マー「テメエ、サターン! 生意気にアカギ様に意見してんじゃねえぞ!!」 ジュ「マーズ、アナタまだお話に出てないわよ」 マー「次の第五話に出てくるっつーの。ていうか、テメエこそ出てくるのは第七、八話くらいだろうが。しかも作者は遅筆でノロマな豚野郎だから登場するのに半年はかかるだろ。でしゃばってんじゃねえよ引っ込んでろ!!」 ジュ「作者のせいで粗悪な口調にされて残念極まりないわね。同情してあげるわ、メス猫」 マー「残念極まりねーのは作者の頭だカス!!」 プル「イッヒッヒッヒッ、愉快だねえ!」 作者「お前ら…」

こんな感じの小説かもネギ☆

第一話 巡り合わせ

何処かの遠い世界で暮らしている、不思議な生き物“ポケットモンスター”と一緒に――…。

〈1〉

その日に起きた出来事は、普段の日常とはかけ離れたものだった。いつもの時間に、いつもの場所で。いつもの面々でゆったりと過ごす、変わらない昼下がりにはならなかった。

穏やかで静かな一日。時折、騒々しくて賑やかな毎日。友達は良くつまらないと連呼して、僕にはちょうど良い心地好さで。

それが、その日、唐突に。

なんの前触れもないままに呆気なく、いとも簡単に失われた。まるで見計らったかのような、運命と呼ぶのに差し支えないほどの都合の良さで。バラバラに散らばったパズルの欠片が、奇妙な形

で合わさった。

この時は想像すらしなかった、大きな流れに巻き込まれた。でも、それは確かに僕達を成長させるきっかけとなって。

その始まり、僕達の行く先を決定付けた最初の欠片は、友達のことな一言から――。

「……ダイ！ 昨日の特番観たか？ 観たよな！？ 浪漫だよな！！」

「ううん、観てないよ」

町外れにある静かな池で、やたら興奮気味な声が辺りに響いた。水面に足を付けて涼んでいた黒髪の少年は、驚く様子もなく落ち着いて調子で返事をする。ダイと呼ばれた少年の向く先には、先程の活発な声を上げた友達が立っている。逆立った黄色の髪が特徴的な彼は、悠長なダイに焦れて手足をジタバタ暴れさせた。

「なんだよ、観てないのかよ。ジョウト地方にある『怒りの湖』の赤いギャロドス真相究明番組！ 隣町にいる偉いポケモン博士とかが出演してさ。この頃よく見つかるだろ？ 色とか柄の違うポケモン」

「あー、まあ」

一人熱暴走を引き起こしている友達をよそに、ダイは生返事で頷いた。色や外見の違うポケモンは確かに珍しいが、あまりダイの興味の範疇にはなく、反面、友達の方は大いに関心があるようで、上昇気味な気分をそのままに彼はこう言った。

「という訳で、行くぞ！」

「……………うん、何処に？」

「シンジ湖に決まってるだろうー！ あそこなら赤いギャラドスとか黄金とか居そうだろ！？ よっし、善は急げだ急げー！！！」

「ギャラドスを見た覚えすらないけど。……………って、ちょっと待ってよ。ハル！」

呼び止める声も虚しく、せっかちな友達は全力疾走してすぐに見えなくなった。

毎度のことながら、あまり人の話を聞かない上によく先走る。付き合いの長いダイは慣れているので慌てることなく、しかし放っておく訳にもいかない。せつかちさんを追いかけるためにゆっくりと濡れた足を拭いて立ち上がった。

「さて、それじゃあまずは…」

『おーい、ダイー？』

靴を履いて帽子を被り、ふと空を見上げると、一羽の鳥ポケモンが羽ばたいてきた。ダイが腕を伸ばすとそれを止まり木に、黒い音

符の形をした頭に色鮮やかな身体のポケモンは華麗に着地。

普通ならあり得ないことに、そのポケモンは当然のように流暢な人語を話してみせた。

『ハルの奴、また暴走したのか？ 何処に行ったんだよ』

「シンジ湖。色違いのギャラドスを探すんだとか」

『ハア？ 色違いなんてそうそう居ねえし、コイキングでも見つからねえって。常識的に考えろよな』

人の言葉を喋る“おんぷポケモン”ペラップからの現実味溢れる意見に、ダイもクスクス笑いながら頷く。ペラップはダイの真意には気づかないまま、

『それでどうすんだよ。追いかけるのか？』

「うん。ちようどお昼からなにをやるかで迷っていたし、暇潰しにね。だからさ、ラッパ」

ニックネーム
愛称で呼ばれて、うん？ と首を傾げるペラップことラッパに、ダイは一つ頼みごとをする。

「先に行って、ハルを抑えてきてくれる？」

『えー？ “はねやすめ”させてくれよ。俺はその辺飛び回ってきて疲れたんだ。一緒に行けば良いだろ』

「そうしてあげたいのは山々なだけどさ。ほら」

愚痴るラッパーに池の中心を指差して。

ダイの意を汲んだラッパーは、こめかみにヒクツと青筋を立てた。

『あんの馬鹿は、また忘れたのか…!』

「うん。だからさ、僕はちょっと遅れるだろうから、先に行つてて」

『………よし。あのすつとこどっこの野郎の安否を気にしなくて
良いつてんなら、喜んで行つてやるよ』

やや不穏なことを口にしつつ、ラッパーはまた羽を広げて大空へ
飛び立っていった。

木々の間を抜けていく後ろ姿を見送ったダイは、振り返って池を
泳ぎ回るポケモンに声をかける。

「ビッパー、クインー。こっちにおいでー」

呼びかけに応じてスイツと泳いできたのは、茶色の体毛に包まれ
た出っ歯なポケモン——愛嬌のある顔と一部で人気の“まるねず
みポケモン”ビッパだ。併走してくるもう一匹は、赤色の鱗に王冠
のような背びれを持つ“さかなポケモン”のコイキング。こちらは
クインの愛称で呼ばれ、ダイのいる水際まで来ると、嬉しそうに白
い髭と傷の目立った胸びれをパタパタと振った。

ダイは腰のベルトから、赤白の二色に丸い開閉スイツチの付いた、
手のひら大の『モンスターボール』を取り出して、クインの頭に軽
くくつつける。クインの身体は半透明に輝いて、瞬時に開いたボー
ルの中へと吸い込まれた。

隣で順番を待っているビッパへは、これはダイの捕まえたポケモ
ンではないのでボールには入れず。

「さあ、君のご主人様を追いかけようか」

自分のポケモンを置き忘れていった、そそっかしいにもほどがある『ポケモントレーナー』のハルを追って、ビッパの身体を持ち上げたダイはのんびりと歩き出した。

ダイとハルが生まれ育ったここフタバタウンは、シンオウ地方でも屈指の田舎町で知られる。

人の出入りの激しい都会との人口密度の差は言わずもがな。ポケモントレーナーが通うジムもないとくれば、賑わいに欠けるのも致し方ない。代わりに、目立つ事件や事故といった騒ぎもほとんど起こらない。

良くも悪くも静かでのどか。野生のポケモンが多く生息する、自然の豊かさをより良く肌で感じられる癒しの場所。人波や喧騒を嫌う者からすれば、ここほど最適なところはない町。それがフタバタウンだ。

それに、ジムのある町や都会にはないものが、このフタバタウンにはある。

伝説に語り継がれるポケモンが姿を現すとされる、シンオウ三大美景の一つ、『シンジ湖』という名所が――。

空は快晴、時刻は昼過ぎ。昼食を取りに屋内で過ごしていた者達が、各々の理由で外に顔を出す頃。

来客の少ないフタバタウンの町並みの中に、見慣れない怪しげな人影がいくつかあった。

「…おい、なにしている。もう他の皆は湖へ移動したぞ」

「え？ 集合時間にはまだ…」

「馬鹿！ 総帥は早めに来るのが通例なんだよ。下っぱの俺達が総帥や幹部より遅れたらどうなる？」

「うわ、わ！ いい急がないと………！！」

ヒソヒソと囁き交わした後、男達はその場を足早に立ち去っていく。その様子を、木陰からジッと覗く女の子がいた。

女の子はピンクのニット帽に赤いスカーフを巻き、花飾りを付けた紺色の髪を肩まで伸ばしている。大人しそうな顔立ちのその子は、今は険しい表情で男達の去った方向をじっと睨んでいた。

「どうしよう、博士に知らせないと。………あ、そうでした！」

なにやら切羽詰まっていたかと思うと、パツと顔を輝かせてスカ

ートのポケットから携帯電話を取り出した。折り畳まれたそれを開きながら、登録してある番号を選択して耳に当て、

「どーけどけどけ退け——い！！ ハル様のお通りだ——！！」

「ひっきゃあ?!」

後ろから爆走してきた迷惑小僧に跳ねられて、地べたに勢い良く転がった。

幸い、草むらが茂って柔らかかったので怪我をしなかった女の子は、自分のことよりもぶつかってきた少年を探して頭を下げた。

「あの、すいませんでした！ よそ見をしていたもので……あれ？」

すでに誰も居なかった。頭を上げた女の子はキョトンとする。

はて、誰かとぶつかったような？ とまた思い悩み、そこでハツとつい今しがたのことを思い出して、携帯を構え直そうとしたのだが。

「……あれ、携帯電話は？ だって、さっきまで持っていたのに。え、え、ええ？」

ぶつかった拍子に何処かへ落としてしまったらしく、慌てて近くを調べてみても、それらしいものは見当たらない。

「どうしよう。どうしよう！！ ナナカマド博士——!!?」

ついには連絡すべきはずだった人物に助けを求めて、女の子は力なくその場に座り込んでしまった。

「ん？ ビッパ、誰かの声が聴こえなかった？」

『……………（惚）』

頭の上に乗せたビッパに問いかけるも、ビッパは気持ち良さそうに寛ぐのみ。

ハルを追ってフタバタウンまで戻ってきたダイは、まず町の様子を一通り眺めて一考。

「——あのクソ坊主！！ 性懲りもなくまた商品を蹴散らかしやがって、今日という今日は許さん！！」

「——んまあ！ 人様にぶつかって謝りもしないなんて、クロツグさん家の坊っちゃんは何んて失礼なんざましょ！！」

「——花壇を踏み荒らすなど何度言えば判るんじゃ！ 性悪な悪戯小僧めエ！！」

「……………迂回しようか」

『……………（頷）』

仲の良いことが知られている身故に、とぼっちりを喰わないよう表通りを避けることにする。

民家の裏手に回り込んで、こちらにはハルの被害に遭った人がいないことを確認。湖に向けて移動を再開したところで、ダイの耳にまた啜り泣く声が届いた。

「うう……ヒック……」

「さっきと同じ声だ。こっちから、かな。そこに誰がいるの？」

「ひえ？」

声の出所を探って横路に逸れてみると、物陰にしゃがみこんで縮こまっている誰かを見つけた。フタバタウンでは見かけない、ミニスカートの女の子。泣いているらしいその子を気にかけて、親切心から彼女へと近づいていったダイとまったりビツパは、

「だだ、大丈夫ですッ!!」

「うわ!？」

『ッ!』

飛び上がらんばかりの勢いで立ち上がった女の子に度肝を抜かれた。

驚いている間に、女の子はまくし立ててダイを遠ざけようとする。

「大丈夫です! 大丈夫なのです! 私のことはどうぞお構いなく!!」

「そ、そう？ それなら、僕達は……」

深入りしない方が良いかなと感じ取ったダイは、言いながら後ろに下がろうとした。それを見た彼女の気も落ち着いて、急にまた泣き出し始めた。

「うぐ……うう………うわああん……」

「ちよ、ちよっと。落ち着いて、泣き止んでってば！」

目の前で一人の女の子に泣かれては、男としての性なのか、ダイは罪悪感を覚える。けれども、こういう異性相手の面倒な場面に遭遇したことがなく、どう接すれば良いのかわからずにてんやわんやとにかく泣き止ませるにはどうしてやれば良いかを模索し、模索して、模索したが、良い名案は浮かばない。

そうしている間にも泣き続ける女の子に、ダイはなにを思ったのか、苦し紛れの一手としてビッパを持ち上げてビシッ！ と差し出した。

「ビッパー！！」

「……………」

鼻先に出っ歯で不細工キュートなビッパの顔を突きつけられた女の子は、涙目で茫然。

なんとも如何し難い空気が流れる。

「……………ビッパー！！」

「…ビッパです」

「そう、ビッパ!!」

「可愛いです…」

「うん、ビッパ!!」

『……………（欠伸）』

ごり押しする少年と押される少女。一匹、両手に支えられて宙ぶらりんな体勢のポケモンは、珍妙なやり取りには我関せずな姿勢。そうしてしばらくすると、

「……………クスッ」

「あ…」

紅潮した頬を伝う涙を拭い、女の子は笑ってくれた。彼女の笑顔を見れたダイもホッと胸を撫で下ろす。それも束の間。

「……………て、笑っている場合じゃないんです!!!!」

「はい!!?」

『ッ!!』

一人と一匹はまたしても驚かされ、それで治まる気配のない女の子がズイッ! と迫ってきた。

「あの!!」

「はいッ!」

「私、フラーと言います! 先程は慰めて頂いてありがとうございました。あの、貴方のお名前は?」

「えっと、名前は、ダイ。お役に立てて、なにより…」

「そうですか。それではダイさんごめんなさい! 私、急いでいるので失礼します!!」

「え? あ、ちょっと!」

怒涛の勢いで喋り倒した挙げ句、フラーと名乗った女の子はダイが呼び止める間もなく走って行ってしまった。

ダイは、まるで嵐にでも遭ったような気分になる。彼女の後ろ姿が見えなくなるまでポカーンと口を開けて、ショックから立ち直ると、当初の目的を思い出した。

「…………、シンジ湖に行こうか?」

『…(頷)』

“のうてんき”な性格でいち早く回復したビツパに確認を取って。

「良いよ、怪我はしてないから。それより、シンジ湖に行ったら駄目って言うのは？」

「危険なんです!!」

“危険”。そう叫ぶように告げたフラーの顔には、軽い感のあった先程までと違う緊張感が窺えた。

本当に危険なのかどうかはわからない。だが、それはさして重要なことではなく。

「あそこには今、悪い人達がいるんです。……『ギンガ団』という、ポケモンを使って悪いことをする人達がいるのです!!」

ギンガ団、というのがなんなのかも、ダイは知らなかったが。

そこへ、危険と言われたその場所へ、すでに向かってしまった友達がいることは知っていた。

ダイ達を置いて一人シンジ湖を目指すハルは、身に及ぶ危険を知るよしもなくひた走る。

シンジ湖へ繋がる201番道路を経由せずに、直線距離を通った方が早く着けるとして、道のない森の中を進む。ハルが通ると、周

りに潜むコロボーシはうるさく騒ぎ、木々に留まったムツクルの群れは驚いて次々に飛び立っていった。

藪に引っかけて生傷を多く増やしながら森を突き抜けたハルは、最短時間で湖の入り口――『この先シンジ湖』と書かれた看板の前まで辿り着いた。

「よっしゃー！！ 来たぜ、ギャラドース！！ 赤でも黄色でも青でも良いから、全部まとめて出てこーい！！」

まだ色違いが簡単に見つけられると信じて疑っていない。抑えられない熱い気持ちを全開に、ハルは両手を突き上げて歓喜の声を上げた。すると、

『青は変わんねえだろうがー！！』

「おおー！？」

遅れて到着したラッパの“つつく”攻撃が、ハルの後頭部をスッコーンと捉えた。

『この、この！ お前はまたビツパを忘れやがって！ いい加減にしろよコラ！！』

「いて、痛い痛い！！ なにすんだこのおしゃべり鳥！！ やめないと焼き鳥にして食うぞ！？」

『上等だア！！ 焼き入れられるもんなら入れてみろや！！』

怒り心頭なラッパは“みだれづき”を繰り出して、ハルもまけじと応戦。両者はみっともなく争う。普段なら静寂を讃えた湖が賑

やかな言い争いでざわめいて、畔に集まる人々にもハル達の来訪を報せた。

一風変わった白銀の衣装を身に纏った集団は、口喧嘩に夢中なハルとラッパーに厳しい目付きをくれる。その視線を感じ取ったハル達も大勢集まったそちらに注目して、相当数がごった返す湖の光景に戸惑った。

『なんだ？ ヘンテコな服着込んだ奴らだな。しかも俺達を睨んでないか？』

「湖に沢山の人？ ま、まさか、TV取材!？」

『ねえよ。TV局の連中があんなダサイ格好するかよ』

昨晚の影響でまさかの推測を打ち立てたハルをラッパーが真っ向から否定。…したのに、聞かないハルは嫌な予感を与える笑顔を見せた。

「うおお！ こんな機会滅多にないって！ 見学させてもらおうぜ！！」

『ハ？ おい、だからTV取材じゃねえって言って……待て止まれ！ ダイにお前を抑えておけて頼まれてるんだ、余計なことに首を突っ込むなって聞けよコラア!!』

「すいませーん」

口うるさいポケモンは全面的に無視する方向で、警戒心の薄いハルが彼らに近づいていく。集団はますます近寄りがたい雰囲気纏って睨みつけたが、ハルにはちっとも伝わる気配がなかった。

「これからここで撮影？ やっぱり、色違いのギャラドスを探しに見学とかってしても良いよな？ なあなあ、良いだろ？」

「……地元のガキか。ここには近寄るな。とっとと家に帰れ！」

ハルが期待を寄せて話しかけると、刺々しい言葉が返ってきた。ま、そりゃ断られるわなく、と予測の付いていたラッパーがハルの頭の上に移動。

必要以上に邪険に扱われたハルは、ハイソーですかと引き下がるような性格をしていない。かなりむっとした表情で文句をぶつけ始めた。

「少しくらい見ていったって構わないだろ。人には優しくしろって教わらなかったのか？」

「うるさいな……こっちはお前みたいなガキに付き合ってる暇はないんだ！ 痛い目を見ない内に、今すぐ消えろ！！」

「な、なんだと！？ こっちが下手に出ていれば好き放題言いやがって！！ そっちがその気なら……！」

『ハル、やめとけて。後でダイが恐いぞ』

「うるせ！ 俺は引き下がらないぞ。こうなったら……こうなったら！ こいつらより先に、色違いのギャラドスを捕まえてやる！！」

『なんでそうなる……』

一向に引き下がらないハルにラッパは呆れ、銀服の人達も同様に顔を見合わす。実力行使で黙らせるか、などと口々に言い出したそこへ、上空から激しい突風と共にヘリの回転音が聴こえてきた。

「来たぞ！」

「全員、整列！！」

「な、なんだあ？ スッゲー！」

『おいおい…』

機敏に動き出す集団の横で、ハルとラッパの目が空へ釘付けになる。機体両翼にプロペラを取りつけた最新型のヘリが旋回しながら、こちらへ降り立とうとしていた。

ヘリが無事に空き地へ着陸を果たすと、手前に整然と並んだ銀服の集団が一斉に頭を下げて待つ。

ハル達も固唾を吞んで様子を窺うと、ヘリの上下開閉式の扉が開かれた。

「遠路はるばる、ようこそおいで下さいました。——総帥閣下様！！」
「サターン様！！」

「「「ご苦労様です！！」」」

湖周辺の木々が震えるほどの斉唱がなされ——、蒼白色の髪の方が、悠然とヘリから降り立った。

胸に『G』の文字を入れた背広を羽織り、両手を腰の後ろに組んで、射るような鋭い目で眼前の部下を見渡す。

横にはもう一人、サターンという名の青髪も付き従って出てきた。

湖の空気は男達のただならない雰囲気塗りに塗り替えられて、野生の勘を働かせたラッパがハルにヒソヒソと伝えた。

『ハル、こいつらカタギじゃねえぞ。厄介なことにならない内に、早くここから、』

「局長……いや、ディレクターか？ どっちにしてもお偉いさんだな！ 説得して出演許可を貰おうぜ！！」

『離れるぞーって忠告してるのが馬鹿らしくなってくるなこの大馬鹿があ——ッ！！！！』

それでもやはり勘違いする真正銘の馬鹿に、ラッパの痼癪は爆発した。

TV局じゃねえって言ってんだろが人の話聞けやー！！ という悲鳴にも似た絶叫と、人じゃなくてポケモンじゃね？ とまだすつとぼけて火に油を注ぐ声が、重々しい空気をわずかに圧倒。

騒ぐその声に総帥と呼ばれた男は注目して、側近であるサターンが代弁して部下達に聞いた。だした。

「どうして部外者がここにいる。団の活動中は誰も近づけるなど言っておいただろう」

「申し訳ありません、直ちに追い出しますので！」

上司からの叱責に数名が焦り、すぐさま行動へと移った。二手に分かれてハルを挟み撃ちにして、捕らえようと手を伸ばしてくる。

「なにするんだ？ おい、やめろよ！ 離せってば！」

「暴れるな!! 怪我したくなかったら大人しく………痛ー!!」

『コノヤロ、コノヤロ! ハルに手え出すんじゃない! ハル、さつさと逃げるぞ』

「いやーだ!! 俺は逃げねえし、湖のポケモンを捕まえるまでは帰るもんか!」

『こんな時までワガママ言うな!!』

「湖のポケモン……?」

ラッパの“てだすけ”を借りて激しく抵抗しながらも、意地でも動こうとしないハルに周りの苛立ちも募っていく。不甲斐ない部下にはサターンも辟易して、一人別の関心を持った総帥は、片手を挙げて部下を下がらせた。

総帥はハルへ、簡単な問いかけを行う。

「少年。君は、この湖にどんなポケモンが棲んでいるのかを知っているのか?」

「知ってるぜ。色違いのギャラドスだろ?」

「…」

期待していた答えではなかったのか。

総帥の表情は変わらず、しかし今の返答でハルへの興味は失せたらしい。

ポケットから、赤ではなく青の、Sマークの付いた『スーパールール』を取り出して地面へ放る。

『…………』

ボールから出てきたのは、“こうもりポケモン”のクロバット。通常よりも緑がかった体に、手足の部位に当たる大小二対の翼を羽ばたかせながら、主人である男の指示を待つ。

総帥は特別な動作はしなかった。ただ、顎を少し振ってハルを示し、単純な行動を命じた。

——人への、攻撃命令を。

「クロバット、“クロスポイズン”」

『——！！』

クロバットは忠実に、かつ迅速に事へ移った。

総帥のしようとしていることの意味をなにより一つ理解していない少年に狙いを定めて、風を切って接近。翼は瞬く間に毒々しい紫色に染まり、異臭が空気中に拡がり出す。

凶器と化した毒の両翼を正面で交差させて、ハルの細い首を刈り落とそうと差し迫る。ここに来てハルはようやく事態を察したのだが、時はすでに遅い。

避けることも防ぐこともできないハルに、その場にいる全員が無惨な末路を想像した。

それらの予想は、次の大声で覆されることになる。

「ラッパー！！ “ものまね”、“おしゃべり”！！」

『…！ “クロバット、攻撃を止める”！！』

ハッと声に反応したラッパーがとっさに技を放った。総帥の声を

瓜二つに真似て、クロバットに停止するよう呼びかけた。

『! !』

ビタアッ!! と、クロバットの交差した翼は止められた。ハルの首の薄皮をかすめる、ギリギリ一步手前だった。

危機一髪のところであつたハルが声のした後方へ振り向くと、そこには息を切らしたダイと、さらに怯えた様子でビツパを抱えるフラーの姿があつた。

ハルは自分を取り巻く状況を忘れ、ついそちらに気を逸らしてしまふ。

「ダイ、その子は……………」

「クイン!!」

ハルの言葉は聞き入れず、ダイはすかさずボールを投げる。中からはコイキングのクインが、ハルを飛び越えて地面をピチピチと跳ねた。

そこは、ちょうど混乱から脱け出して牙を剥いたクロバットの真下となる。

「“どくどくのキバ”」

「僕達の方へ、“はねる”!」

「え——おっふ! ?」

一段と高く跳ねたクインの身体が、ハルの腹部をもろに直撃した。仰け反った身体はダイとフラーのそばまで滑り込み、クロバット

の噛みつきが空を切る。遅れてクインが跳ね回ってダイの胸元へ、しっかりと抱えられた。

「ありがとう、クイン。戻っていいよ」

『♪』

「……ダイさんや。俺にもなにか言うことはないかい？」

『“助けてやったんだから感謝しろ”、か？』

直前に空へ逃れていたラッパーもダイの肩に留まった。ダイは得意げなクインをボールに戻して、違えよ！と騒ぐハルと立ち尽くすフラーの前へ、二人を庇う位置に立って集団を睨んだ。

「どういうつもりですか？ 人に対してポケモンに攻撃させるなんて。一歩間違っていれば死んでいましたよ」

「ふん。しかし、絶命はおろか傷一つ付けさせず、なお抵抗する姿勢を崩さない、か。なるほど」

総帥の言葉を合図に、控えていた集団が各々ボールを取り出して構える。押し寄せようとする悪意の数に、ダイはきつく目を細めて、ハルはギョツとたじろいだ。

事の成り行きを見守っていたフラーは、そこでビッパを強く抱きしめて、怯えながらも警告を発した。

「警察の方を呼びました！ もうしばらくすれば、ここへやってきますよ！」

「……………プツ」

集団からは失笑が洩れた。警察の名にどれほどの抑止力があるものかと、そう言いたげに。ただし、総帥と側に控えるサターンは違う反応を見せた。

「あの少女……………確か、資料にあった助手の夫婦の娘では？」

「博士に縁があるか。ならば、呼び寄せたのは地方の警察機関ではないな。———ん」

「閣下！」

的確に推察していると、集団から離れていた一人が森の木立から現れる。やや焦った様子の男は、組織のトップの前まで来ると頭を下げて、早口で要件を伝えた。

「報告を申し上げます！ 総帥閣下、サターン様と同じくお越し頂くはずでしたプルート教授が、私用により来られないとのことですが！ 如何いたしますか？」

「プルートめ、あの男はまた勝手な行動を！」

「構うな。奴の好きなようにやらせておけ」

「しかし…！」

憤慨するサターンを、総帥は冷静に諫める。対峙する子供達と自陣の現状を照らし合わせて、最良の判断を下した。

「―――本日の活動は中断とする。総員、速やかに撤退しろ」

「「ハッ!!」」

号令と共に、あっさりと引き上げた。集団の多くは森の奥へ姿を消して、残りもプロペラを回し始めたヘリに搭乗していった。

引き際の良い危険人物達に、ダイは呆氣に取られながらも心なし緊張を解いた。一人状況を呑み込めていないハルは、立ち去る人々をポカンと眺めて、

「あ」

『…』

クロバットが、ヘリに向かう総帥の元へ戻っていた。さきほどの攻撃的な様子ではなく、弱々しい表情で自分のトレーナーを見上げている。

次の命令を、もしくはボールに戻るのを待つクロバットに、総帥の取った行動は。

「え？」

「な！」

「きゃ…!!」

三人の见ている前で、固く握った拳を振るって殴り落とした。

クロバットは短く悲鳴を上げて地面に叩きつけられた。そこへ、総帥からさらなる追い打ちがかけられる。

「役立たずに用はない。何処へなりとも消えろ」

『…………ッ!』

感情の褪せた平坦な言葉だった。クロバットは酷く傷つき、それでもすぎるような目で総帥を見上げるが、彼の視線がそちらに戻ることはなかった。

やがて、クロバットは諦めてその場を飛び去っていった。ダイが後ろ姿を目で追うと、目尻に涙を浮かべていた。

その直後、

「お前!! クロバットに謝れ!!」

「ハル!」

激怒したハルがなりふり構わず飛びかかろうとして、すぐにダイが二の腕を掴んで引き止めた。

プロペラが巻き起こす風に煽られる中、総帥と興奮したハル、それを抑えるダイ、うろたえるフラァが向かい合う。

ハルは拘束を振りほどこうともがき続け、ずっと無表情な男へ怒りの丈をぶつけた。

「あいつはなににも悪いことしてないだろ! ちょっと失敗しただけで、殴って消えろって言うほどのことはしてないだろ!!」

「一度の失敗が全てを台無しにすることもある。私の命令を一つとしてこなせないポケモンなど、手元に置いておく価値があるだろうか?」

「ふざっけんなよ……!!」

「ハル、落ち着いて!」

『止まれっばこの大馬鹿!!』

ラッパも加わって静止を呼びかけても鎮まらない。それを静観する総帥は、ハルではなくダイに関心を示した。

「少年、君の名は?」

「…、ダイです」

「ハルだ!!」

二人は答えて、総帥は気にせずに質問を続ける。

「君は、ポケモンをどのように扱うべきだと考える?」

「そんなもん決まってるだろ!! さっきみたいに殴ったりしないでだなぁ!!」

「少なくとも、道具のように扱うものではないと思います」

思い思いを口に、内容はほぼ同じ解答を述べた。総帥はその一方を汲み取り、咀嚼して呑み込んで、

「その通りだ。ポケモンは、道具として扱うべきではない」

「え……?」

冷酷な行動とは裏腹に、彼はダイの意見に同意した。ポケモンを道具として切り捨てた、その直後だというのに。

総帥の真意を図りかねて戸惑ううちに、総帥は背を向けてヘリへと乗り込む。

彼は振り返ることなく、最後の言葉を残す。

「私の名はアカギ。宇宙の真理を探求するギンガ団を総括する者。

——“世界”を創造した『神』を手にする者だ」

自身の名を名乗って、ギンガ団総帥アカギは、ちらとだけ、ダイに目をくれた。

「それでは失礼させてもらう。また逢おう、少年。…いや、ダイ」

「…、」

名を呼ばれたダイは、別れの返事を出さなかった。

アカギを真っ直ぐに睨んで、その姿が扉で遮られるまで目を外さなかった。

彼の直感は告げていた。——“また逢おう”と言ったのは、“二度目がある”と予感したからだ、と。

…ダイも同様だった。ガラス玉を嵌め込んだような無機質な目をした男と、また逢うだろうと感じていた。

その日の出会いが、少年の中のなにかを変える。

その日の変化が、少年達の運命を決める。

その日の行く末が、何処へ行くのかは神のみぞ知る。

第二話 双葉は発つ

星明かりが薄れて暗い空が白み始めた。

新聞配達に勤しむ人が現れるまでは多少の時間を残す早朝。誰もいない町の片隅で、ダイは白い吐息を立ち上らせる。誰かと待ち合わせをしているようで実際はそうではない彼は、そこへ着いてからかれこれ三十分ほどが過ぎていた。

やがて民家の路地から、やたらと荷物を詰め込んで膨れ上がったリュックサックを背負った人物が現れる。

「…来たね」

「お、珍しいな。ダイが俺より早いなんて」

見た目にも無理のある量を背負ったハルだった。

不恰好な出で立ちとなった友達を眺め、ダイは可笑しそうに頬を緩めた。そしてすぐに引き締める。

「やっぱり、博士の忠告を無視するんだね」

「当たり前だろ。悪い連中が野放しにされてて、見過ごすハルさんじゃないっての」

予想した通りの返答がきた。

ハルは、昔からそっかしくて周囲に迷惑をかけることが多かったが、それなりに自分の信じる正義に基づいて行動してきた。

どんな時でもじっとしていられないし、するような性格ではない。放っておくとたちまち姿を消して、追いつく頃には思いもよらない場所にまで辿り着いている。そのためにダイは、シンジ湖で言われたことを守るためにハルを待ち受けることにした。

謎の組織と出会い、組織の総帥自らに襲われて、その時から言われるまでもなく決めていた。

なにがあっても彼らには関わらないと。

ギンガ団の総帥とは二度と逢わないようにと、固く心に誓った。

〈2〉

——ヘリが離陸して上空へ飛び、ギンガ団の脅威が去ったあと。湖に残された三人は、遠のいていくヘリが見えなくなるまで空を眺めてから、まずフラァがへたりと座り、次いでハルがダイの手を振りほどいた。

ハルはやり場のない感情を持て余して、一息つくダイをジッと睨んで口を尖らせた。

「…どうして止めたんだよ」

「だって、止めなかったら」

「だったら？」

ダイは肩を竦めて答える。

「僕があの人に飛びついてた。そうしたら、ハルを止められなかった」

「…………二人で殴るって案は」

「却下」

「なんで」

「“ハルは先に行って、僕はそのあとを追う。ハルがなにかしでかしたら、僕がハルを止める”。以上」

「……………」

納得したのかどうか。ハルは渋い顔で、けれどダイを睨むのはやめた。そして今度はキョロキョロと首を動かす。

アカギと名乗った男に捨てられたクロバットは、もうこの辺りにはいないようだった。

「あいつ、泣いてた」

「そうだね」

「あいつは、許さない」

「うん」

「で、その子は誰なんだ？」

「うん？ ……ああ、フラァーか」

恩人の存在をすっかり忘れていた。言われて思い出したダイはすぐに手を差し伸べて、困り顔で、それでもいくらか安堵したフラァーがそれを取って立ち上がった。

彼女は抱えたビツパをハルに渡すと、佇まいを正して丁寧にお辞儀をした。

「良かったです。ハルさんがご無事で、本当に良かったです。あの、私はフラァーと言います」

「フラァーのおかげで、ハルも僕も助かったよ。ありがとう」

「――？ 話が見えないんだけど、その、フラァーは、あいつらのことを知ってたのか。それで警察を呼んだって？」

「いいえ、呼んでいません」

「ん？」

「はい？」

キョトンとするダイとハルに、フラ―はとても申し訳なさそうな顔をする。

「あれは、ギンガ団の人達に帰って欲しくてついた嘘です。地元の警察の方は、呼んでも駄目なのです。すいません…」

「警察なんだから駄目ってことはないだろ。なあ？」

笑い飛ばしたハルとは反対に、ダイは真剣な面持ちで受け取った。ギンガ団の反応からも鑑みて、信じたくはないが、思いついた可能性を口にする。

「さっきの人達に買収か脅迫されている……あるいは両方？」

「！」

「ホントかよ…。仮にも正義の味方だろ？ 金で買われて脅されたからって悪に屈するもんなのか」

「えっと、それは…」

言い当てられたからか警察への憤りに気圧されたからか、フラ―は萎縮して口ごもった。なにか事情がありそうなのだが、フラ―は目を逸らして言及を避ける。話して聞かせる気はないらしい。

ハルはもっと話を聞かせて欲しそうに、ダイは複雑な顔で喋らなくなったフラ―が話すのを待っている。すると、新たにやって来た人物が流れる沈黙を破った。

「フラ―、フランシア！ 無事か！？」

「あ……博士」

道路のある方角からの声に三人が振り返ると、走り寄ってくる年配の男性が見えた。はためく白衣を翻してフラーに近づくその人は、髪も口髭も白一色の強面で、しわの刻まれたその顔をやや緩めた。

「捜したぞ、フラー。湖に近づいてはならないとあれほど言っただろう。携帯電話にも出ないで、もしや恐れていたことになったのではと、私は心配したぞ」

「ごめんなさい、携帯電話を無くしてしまって、それで……ナナカマド博士！　ここにいるお二人が、ギンガ団に襲われました！」

フラーはしゅんと落ち込んだのも束の間、博士に先程の顛末を話した。博士の関心はそちらへ、ダイとハルに移る。

こちらでは、ナナカマドという名前と容姿に興奮したハルが、失礼にも指を差す無礼を働いていた。

「ナナカマド博士！！　昨日の特番に出てたぞ！！　ダイ、有名なポケモン博士だ、サインサイン！！」

「ハル、落ち着いて。今はそれどころじゃないから。ほら、ビッパが落ちたよ。何処から色紙を取り出したの？」

極めて冷静なダイが諭して、ハルは一旦堪える。
気を取り直して、ダイは前に出てナナカマドに挨拶をした。

「初めまして。僕はダイ、こっちはハルと言います。お会いできて光栄です、博士」

「ありがとう。私はナナカマド、ポケモン学……特に進化について研究している者だ。それで、君達はギンガ団に襲われたと？」

「はい。なんとか無事にやり過ごしましたが。博士、彼らは一体何者ですか？」

フラーから聞き出せなかったことをすかさず聞いた。ハルも激しく首を縦に振り、ナナカマドの返答に耳を傾ける。

ナナカマドはギンガ団について詳しく知ろうとする二人に対して、厳しい顔つきを見せる。

「ダイとハルだったな。二人共、良く聞くんだ。——ギンガ団と関わるのはやめなさい。今日あったことはすべて忘れて、すぐ町へ戻ること。良いな？」

肝心なことはなにも話さずに、警告だけ口にしてフラーを連れて帰ろうとした。

当然、納得のいかないハルがナナカマドを呼び止める。

「ちょっと待った！ たったそれだけ聞かされて、はいそーですかって引き下がるか！」

「私から話せることはあまりない。言えるのは、彼らが危険だということだけだ。君達が知ったところでどうなるものでもない」

「だとしても！ ……危険だって？ それより確実に言えることがあるぜ。あいつらは、自分のポケモンに暴力を振ったり、ちょっとしたミスで簡単に捨てちまうようなヒドイ連中だってことがな。なんにも知らずに見てみぬフリなんて、俺は絶対にしないぞ！」

アカギへの怒りが再燃してハルは一層吠える。横に立つダイも、ハルほど感情を剥き出したりはしなかったが、やはり警告をすんなりと受け入れるのは拒んだ。

「せめて、どれくらい危険なのかを話すことはできませんか？　そうしてもらわないと、僕はともかく、ハルはなにがなんでもギンガ団を追いますよ」

「話せば、この件について一切関わらないと約束するか？」

「します」

「しない！」

「「…」」

素直で正直なハルにナナカマドは大いに呆れ、ダイは苦笑。

「……………わかった。話せる限りのことは話そう」

どうあっても食い下がって諦めようとはしないその頑固さに、ナナカマドは半ば感心しながら折れて、一度大きく溜め息を吐いてからダイとハルに向き直った。

「……………ギンガ団とは、元は何処にでもある普通の宗教団体だった。名称も“宇宙の真理を探究する、銀河の徒の集い”と仰々しいものではあったが、当時はただのオカルト集団に過ぎなかった」

「そういうそんなこと言ってたな、あのオッサン」

「それが何故、犯罪者集団に？」

「厳密には犯罪は犯していない。“犯罪として認められたことがない”。水面下で密やかに活動し、波が荒立っても癒着した警察と揉み消してきたからだ。人知れず、着実に目標を達成するため計画的に事を進めてきた。……数年前に新教祖として台頭した、アカギという男の指導によってな」

アカギの名が出た辺りで、ダイの目から光が失せる。

「…博士はあの人を知っているんですね」

「さて、な。それはともかく、アカギがオカルト集団の長になって組織の名をギンガ団と改めてから、団体の活動方針は大きく変わった。精々、宇宙との交信を試みたり、怪しげな儀式を執り行ったりしていたのが、人におおっぴらに話せないような浅ましいものから非人道的な行いまでするようになった。それがいかなる内容かは、襲われた君達が良く知っているのではないか？」

「…」

「ポケモンで攻撃してきたな…」

「そうだ。ポケモンとポケモンが戦ったりする分には問題ないが、ポケモンと人では大きな違いがある。人にとってポケモンの技は、強力なものであれば重い怪我を負わせられる危険なものだ。トレーナーのマナーやルールに必ず禁じられているその蛮行を、彼らギンガ団は平然と行う」

現実を突きつけられ、それでも負けん気の強いハルは口を開いて、

「でも、それじゃあどうするんだよ。警察も役に立たないのに、悪者を放つというて良いのかよ」

ナナカマドははっきりと言い切る。

「子供が心配することではない。私達大人が対処する」

「……………」

不服そうだが、ハルはそれ以上にも言わなかった。ダイも聞きたいことは聞けたのでそこそこ満足し、ありがとうございましたと礼を言って引き下がった。

話はそれまでとなり、ナナカマドとフラーは今度こそ帰路についた。別れ際にナナカマドが念を推してきたので、特にハルに対して言い聞かせてきたので、ハルの機嫌は何処までも底辺に。話しかけづらい雰囲気の中、ダイはおどおどしながら頭を下げたフラーを見送ったあと、なんの遠慮も気後れもなくハルに話しかけた。

「ハル、僕達もフタバタウンに戻ろう」

「…」

ハルは足に寄り添ったビッパをボールに戻して懐にしまう。ダイの言葉に応じて…という訳ではないらしく、素っ気なくダイに背を向けて短く答えた。

「俺、家に帰る。またな、ダイ、ラッパ」

「…うん」

表情は隠れて見えなかったが、なにを考えているかは手に取るように判った。その上で、ダイも余計なことは言わずに口数を減らした。

やがてハルも無言で立ち去り、一人だけ残ったダイへ、ずっと話すのを控えていたラッパーが口を開いた。

『ありゃ、納得してないな。ハルの奴、気をつけないとなにをやらかすか判ったもんじゃないぞ』

「そうだね。ハルのことだし」

『ギンガ団とか訳わかんねえ奴らにも出くわしたしな。いつも通りに放っておくとヤバそうだぞ。どうする、止めるか？』

「…」

ラッパーの問いには答えず、ダイは目を伏せて瞼を閉じた。頭の中で、フラーとの出会いやギンガ団の行いを思い返す。アカギの取った行動やハルの感情、ナナカマドの思惑なども一つ一つ整理して並べ、自分がどうしたいのか、どうすれば良いのかを決める。

「僕は…」

心にふと浮かんだ、ギンガ団総帥の顔に眉根を寄せて、

「僕は」

瞼を開けて、出した結論は。

「よし。それじゃあ行くか！」

「行かない」

「おう、行かな——え？」

旅荷物を背負って今にも出発しそうなハルを、ダイが呼び止めた。首だけ動かしてこちらを見るハルに、ダイは同じ言葉を繰り返す。

「聞こえなかった？ 僕はハルと一緒に行かない。ついでに行かせない。ここで待っていたのは、ハルを止めるためだよ」

「おい、ダイ、なに言って……？」

「ギンガ団を捜しに行くんでしょ？ そしてやつつける。ハルらしい、手っ取り早くて簡単な方法だ。誰も悪者を退治しないなら、自分が退治すればいいってね」

短絡的で軽はずみなハルの行動を見透かしてダイは言う。

「ハル、ギンガ団は危険だ。ナナカマド博士の言う通りだよ。関わるべきじゃない」

「ダイまでじいさんとおんなじこと言うのかよ……。じゃあ、ダイはあいつらを放つといて平気なのか？　許せるのか？」

「そういう問題じゃないよ。許す許さないは置いて、事の大きさを考えなよ。ギンガ団は犯罪者で僕達は子供。遊び感覚で行ったら、怪我だけじゃ済まないんだよ」

「む……。許せないもんは許せないんだよ！」

ダイの言い方にハルは明らかに気分を害した。地面を力任せに蹴って八つ当たり、声を荒らげて反論する。

「大人も子供も関係あるか、人として間違っているんだ。それなのに見過ごせて言うのか？　どうなんだよ！」

「ハルが行ってもどうにもならないよ」

「やってみなくちゃわからないだろ」

いつになく真剣で、恐い顔をして睨むハル。対称的にダイはどこまでも落ち着いて憤る友達を見つめる。しばらく睨み合うと、これでは埒が明かないと悟ったか重たい荷物を置いたハルが、腰元のベルトからビッパの収められたモンスターボールを取り外した。

「…それは？」

「ポケモンバトルに決まってるだろ。俺をどうしても止めたいんなら、受けて立ってやろうじゃんか」

やる気満々で言い放たれた。ダイも鼻息を荒くしてボールを取り出す。

…ようなことはしなかった。

「やだ」

「……………なに？」

「嫌だよ、ポケモンバトルなんてしない。僕が嫌いなのは知っているでしょ」

「いや、でも、……………あのな。ダイは俺を止めるんだろ。だったら、流れる的に、ポケモンバトルが普通っていうか、一般的っていうか、」

「誰がそうしなければいけないって決めたの。僕達がポケモンを持っているから？」

「いやそれは、だから」

「この世界がポケモンありきだから？ ポケモンジムやポケモンリーグもあって、ポケモンバトルがスポーツとして認可されているから？ ポケモンの存在価値ってバトルを行うためだけにあるの？ そうじゃないでしょう？ この場において、必ずしもポケモンバトルで事態解決を計らなければならない理由は何処にもないでしょう？ そのところはどうかの、ハル？」

「ぐぬ……………言葉責めは、やめれ。頭が、痛くなる！！ 四の五の言わないで、バトルするぞ！！」

「嫌だってば。僕はバトルしない」

「だったらどうすんだ！　どうやって俺を止めるってんだよ！？」

「止めてるよ。こうやって話している間は、ハルは止まらざるを得ないじゃない」

「……………」

ひとしきり応酬したところで、ハルがプツンと切れた。

「うっが———！！！」

晴れ渡る空に向かって、力の限り叫んだ。近所迷惑も顧みない怒声に、平静を保ちながらもしつかりと両の耳を小指で塞いだダイが、付き合ってもらえないとばかりに荷物を担ぎ直した近所迷惑さんにしつこく聞いた。

「ところでハル、お母さんには話したの？」

「アアン！？　…話したよ。昨日のむかつ腹立つ出来事も、今日旅に出ることも全部。旅は十五才になってからって言われてたけどさ、どうせあと二ヶ月だし、ちょうど良いだろ」

「そっか、ちゃんと話したんだね。なににも言わずに行こうとしなかったんだ。偉いよ、ハル」

「な、なんだよ、急に。それがどうかしたか？」

いきなり褒められたハルは照れながらも訝り、山の方で陽が顔を覗かせているのを確かめるダイを見て、

「うん。足止めは充分かな、と」

「…なんだって？」

「ハル、考えてごらん。ハルのことを一から十まで知っている人が、つまりハルのお母さんが、息子がいきなり家を出て犯罪者を捕まえに行く……なんて話を聞かされて、なにも手を打たないと思う？」

「え」

「まったく、お前達ときたら……」

呆けたハルが問い返す前に、後ろから、つい先日聞いたばかりの声が被さった。

ハルはギクリとして、ダイはふうと一息ついて。

二人でそちらに目を向けてみれば。

「まさか翌日に行動を起こすとは思わなかったぞ。——二人とも、私についてきなさい」

朝一番にフタバタウンへ出向いてきたナナカマドが、厳めしい顔で見下ろしていた。

フタバタウンから歩いてそう遠くない距離に、人口数や活気ともにフタバと並ぶマサゴタウンがある。こちらもやはり田舎の方で人を惹きつけるような代物はなく、類似する建物ならば一件あるが、それは住宅地から離れた小高い山の奥にひっそりと建てられている為に、訪れる人は気づかないことが多い。

人里を嫌うように佇むその家は、ナナカマド所有の研究所であり、邸宅だ。数ヶ月前に土地を購入して町内からこちらへ引っ越したので、外来者などはいまだナナカマドが所在地を移したことを知らずに当惑する姿が見られる。ここへ出入りする人物も現在では極々限られており、家主のナナカマドを除けば、助手夫婦とその一人娘の三人だけとなっている。

場所は、ナナカマド邸の広いリビングルーム。

ここに現在、久方振りとなる見慣れない来訪者が、思い思いの姿勢で席に座っていた。

「……………」

ぶすつとした顔でテーブルに頬杖をつくハルト、

「立派な家だねえ」

呑気にお茶を啜って寛ぐダイだ。

明朝ナナカマドに捕まった二人は、ここ研究所内へ有無を言わず連行された。訪れた時にはお手伝いとしてフラーの姿もあり、ダイとハルをもてなした。

そのフラーは、ただいま席を外している。終始ご機嫌ななめな態度のハルに怯えて、別室に引っ込んでしまっていた。

「ハル、いい加減にしなよ。フラーが可哀想じゃないか」

「…………ふん」

ダイが注意してもハルはいじけっぱなしで、聞く耳を持つとうとはしない。

まるでお子様なハルに、ダイはやれやれと頭を振った。

「わかった。ハルが反省するまでずっとこうしていよう。白旗は随時受け付けるから、早めに降参しなよ？」

「いらいいらい。わかつひゃ、悪かつひあ、許ひてくだはい、ひいまひえん」

頬っぺたを摘まんでギュリツと一捻り。謝罪の言葉はあっけなく聞くことができた。

「ハルなら謝ってくれるって信じてたよ」

「ああそう、そりゃ良かったな…」

指を離してもらったハルは涙目、ダイはどこ吹く風で茶を啜る。心なしか、ハルの席が悪気のない友の手の届かない位置にまで離れた気がする。

そこへ、ゴホンッと咳払いが一つ。

二人とテーブル越しに座っていたナナカマドが、自分そっちな二人にいつものしかめっ面で注意を向けるよう促していた。

「すいません、ナナカマド博士。お話をどうぞ」

「うむ。二人共、ここへ連れてこられた理由はわかっていると思うが」

話し始めたナナカマドはすぐに本題へ移った。むくれたハルは何も言わず、ダイ一人が謝罪を口にする。

「約束を破ってしまってすみませんでした」

「君は確かに約束しただろうが、破ってはいないだろう。それに、そっちのハルは約束を結んですらしていない」

「だったらなんで止めに来たんだよ、じいさん」

テーブルに頬杖を突きながら、ハルが憎まれ口を叩いた。

すかさずダイの手が伸びて、騾のなっていない子供に制裁を加えた。再び引きちぎればかりに捻ると、言葉遣いは大分訂正された。

「……………どうして止めに来たんですか、ナナカマド博士」

「…」

ナナカマドは質問に答えなかった。ただジツとハルを見つめて何かを呟き、懐かしむような顔を見せる。

「なに？」

「いや、なんでもない」

気にしないでくれと手を振り、ナナカマドは立ち上がって窓辺へ寄る。外の景色を眺めながら、後ろの二人には顔を向けずに独りに話し出した。

「昨日お前達の前に現れたギンガ団は、ある目的があってシンジ湖へとやってきた。その目的がなにか、わかるかね？」

「…」

「目的？ って、確かポケモンがどうか……そうだ。俺達、色違いのポケモンを捕まえに来たんだ！ じゃああいつらも？」

「違う。しかし、まったくの的外れというものでもない。希少性でいえばそう変わらないだろう。…いや、色違いよりもっと珍しい、価値で言うなればな」

もったいぶった言い方にハルの目が輝いていく。先程までの不機嫌が嘘のように、ナナカマドの話に興味津々で耳を傾ける。

隣にいるダイは押し黙ったまま、ナナカマドを睨むように見上げる。

「…シンオウは、古来から神々の棲む聖地として語り継がれることが多い。夜闇を生む神、それを払う月の神、先人により造られた巨

大な神、などなど。その内の一つに、湖にまつわる伝説が残されている」

シンオウ地方に存在する三つの湖には、それぞれに三体の神が棲んでいる。

北の湖、エイチ湖には『知識』の神。

西の湖、リッシ湖には『意思』の神。

南の湖、シンジ湖には『感情』の神。

三体の神はシンオウを飛び回り、司る力を人々に分け与えた。彼らのおかげで人は喜び、悲しみ、怒り、決めて、学ぶことを覚えた。役目を終えた三体は湖に舞い降りて眠りについた。暗い水底で微睡む彼らは、シンオウに住む人々をずっと見守っているという。

「古い古いおとぎ話だ。今の子供はもうあまり知らないだろう」

「ああ、知らなかった……。あの湖にそんな凄いポケモンがいたなんて！ 知ってたらすぐにでも捕まえにいったのに！ それで、その神様ポケモンをギンガ団は捕まえようって？」

「その通り。あくまで伝説であり、いるかどうかはわからないがな。少なくともギンガ団は、総帥であるアカギは、実在すると考えているようだ」

「神様か……。どんなポケモンだろうな？ 強いのかな？ 神様なんだからやっぱり強いよな！」

聞き終えたハルの興奮は最高潮で、気になることが山ほど浮かぶ。窓の外から視線を戻したナナカマドに質問をぶつけようとして、

「博士、要点を話して下さい。僕達にギンガ団を追うな、そう厳命

するために呼んだんですね？」

「あ……」

ダイの言葉が出鼻を挫いた。それにナナカマドも頷いてみせた。途端にハルの調子も急降下、上がっていた期待感も相まってどん底に落ちた。重ねて注意を呼びかけるナナカマドへ、風船みたく頬を膨らます。

「何度でも言うぞ。ギンガ団は危険だ。私達に任せなさい。お前達子供は心配なくていい」

「心配なんじゃない、許せないんだよ。クロバットを殴って泣かせたあいつを、俺は許したくない。それって悪いことなのかよ、博士」

「いいや。間違いを正す。それは良いことだ。だが、お前ではギンガ団の行いを正すことは無理だ」

「子供だから？」

ダイにも言われた言葉だ。ナナカマドは頷き、それだけではないと付け足す。

「お前達は幼く、そして弱い。ポケモンを道具として扱い、容赦なく向かってくる犯罪者には到底太刀打ちできない。違うかな？」

「…」

返事はなかった。肯定したも同然だった。

言い返せないハルはすっかり意気消沈してうなだれた。しかしそ

の姿を見下ろすナナカマドは見逃さなかった。膝の上に乗った拳が、きつく強く握られたのを。伏せられたハルの目からは、やる気がまったく色褪せていないことを。

ナナカマドはふっと溜め息を零す。

「――ただし。ギンガ団に立ち向かえるだけの實力を示せれば……」

「え？」

「……」

「ポケモンジムは知っているな？ 各地のトレーナーが集まり、ポケモンバトルの腕を磨く施設がある。トレーナーとしての技量を競う場所だ。そこにはジムを守るジムリーダーがいる」

全国各地方に八つずつ設けられたポケモンジムと八人のジムリーダー。全員がそれぞれポケモンバトルのプロフェッショナルであり、バトルに勝てたトレーナーは一人前として認められる。

唐突に振られた話題にハルはポカンと口を開けたまま、ダイはとことん無表情で話を聞く。

「ポケモンリーグトーナメントのシード権でもある勝者の証、ジムバッジ。これを八つすべて集めることができたなら、むしろ喜んで協力を仰ごう。どうだ、ハル？」

「どうだって……そんなの……良いに決まってるだろ!!」

交換条件付きだがお許しを貰えた。それだけでハルは席から飛び上がってガッツポーズを決める。すぐさま席に座ったまま無然とし

ているダイへ向いて喜びを分かち合う。

「ダイ、ダイ！ 良いってよ、ギンガ団を倒しに行っても。やったぜ！」

「良かったね、ハル。おめでとう」

「おう！ おっと、こうしてられないな。旅支度はもう済んでるから、ワカバタウンに戻って荷物取ってきて、それから…」

「親の許可を貰う。こればかりは私の一存では決められないのでな。お母さんから許しを貰えたら、明日マサゴタウンの入り口に来なさい。渡したいものがある」

「えー。俺は今すぐにでも行きてーよ」

「子が巣立つのには、親も色々思うところがある。しばらく会えなくなるのだから、お母さんと別れの時間を過ごしてきなさい」

「むう。オーケー、明日朝一番で来るから待ってろよ！」

今後の予定をどんどん決めていくハルのはしゃぎっぷりは、水を得た魚のようだ。楽しそうなその様子を見つめるダイは、とてもそんな気にはなれなかったが。

ハルに話しかけられても表情は変わらない。

「何してるんだよ、早く帰ろうぜ。ダイは旅支度だとしてないんだからさ」

「その必要はないよ。僕は旅立たないから」

予想していなかった発言にハルの動きがピタリと止まった。驚いた顔でダイの顔を覗き見て、ナナカマドがハルの考えを代弁する。

「ダイ、君はジム巡りに行かないのか？」

「行きません。僕はギンガ団を倒したいとは思いませんし、ポケモンバトルも嫌いなので」

淡々と話すダイの目は、ナナカマドからは逸れたまま。逆にナナカマドは真っ直ぐダイを見据えて、意志を尊重した。

「それならば良い。旅に出るのは、ハル一人で決まりだな」

ダイは応えず、ずっと不思議な顔をしているハルへと向く。

「ハル、どうしたの？ 早く帰りなよ。お母さんにこのことを伝えて、夜更かししないで早めに寝ること。寝坊はしないと思うけれど、一応ね」

「ああ…」

何か言いたげなハルだったが、ダイの言葉に従ってリビングを出て行った。ハルが居なくなったのを確認すると、そこでようやくナナカマドの顔を直視した。

「博士、どういうつもりですか？」

「言葉が足りないな。何を聞きたいのか、明確に言わなければ」

「どうして旅に出ることを許したんですか」

ダイの口調は至って穏やかだが、両の目には怒りを燃やしていた。きつと止めてくれるだろうという期待を裏切った、失望も含む。

「道中で悪さをするギンガ団を見かけたりすれば、ハルは迷わず関わりますよ」

「ジムバッジを集めるまではギンガ団とは接触しない。建前だろうと無いよりはマシだ。それに、そうなるのを止めるのは君の役目だろう」

「どういう意味ですか？」

「ハルのお母さんから聞いたぞ。君とハルはとても仲が良く、無茶なことばかりする息子がいつも世話になっていると。今日の朝も、ハルを止めるために先回りしていた」

「……勝手ですね。断られるとは考えなかったんですか」

「断る理由があるとは考えなかったな。ポケモンバトルが嫌なのはわからなくもないが。それ以外に、ギンガ団と関わりたくない理由があるのか？」

「…」

ダイは口ごもり、また目を伏せた。言うかどうかを数瞬迷い、言いつらそうに答えた。

「ギンガ団と関わりたくない理由は……怖いからです」

「怖い、か。もっともな理由だな。加減を知らない悪の組織と対峙して、恐怖しない子供はいない」

「……………わかって頂けましたか？」

最後にダイが尋ねて、ナナカマドはゆっくりと頷いた。話を終えて用の無くなったダイは席を立て一礼。そして足早に去っていった。

リビングに一人残ったナナカマドは、提示された答えを繰り返して呟く。

「怖い……。友人を差し置いてでも優先しなければならない怖れか」
責めるでもなく、認めるでもなく。独りごちたナナカマドもリビングを後にして、自室へと返っていった。

ダイが邸宅の玄関から顔を出すと、先に帰ったはずのハルがそこにいた。

ハルはお尻に小さな火を灯した小柄なポケモンと戯れ、こちらには気づいていない。楽しそうに遊ぶ姿をしばし静観したダイは、近くまで寄って声をかけた。

「ハル、その子は？」

「お！ やつと来たな。こいつは庭先で遊んでたから相手してやってたんだ。……ってコラ、やめろってば。くすぐったいっての」

ポケモンに服の上をチョロチョロと動き回られ、笑いながらハルが答える。それよりもダイは、ハルの発言の最初の方に興味を持った。

「僕が来るのを待っててくれたんだ。ハルにしては珍しいね」

「ダイも今朝早かったじゃんか、たまには良いだろ？ でも、やっぱり待つのは性に合わないな」

頭の上に移動したポケモンを捕まえて地面に下ろし、ハルは手を振ってお別れした。ポケモンも満足したらしく、ナナカマド邸へ駆けだして中へ入っていった。

「それじゃ、帰るか」

「…」

あっけらかんとした態度。何を言われてもおかしくないと身構えていたダイは肩すかしを喰らう。

「……怒らないの？」

「怒るって、何を？」

「ハルと一緒に行かないって言ったことさ。ギンガ団とは戦わないって」

「ああ、それな。怒ってねえよ」

聞かれたハルはあっさりと否定した。今度はダイも正直に驚いた。とぼけている訳でもないハルは、不機嫌だった時とは打って変わって穏やかな様子で続けた。

「そりゃさ、朝に立ちはだかれた時はムカッてなったけど、結局旅には行ってもいいってことになったし」

「でも」

ダイの判断はハルの考えと真っ向から対峙する。ギンガ団を追わないということは、ギンガ団の行いを許すことであり、逃避以外のなにものでもないのだから。

けれど、ハルはダイを責めなかった。

「ダイはギンガ団が怖いんだろ？」

「…聞いてたの」

「外まで声が漏れてた。盗み聞きはしてないぞ」

少し焦って弁解するハルを見つめて、盗み聞きしたのは良いとして、やはりダイには判らなかった。

友達を裏切ったのに許すハルの気持ちだが、判らない。

「ダイの口から怖いって言葉が出るとはなく。でも、嘘ついてるよ

うには見えなかったしさ」

「あれは…」

「良いつて、ギンガ団が怖いんだろ？　だったら無理に来てくれて頼む訳にはいかないじゃん」

「…」

二の句を継げないダイに、ハルはニカッと笑う。
心配も不安も全て吹き飛ばすような、力強い言葉をくれる。

「俺がダイを守ってやるよ。今は弱くても、いつか必ず強くなって、ダイもみんなも守る。悪い奴らなんか全員やつつけてやる。な？」

「――」

ダイは、何も言い返せなかった。

笑顔でありがとうと礼を言うことも、冗談として余計なお世話だと笑い飛ばすこともできなかった。ハルの言葉に衝撃を受けて、立ち竦むしかなかった。

その様子に不審がって近付いてくるハルを押しつけて、ダイは逃げようとしてその場を走り去る。

追いかけてくるハルに絶対追いつかれないよう、がむしゃらになって逃げ帰った。

円盤の時計の針が、どちらも12の位置を過ぎた。

ダイはこの時間になってもまだ眠りにつかない。毎日きっかり二十時にはベッドに入るのに、今夜は椅子に座って何も無い場所をひたすら見つめている。

ベッドの隅に立てられた止まり木にはラッパーが、うつらうつらと舟を漕ぐ。ダイの正面にある飾り棚上の水槽で泳ぐクインは、時折目をパチクリさせながら自分の主人を眺めている。

明かりを消した部屋はとても静かだった。静か過ぎて耳鳴りがするなかで、ダイは何もせずじっと座っていた。

頭の中は空っぽだった。悶々と物思いに耽っているということもなく、憔悴したように動かなかった。

『…なあ、ダイ。朝までそうしてるつもりか?』

時計の短針が1に差しかった頃。ふと目を覚ましたラッパーが、寝る前と同じ姿勢で微動だにしていなかったダイを見咎めて話しかけた。ダイから反応らしい反応はなく、聞こえていない………と思いきや、ダイはラッパーを見ずにポツリポツリと話した。

「ハルがさ、言ったんだ。僕を守ってやるって。強くなって、みんなを守るんだって」

『ハッ、弱いくせに口だけ一丁前なんだからよ。守るって言うならまず、』

「僕は自分のことしか考えてなかった」

ラッパの軽口を無視する形で、ダイは独り言のように呟く。

「ギンガ団と関わりたくない。あのアカギって人とは二度と出会いたくない。そう自分の都合だけを並べて、他のことには目もくれないで、ハルみたいな考えを抱こうとすらしなかった」

自分を責めるような言い草だが、罪の意識を感じているのとは違う。自分と他人との相違点を見つけたことに、ただただ驚愕している。

聞いているラッパは良くわからず、相槌を打つのもどうかと思い、言葉を濁した。

『あー、別に普通じゃないか？ 誰だって一番可愛いのは自分なんだし、ハルは単にバカなだけだし。気にしても仕方ないだろ』

「…」

『まあアレだ。ダイがどう決意しても、俺達はダイに付いていくからよ。あまり気にするなよ』

何やら相当ショックを受けているらしいので、適当な励ましを送ってラッパは黙った。部屋の中はまた静けさを取り戻し、ダイの目は水槽のクインへと移った。

胸びれに古傷を持つクインが、普通のコイキング以上に上手い泳ぎ方で水槽の中を廻っている。途中でダイの視線に気がつく、ガラス越しに近づいてきて親愛の情を見せる。

ダイはそっと手をガラスに這わせた。クインの輪郭をなぞるように指を滑らせ、主人に最大限懐いているクインを喜ばせる。

「クイン。ラッパ。君達は、僕についてきてくれるかい？」

不意に行われた質問。

返事はなかった。ラッパはすでに寝入り、クインは人の言葉を喋れない。

それでもダイは問いかける。

「この先にながあっても、僕の身になにかが起ころうとも、…ついてきてくれる？」

ジツと主の言葉を聞いていたクインは、コクリと頷く仕草をした。なによりもダイの励ましとなる返事だった。

お返しにダイは優しく微笑んで、おやすみと言って水槽から離れる。

部屋の真ん中に立って天井を仰いだ。その顔に迷いはない。

怖れを何一つ感じさせない、強い表情をしていた。

翌朝のこと。

202番道路へと続くマサゴタウンの入り口。家族との別れを済ませてくるであろうハルを待ったために、朝日が顔を出すよりも早く待ち合い場所に訪れたナナカマドは、

「グッモーニン！ 遅いぜ、博士！！」

「…………おはよう、ハル。ここにはいつ頃来たのかな？」

「フッフーン。もちろん、明朝三時に決まって」

「その時間帯は深夜だ。明朝とは言わん」

ハレ？ と小首を傾げる早起きさんはさておこう。

ナナカマドの後ろにはもう一人、フラーの姿があった。昨日のこともあってまだビクついてはいるものの、わざわざハルを見送りに来てくれたらしい。ナナカマドの陰から少し顔を出して、おはようございます…と消え入るような声で挨拶をした。

ハルはナナカマドに隠れるフラーを見つけると、遠慮することなく近付いていく。思いつき警戒して縮こまったフラーに何をするのかとナナカマドが注意していると、ハルは驚くほどの殊勝さで頭を下げた。

「昨日は恐がらせて悪かった。ごめんな」

「え…。あ、いえ、こちらこそ、失礼しました！」

会って一言目で謝られるとは思わなかったフラーは目を丸くして、しかしおかげで緊張はいくらかほぐれた。わずかながら、フラーにも笑顔が取り戻される。

場が落ち着いたところで、ナナカマドがハルに最終確認を取る。

「ハル。君がこれから旅立つ理由はなにかね？」

「ギンガ団をやっつけ——じゃなかった。ジムを回ってバッジを

手に入れる!」

「うむ。それでは旅の途中、ギンガ団を目撃した場合は?」

「……………倒」

たおしたい、という本音は飲み込み。

「……………」

…大人に、任せる」

「やたらと間が開いたが、いいだろう。その二つを忘れないように。それではこれを君に、私からの餞別だ」

そう言ってナナカマドが取り出したのは、モンスターボールと赤い小型の電子機器。機器の方は使い道がわからず、ハルは不思議そうな顔で受け取る。ボールはなんとなく察しがついていたので、地面に放ってみた。

中から出てきたのは、お尻に小さな火を灯した炎タイプのポケモン。

「おお! お前は昨日の!!」

「“こざる”ポケモンのヒコザルだ。昨日は相手をしてくれたようだな。君に良く懐いている」

ボールから出たヒコザルは、すぐに昨日と同じようにハルの体を登頂して頭に乗った。するとハルの腰にあるボールからビッパが出てきて、ヒコザルを押しつけてそこへ鎮座。ここは自分の指定席であることを主張しているようだ。後輩としての立场上折れるべ

きなのはヒコザルだが、“まけずぎらい”な個性であるが故に折れず、ビツパに宣戦布告。ハルの頭の上でキーキーと騒ぎ始めた。

「イテテ、イタイツ。こらお前ら、これから一緒に旅するんだから仲良くしろって！　だよな、博士？」

「ああ。そのヒコザルを連れていきなさい。きっと君の助けになる。それから、その『ポケモン図鑑』だが、」

小型の電子機器について説明しようとナナカマドが咳払いをしている間に、ハルは話を聞かずにシオルダーバッグを担いで走り出した。頭には喧嘩真っ最中の二匹を乗せて、おかんむりなナナカマドへ振り返り大声で叫ぶ。

「ハル、話はまだ終わってはいないぞ！」

「悪いけど、もうジツとしてられねーよ！　ジムバッジ全部集めて来るから待っててくれよな！　目標は、一カ月以内だー！！」

シンオウ地方はどう工夫したところで一カ月では回れないのだが、ハルはナナカマドの気苦労などどこ吹く風で、大きく手を振って別れの挨拶を送った。

「ヒコザルありがとなー、博士ー！　それじゃ、行ってきまーす！　」

「……………なんとも忙しない奴だ」

元氣良く駆けていく後ろ姿を見送るナナカマドは、突風にでも煽られた気分になる。今更ながら不安が押し寄せてきて、疲れたよう

にため息を吐いた。

傍らのフラーも同じ気持ちらしい。ナナカマドの袖を握り締め、不安げな表情で顔を見上げた。

「博士、あの……本当に、行かせて良かったんでしょか。普通に旅するのも大変なはずなのに、ジムを巡ったり、ギンガ団を追ったり……。もし、ハルさんの身になにかあったら……」

「フラー、君は優しいな。しかし心配は無用だ。ハルが私の言うことを守らなくても大丈夫なよう、彼らに連絡を入れてある。それに、彼もついていってくれる」

ナナカマドの言う彼らに心当たりのあるフラーは、もう一人追加された彼とは誰なのだろうと思悩む。

その答えはハルと入れ替わりに訪れ、ナナカマドが声をかけて教えてくれた。

「おはよう。どうやら君も旅立つ決意を固めたようだな」

「……やっぱり、お見通しですか。おはようございます、博士。それに、フランシア？」

フラーがあつと声を洩らす。

そこにいたのは、旅の準備を整えてきたダイ。トレードマークの青いベレー帽を被り、気温の高さに合わせて半袖のシャツと長いスラックスを着用。背中に必要量を詰めた手頃な鞆を背負って、二人の前に立つ。

きつと来るだろうと予期していたナナカマドは、多くは語らずに懐からボールと機器を取り出して、ハルと同じくダイに手渡した。モンスターボールの中身は、“わかば”ポケモンのナエトル。土

の甲羅に頭の上の新芽が特徴の草タイプポケモン。

ダイはボールからナエトルを出して、よろしくと挨拶を交わす。ナエトルもお辞儀を返して、ダイはそのままボールに戻さずに連れて行くことにする。

もう一つ、ダイはナナカマドからポケモン図鑑についての説明を受けた。野生、あるいは誰かに捕獲されたポケモンと出会う度に、自動でそのポケモンの生態や能力値を調べてくれるハイテクメカで、本来はポケモンの研究を進めるために造られたものだが、危険な旅になるかも知れないので持っていて欲しいとのことだ。

「ハルがこの図鑑の使い方を聞かずに行ってしまったから、追いついたら君から教えてくれるか？」

「はい。僕の方からしつかりと言いつ聞かせますので。ナナカマド博士、なにからなにまでありがとうございます」

ダイは手厚い支援を送ってくれるナナカマドへ深々と一礼し、待っていたナエトルを連れて歩き始めた。まだ馴れないのか、オドオドしているフラーにもじゃあねと手を振って別れ、去り行く前にナナカマドから呼び止められた。

「ダイ、一つ聞きたいんだが。……怖れは、もう良いのか？」

「…」

「ギンガ団が怖いんだろう？」

意地悪な質問だ。だが、ダイはちゃんと答える。

「怖いですよ。怖いけれど」

「けれど？」

「……………友達を裏切るくらいなら、いくら怖れていたって立ち向かいます。——可能な範囲内で」

わずかに吹っ切れた様子の解答に、ナナカマドは納得して頷いた。質疑応答を終えダイは、改めてマサゴタウンを出立する。

町を離れてしばらく、木々の合間や揺れる葉の隙間から射し込む光が強くなる頃。

ダイは道路脇の林の前でハルの姿を見つけた。いつもと同じ白と橙のストライプが目立つ長袖シャツを着て、定位置を勝ち取ったビツパを頭に、負けて拗ねたヒコザルをしゃがんで励ましている。

ナエトルを連れて歩くダイが近付くと、気がついたハルはよっと手を上げて体を起こした。

「遅い！！　ちんたら歩いてたら日が暮れるぜ？」

「陽は昇ったばかりだけどね。というか、ハル……………また、待ってくれたの？」

「おう！　って、なに全身をわなわなさせてんだよ。俺が待つのがそんなに珍しいか？」

「うん。色違いを十匹同時に発見するくらいには」

「そんなでもないな。あるある」

どうでも良さげなことを適当に話しつつ、ハルはダイと向かい合っ
てニツと笑った。

「やっぱり、追いかけてきたな！」

「どうしても放っておけなくてね」

「だよな！　ギンガ団の奴らは、放っておけないよな！」

「決めつけるには早計だよ」

友達と意見が合わさったことに喜ぶハルを、ダイは首を振って正す。

ちゃんと自分が旅立つ理由を伝える。

「僕は、ハルを追いかけるんだ。ギンガ団じゃなくて、君をね」

「…それ、へ理屈って言う」

「良いでしょ。要は追いかけるか否か、なんだから」

追う対象がハルだろうとギンガ団だろうと違いはない。どちらにしたって、旅立つことに変わりはない。

やや納得したハルは、それならばと仰々しい仕草でダイのことを指差した。

ここから先は話をする機会も減るだろうから、言いたいことを全部喋っておく。

「俺は、必ずギンガ団を倒す。倒せるだけの実力を身につける。ジムバッジを全部集めてな」

「ジムリーダーは手強いよ。きっと、一朝一夕ではいけない。それでも行くよね？」

「おう！ どんどん先に行つてあつという間に集めてやるからな。ダイが追いつく頃には、最強のポケモントレーナーになつてること間違いなしだぜ！！」

腕を突き上げて威勢良く宣言して、ハルは次の街へ続く道を先に進んだ。

離れたところから、大きな声をダイの元まで届かせる。

「必ず追いついてこいよー！ もう待っててやらないからなー！」

頭から振り落とされかけているビツパと、追いかけてっことを楽しむヒコザルを連れて、ハルはそれっきり、走り去っていった。

返事は聞かなかった。それは、次の機会に取っておくのだろう。

友達の新たな門出を前に、ダイもリュックを背負い直す。

傍らでわくわくしているナエトルを仲間に加えて、ハルの後を追う。

「僕も頑張るよ。ハルやみんなを守るように…ね」

自分のことばかりでなく、誰かのためになにかをしよう。そう自身に言い聞かせて。

第二話 双葉は発つ（後書き）

Q, ここまでバトルらしいバトルをしてなくね？

A, ダイのセリフを参照。キンスンナシ。

第二話 揺らめく花

side “闇—dark—”

「……もしもし、こちらはナナカマド。聞こえるかな……良かった。その様子だと、無事にミオシティに着けたようだな」

「そこから218番道路を渡ってコトブキへ、南下してある202番道路を行けばマサゴタウンがある。すでに知らせたと思うが、所在地は町外れに移したので間違えないでくれ。奴らの監視に触れるのは避けるべきだろう。少なくとも、今は」

「君達の協力を得られて私も心強い。内心、ギンガ団を相手にどう対処すれば良いのかで頭を悩ませていたのだ。特に——本名は控えよう。“君”のことは、友人の高い評価もあって、活躍を大いに期待している」

「ギンガ団の動向については話したかな？ シンジ湖でなにやら不穏な動きを見せていた件だ。人目を気にしなくなっていることといい、アカギ自ら現地に赴いたことといい、計画は最終段階に入っている可能性がある。……いや、君達のせいではない。上層部を説得して駆けつけてくれただけでも、私は非常に感謝している。礼を言うにはまだ早いのだがな」

「それはそれとして、子供達の件についてだが、二人共旅立っていた。仕事を増やして申し訳ないが、彼らのことを気にかけてやって欲しい。そそっかしいのはハル……そう、バトルフロンティアの『頭脳者』（ブレイン）の一人、“塔達”（タワータイクーン）クロック——彼の息子だ。潜在的に父親の類い希な才能を受け継いでいるかも知れないが、いや、あれは発展途上だ。年相応に浅はかな部分もあり、目を離すと危険だろう。それと、ハル以上にもう一人の少年のことを憂慮して欲しい。私の目から見て、どうも彼の方がハルより——」

ブツリッ。

受話器越しに行われていた秘密の会話が、ふとした拍子に途切れた。建物の電源が落ちて、話相手との回線が寸断されてしまった。研究所内が真っ暗闇に包まれる。卓上に前のめりになっていたナカマドは体を起こし、ただの停電だとして、自家発電機からの電力供給に切り替わるの待つ。

一分とかからずに天井の照明が点いた。その他の機器やら設備やらも稼働を再開、問題がないことを確かめたナナカマドはまた受話器を取って相手に繋げようと、

「……………」

伸ばした手を止めて机の脇へ、備え付けられたキーボードの数字キーに特定の番号を打ち込んでEnterを押した。

パシュッと、鍵のかかっていた引き出しの一つが開く。と、ほぼ

同時に、切り替わった予備の電源も落ちた。

ナナカマドの表情がいつもより一層険しくなる。油断なく暗がり
に目を凝らしつつ、引き出しに入っていたモンスターボールを二つ
取り出す。椅子から立ち上がって、辺りに気配がないかどうかを探
り、背後から声かけられた。

「夜分遅くに失礼。ナナカマド教授」

「……“教授”か。その呼ばれ方は何年振りになるだろうな」

ナナカマドが振り向くと、薄暗い中にシルエットが浮かび上がっ
た。ナナカマドにとっては懐かしく、今ではすっかり見違えた……
…見下げ果てた、男の立ち姿。

ギンガ団総帥アカギその人が、ナナカマド邸に訪問してきた。

「タマムシ大学以来だな。こうして、また会える日が来るとは思わ
なかった。………息災にしていたかな、アカギ君」

かつての教え子に、ナナカマドは比較的友好的な態度で接する。
手の中のモンスターボールはいつでも放てるように気構えながら。
アカギはゆったりと佇み、用件だけを淡々と伝える。

「半年前にこちらから送られた依頼について、我々ギンガ団への全
面的な協力を要請していた。その返答をお聞かせ願いたい」

「返事は無視する形で行ったつもりだが」

「もしくは、国際警察への救援という形で、か」

会話のあとに流れる沈黙。二人の間に緊張が走る。

表情を変えないアカギは、背広の懷から黒色の『ハイパーボール』を取り出して最終確認を取る。

「教授。こちらが“平和的に”協力を仰いでいるうちに承諾して欲しい。貴方はかつての恩師であり、私は未だに貴方を尊敬している」

「気持ちはあるがたく受け取ろう。だが、君のやろうとしていることに荷担するのは、学者として、人としてのプライドが許さない。

——犯罪に手は貸さんよ、“アカギ総帥”」

ナナカマドは、それがなにを意味するのかを理解した上でキツパリと断った。

わかりきっていた答えを受けたアカギは、やはり表情を変えることはなく。

「残念だ。——“ナナカマド博士”」

会話を終えた直後には、二人はボールを放っていた。

アカギが繰り出すは、“めいそう”ポケモンのチャーレム。人の姿に近く、格闘タイプとエスパータイプの技を多く覚える。軽い身のこなしで敵を翻弄しつつ、強力な打撃技を喰らわせようと狙う。

ナナカマドが繰り出すは、“がんせき”ポケモンのゴローン。全体的に丸みを帯びた、ゴツゴツした岩の体を持つ。ボールから出てすぐに両手両足を畳んで球体状になり、その場で猛回転を始める。

「ゴローン、“ころがる”！」

先手はナナカマドのゴローンが取った。回転数を上げた大岩の塊が勢いよく飛び出す。

待ち構えるチャーレムはアカギの指示を待つ。迫るゴローンを目

前に、アカギはチャーレムへ命令の声を“出さず”、両目を閉じて左手を上げた。

大丈夫だよ、とナナカマドは言った。

ギンガ団の接触から数ヶ月が経ち、研究所を山の中腹に据えたその日から、何度も聞いては返された言葉だ。

君はなにも心配しなくていい。国際警察の人達は優秀だ。ギンガ団の企みは必ず阻止される。必ず、平穏無事に事は済む。

大丈夫だよ、と。

その言葉を信じて、湧き上がる不安を抑えこんできた。

湖でギンガ団と対峙した時も、ナナカマドの言葉があつたから勇気を振り絞れた。

気づいていたくせに。

大丈夫なはずが、ないのに。

ムツクルの鳴き声が朝を告げるのを聞きながら、フラーは立ち尽くしていた。

焦げた臭いが鼻に纏わりついて、そこかしこでは火種がくすぶり、まだ煙が立ち上っていた。

ナナカマドの邸宅が焼け落ちた。

夜中に町まで聞こえるほどの爆発音で住民全員が起こされ、消防隊や救急車が相次いで町中を走った。火災の消火を終えて救助活動が行われる頃には、物見高い住民達でごった返していた。

両親の制止を振り切って出遅れたフラーが駆けつけた時、そこにいなければならぬ人物が数人しかいなかった。警官だ。

警官のうち一人二人は救急隊員と話し合い、生存者はいない、お年を召していた、単なる事故だろう、などと決めつけて、捜査を打ち切ろうとしていた。

フラーは首を振った。これは事故じゃない、事件だと。

山奥に所在地を移していたのは幸いだったと話しているが、ナナカマドは襲われると知っていたから引越したのだ。あらかじめ、町の方に被害が及ばないようにと。

身に危険が及ぶから、誰の迷惑にもならない場所へ移動した。：フラー自身、その行動が“大丈夫でない”裏づけであると、薄々感づいていた。

ずっと自分をごまかして、きっと彼の言葉通りになると願って、結果はそうならなかった。

ナナカマドは、行方不明となってしまった。

「:ツ」

いてもたってもいられなくなり、フラーは瓦礫しか残っていない敷地内に駆け込む。立ち入り禁止のテープは張られてすらない。

玄関を跨いで廊下を行き、リビングを過ぎて研究室へ。

壁も、天井も、扉もない。何処までも吹き抜けて敷地の奥の林が見通せる。

なにかもが変わり果てた中でフラーは走るのを止めて、へたりと座り込んだ。瓦礫の破片が足を傷つけたが、気にする余裕もなかった。

——私のせいだ。

私がシンジ湖でギンガ団に姿を見せたから、博士がまだマサゴタウンに残っていることを知られた。

近づいちゃいけないって、あんなに言われていたのに。

狙われていたのは博士だったのに。危険な目に遭うのは私じゃなくて博士なのに——！！

後悔と自責の念が押し寄せる。

どうにかしたいのにどうしたら良いのかわからない。泣いたって状況は一向に良くなることはないことはわかりきっているのに、自分にながでできるのかがまったく思い浮かばない。

ジレンマに陥ったフラーは身動きが取れなくなった。意味もなく泣き叫びたい気持ちを必死に堪えて嗚咽を洩らす。

その時、フラーは物音を聴いた。

ナナカマドの研究室、彼の机があった場所。その近辺からカタカタ揺れ動く音がする。フラーは立ち上がって近づき、瓦礫を横に押しやって埋もれたものを手に取る。

音の正体はモンスターボール。昨晚、ナナカマドが手にしたうちのひとつだ。フラーが持つとボールは開かれ、“ペンギン”ポケモンのポッチャマが飛び出した。

「…ポツちゃん！」

青と白の見慣れたポケモンを目にしたフラーは一瞬だけ安堵感に包まれた。愛称で呼ばれた『ポツちゃん』も同じ想いで、互いにギョツと抱きしめ合った。

「ポツちゃんが無事で良かったです……！！ ……ポツちゃん、博士は？」

小さな体を抱き寄せながらフラーが聞くと、ポツちゃんは哀しげに首を横に振った。やはり、ナナカマドはギンガ団に連れ去られてしまったらしい。厳しい現実には、取り戻した元気はまたフラーから失われていく。

落ち込む彼女に居たたまれなくなったポツちゃんは、なにを思っ
てかフラーの腕から逃れて何処かへ走り出す。慌ててフラーがついていくと、ポツちゃんは瓦礫の山をせっせと掻き分けていた。なにかを探しているようだ。

フラーも一緒になってコンクリートの破片やら鉄くずをどかしていく。最後の一つをのけてそこにあったのは――ポケモン図鑑。ポケモンの生態を調べるための道具、その他に“ポケモンの能力値や技を調べることで、バトルに役立てることができる”。

ポツちゃんは図鑑を両手に抱えるとフラーに差し出した。受け取って欲しい、そう目は訴えている。

フラーは煤で少し汚れてしまったポツちゃんを、同じく汚れてはいるものの、壊れた様子のない図鑑を見て、震える手で掴んだ。

泣き腫らした目元に涙はもう残っていない。今は、泣くべき時ではない。

自分にできることはなんなのか、答えが見つかったわけでもない。それでもフラーは立ち上がる。

片腕にポツちゃんを抱えながら。

片手にポケモン図鑑を携えながら。

泣き虫な少女は廃虚の真ん中で、弱い自分を奮い立たせてくれるポケモンと道具を傍らに、自分にできうる限りのことをやってみよう、そう心に決めた。

第三話 美男子現る（前書き）

登場人物（適当）

ダイ：基本は優しい少年。時折ドS。

フラァ：優しいけれど引っ込み思案な少女。時折大胆な行動に出る。

ギンガ団の構成員その1：威勢が良いばかりの××。このお話一番の苦勞人。同情してあげて。

ギンガ団の構成員その2：相方よりわきまえている。このお話一番の希薄さ。同情してあげてよお。

エージェント・ハンサム：ハンサムなハンサム。ハンサムとしか言いようがないハン（ry。辞書などに載っている“ハンサム”とは決して混同してはいけない。それは“ハンサム”と呼ばれる人達への侮辱と同義である。ハンサムとは、そう……『ハンサム』なのだ。

第三話 美男子現る

シンオウ地方でおそらく最大となる都市、コトブキシティ。そこかしこに建ち並ぶ高層ビルやマンションの大きさに、初めて訪れた人の多くを圧倒させる。

街をより賑わせている『グローバルターミナル』では世界中のトレーナー達が情報を交換しあい、『TVコトブキ』は地方各地の出来事を最新ニュースで届けたり娯楽番組を放映。『ポケッチカンパニー』は自社特製の便利ツール『ポケモンウォッチ』を新販売、街中でピエロの格好をした男達が製品の宣伝に奔走している。

何処を見渡してもワイワイガヤガヤと笑い声や話し声が絶えない、賑やかで飽きがこない大都会だ。

動き回るのに疲れれば、街の中央に位置する大きな公園で一休み。芝生の上に寝転ぶも、噴水近くで涼むも良し。ベンチに腰掛けて青空を仰ぐのもなかなか気持ちが良い。

とはいえ。

それらを毎日毎日繰り返せば、やっぱり飽きはくるというもの。

「ふあ……ああ」

退屈に事欠かないコトブキシティで、それはそれは大きな欠伸が出た。

街にやって来て数日。人ごみの中を歩くのが苦手として散策もそこそこに、公園の一角にある木立の一つに背を預けた少年から漏れたもの。

頭からベレー帽を取って傍らに置き、短い黒髪をそよ風で揺らし

ながら。

友達のあとを追って旅立ったダイは、今日も今日とてのんびんだらりと過ごすのだった。

〈3〉

時刻はすでに正午を越えた。お昼を食べようか、それとも空腹感はありませんので、引き続きダラダラと過ごそうか。暇を持て余したダイが自堕落な考えを巡らせていると、服の裾を引っ張られる感触がした。新入りのナエトルが裾をくわえて、主人になにやら伝えようとしている。

ダイはナエトルの行為をやめさせた上で訊ねる。

「どうしたの、ナルト。お腹空いた？」

やっぱりお昼にしようか、と早とちりするダイに、ナエトルのナルトはブンブン首を振って一声鳴く。その様子を上方の木の枝から眺めていたラッパーが、ナルトの言いたいことを代弁してくれた。

『まだこの街を出発しないのか、だってよ。俺も同感だぜ。ハルを追わなくて良いのか?』

「うん。大丈夫」

『大丈夫だったってなあ。追いつけなくなるんじゃないのかってナルトが心配してるんだ。俺は、なにか考えがあるんだろうってわかるから良いけどよ』

ラッパーから納得のいく説明をしてやれ、と催促された。ダイはふむと頷き、待っているナルトではなくラッパーにこう問いかける。

「ラッパー、初めコトブキに來た時に街頭で流れてたニュース、覚えてる?」

『えーっ、そこそこ。それがどうした』

「それじゃあ、今日のレッスンいつてみよう。内容は緊急速報ね」

説明を待っているナルトの頭を撫でながらダイも静聴する。真意は図りかねるが、レッスンと聞いたラッパーは深く考えずにいつもの稽古を始めた。

『んー、ゴホン、んんっ……………よし。———“ただいま速報が入り

ました。ついさきほど、クロガネシティとヨスガシティの中間を結ぶテンガン山トンネルの一部が崩落し、一時通行止めとなっております。幸い、この崩落事故による付近の住民やポケモンへの被害はないとのことです。現場ではすでに交通を再開するための工事が進められておりますが、トンネルは当分閉鎖されることに。二つの街への行き来が困難となるでしょう………」

スラスラと口から出てきたのは、中年男性のお堅い声。当日、耳で聴いた声と内容をそっくり“ものまね”してみせた。

聞き終えたダイはお疲れ様と労い、不思議な顔をしているナルトへ一言。

「大丈夫、追いつくよ」

『いや、それだけじゃわかんねえって』

突っ込まれたがダイは気にしなかった。また欠伸をしてまぶたを閉じてしまう。

ナルトもラッパに同意見で、何度も服の裾をぐいぐい。起こそうしたが、ダイは眠りこけて反応を返さない。“まじめ”な性格のナルトはこの主人の体たらくさにプンスカと怒り出し、同じく呆れながらも怒ろうとはしないラッパが間に入った。

『諦めろって。大体ダイが大丈夫って言ったら、十中八九は大丈夫になるぞ。心許ないだろうけどよ、俺もクインも、それは保証するから』

そこまで言われて、ナルトは不服そうな顔はしたものの、裾を離した。ダイをちらと睨み、ぷいっとそっぽを向いて陽の当たる方へ、座って日光浴に浸った。

ラッパーも暖かい陽射しを受けてうとうとし始めた。遠くでポケモンを連れ添って遊ぶ子供達の声を聞きながら眠りにつく。

都会の喧騒は薄れ、平穏な時間がダイ達を包み込んだ。一匹、噴水の底が浅いからと外に出してもらえなかったクインのボールが、ダイの腰元で不満げに揺れていた。

どれくらい時間が経っただろうか。眠りが浅くなってきたダイの耳に、“いやなおと”が聞こえてきた。

複数の声がなにか言い争っている。正確には、一人を相手に二人が一方的に怒鳴り散らしている。

ダイの意識がだんだんハッキリしていき、目を開けると、先に起きたナルトがお腹に飛び乗って起こそうとしていた。さっき以上に急かしているナルトに、上から舞い下りて肩に留まったラッパーも加わる。

『ダイ、この声……』

気になったのは、二人に言い寄られて困っている方。ダイもラッパーも、ナルトは特に聞き覚えがあった。

その声が、一際高い声量で叫ぶ。

「…………やめて下さい！！　それ、返して下さい！！」

「変な言いがかりをつけてきたのはそっちだろ。迷惑かけた罰として、これは没収する」

「返せと言われて返すマヌケがいるか？　この凶鑑は、我々ギンガ団が有効に使ってやる。ありがたく思うんだな！」

公園の入り口付近で揉めている三人のうちの一人が、最近知り合った女の子だった。名はフランシアで、フラーと呼ばれていたか。

ポケモン博士であるナナカマドの助手夫婦の娘で、自身も研究や家事の手伝いをしている。マサゴタウンにいるはずの彼女が、何故コトブキシティにいるのだろうか。

ダイは疑問を解くよりも、フラーに付きまとっている二人組に注目した。全身銀色の奇抜なスーツを身に纏った男達は、何者かなんて考えなくてもわかる。――ギンガ団の構成員だ。

ギンガ団と聞いたダイの表情は強張る。こんなに早く再開するとは思っておらず、慎重に行動しなければ……そう自らに釘を刺したのだが。

「お願いです、返して下さい！」

「あー、鬱陶しいな。いい加減離れろ！！」

ギンガ団の一人が詰め寄るフラーの肩を突き飛ばした。地面に倒れ込んだフラーは短く悲鳴を上げ、それに怒ってボールから出てきたポツチャマがギンガ団に“たいあたり”。それは避けられた挙げ句に思いつき蹴り返されて、ポツチャマはフラーの元へ転がった。

「ポツちゃん！」

「弱いポケモンだなあ。奪い取るのはこれだけで十分か。弱いのはいらねー」

ポツチャマに蹴りを入れた男は、手にした赤い小型の機器をヒラヒラ振りながら歩き去る。口元に下品な笑みを貼りつけ、傷ついたポツチャマを抱えて泣きじゃくる少女に良心を痛める様子もない。

一部始終を公園の反対側から見せられたダイ達は、

「ラッパー」

『おう、任せとけ』

思わぬところで収穫を得たギンガ団の二人は、上機嫌で成果を祝った。

「研究所で見つからなかったポケモン図鑑がここで手に入れられるとはな。持って帰れば幹部が喜ぶぞ」

「特別ボーナス出たりしてな？　美味しいメシが喰いたいぜ。こここのころ缶詰めばっかださ」

『良いね、パーツと豪遊しようぜ。ところでそれ、ちょい貸してみ』

「ああ、ほらよ。………ん？」

男は図鑑を右隣に渡してすぐに首をひねる。相方の声に無意識に反応したが、よくよく考えてみれば相方は左側を歩いている。それならさっきの声は？　と右の方へ振り向くと、図鑑をくちばしに加えたラッパーが、馬鹿を尻目に上空へ飛び去っていくところだった。

『マヌケ丸出し、アホ二人〜♪』

「ああ！？　おいトリ、待ちやがれ！！」

せっかく収穫した品を“よこどり”された二人組は、慌てて歌い鳥のあとを追いかけていく。置いて行かれて呆然としているフラーとポツちゃんには、帽子を被り直したダイがナルトを引き連れて密やかに近づく。

「大丈夫？　怪我はない？」

「……ダイ、さん？」

「話はあと。ついてきて」

再開の挨拶は後回しに、今はギンガ団から離れることを優先する。ギンガ団を誘導しているラッパーとは別口から公園の外へ出て、小走りで街中を横切っていく。

途中、ビルとビルの合間にできた路地に二人と二匹は入り込む。ダイは路地から頭を覗かせ、後ろから誰もついてこないことを確かめるとさらに路地の奥へ移動。後ろでフラー達を待たせておき、クインをボールから出した。

「クイン、あのビルを超える高さまで跳ねてくれる？」

クインはお安い御用とばかりにパシンツとひとつ跳ね。軽々とダイが指定したビルより高く上がり、落下速度をつけながら戻ってきた。ダイはタイミングを見計らって、クインが地面に激突する前にボールを開いて収納する。

しばらく待つと、公園で別れたラッパーがクインを目印にして路地へと羽ばたいてきた。ギンガ団の二人は適当に撒いた、こっちに

は当分来ないだろう、などの報告を小声で行い、ラッパは凶鑑をダイに渡してボールに戻った。

やれることを一通りこなしたダイは、ひとまず警戒を解いた。待たせているフラールとポツちゃんに向き合って、無事に取り返したポケモン凶鑑を手渡してやった。

「はいこれ。えっと、フランシアだね。ナナカマド博士と一緒にいた」

「は、はい。あの、助けて頂いて、ありがとうございました!」

フラールはやはりというべきか、必要以上にかしこまって深々と頭を下げた。ついさきほどひどい目に遭ったせいもあり、誰に対しても怯えてしまうような状態となっている。もしくはこれが平常なのか。

ダイはポツちゃんにも大丈夫かどうかの確認を取った。フラールの両腕に抱かれたポツちゃんは、容赦ない蹴りを腹に受けたものの平気な顔でピンピンしていた。少し興奮気味なのは、ギンガ団への怒りの表れだろう。

どちらも大事に至らなかったのは幸いだったが、以前のギンガ団の行動を思い返せば、あの状況がどれほど危険だったかは明白だ。ダイは安心して身を寄せ合うフラール達にきつく言い聞かせることにした。

「ギンガ団に無闇に近づいたりしたら駄目じゃないか。彼らのことを知らなかったならまだしも、前に姿を見ているんだから、避けなきゃ」

「ごめんなさい…」

「君がコトブキシティにいるのにも驚いたよ。この街にはなにか用事があったてきたの？ 博士は？」

ナナカマドが同行していたなら、ギンガ団との接触は避けられていた。保護者なのだからフラーを一人にしてはいけなないとわかっていただろうに、単独行動を取っているのはどうしたことか。直接合って抗議しようとダイは訊ねて、

「博士は………いません」

「いない？ フランシアは一人でこの街にきたの？」

「はい。一人で、きました。博士に、………ナナカマド博士に、会いたくて」

フラーの声は小さくなり、表情は落ち沈んでいく。目尻には涙を浮かべて、けれど泣くまいと歯を食いしばる。その様子から、なにか良からぬことが起こったのだろうとダイに報せた。

ダイとハルが旅に出た翌日の夜、ナナカマドの邸宅が謎の爆発事故が起きたとフラーは語った。マサゴの警察はこの件に関して詳しく調べようとはせず、火の元の管理を怠ったのが原因だとして早々に引き上げてしまった。

フラーは事故ではないことを知っていた。ナナカマドはギンガ団からの協力を依頼され、それを再三無視していたから、いつ狙われもおかしくない状況だった。それゆえに山間の別荘を買い取って所在を移し、マサゴタウンにいないと見せかけて難を逃れていた。

（灯台下暗し、か。下手に遠くへ逃げ隠れするよりも、身近な場所に身を潜めた方が意外と見つかりにくい）

『あの日』の前の晩、ナナカマドはテレビ番組に出演している。おそらくはギンガ団の目をマサゴタウンから逸らすために、わざと姿を見せたと考えられる。マサゴタウンにはフラーやそのご両親もいたから、自身を矢面に立たせたのだろう。

「私が、ギンガ団の人達に姿を見せて、だから気づかれたんです。博士がまだ町にいるって。私のせいで…」

「さつきギンガ団の人達と揉めていた原因はそれだったのか。じゃあ、まさか博士を助けるためにギンガ団を追ってきたの？」

「…」

ダイの指摘にフラーは口をつぐんだ。ナナカマドが襲われて拉致誘拐されたのなら、フラーの旅立ちを両親が許すはずがない。

彼女は親に黙って家を飛び出してきていた。責任はすべて自分にあるとして、ナナカマドを助けたい一心で親元を離れてきた。フラーの性格からすれば、考えられない大胆さだ。精神的にも相当な負担を強いられているらしく、フラーの顔色は以前よりずっと悪く見える。

ダイは少し頭を働かせ、言葉を選んでフラーに話しかけた。

「フラー、博士が襲われたのは君のせいじゃないよ。悪いことをしたのはギンガ団で、責められるべきは彼らの方だ。フラーが気に病むことはないんだよ」

「でも、私が姿を見せなければ、あの人達には気づかれなかったかも知れなくて！」

「博士は襲われることを見越して所在地を移したんでしょ？ 襲わ

れても良いように手を打ったんじゃない。襲われるから前もって準備したんだ。君がギンガ団の前に姿を現さなくても、遅かれ早かれ居場所を特定されていたよ」

鬱屈とした考え方を変えようと励ますも、フラーは納得のいかない顔をする。止めることはできなかったのか、ナナカマドの安全を守る方法はなかったのかと悩む。

過ぎたことを言っても現実是不変ならないのに、なにもできなかった自分をどうしても許せないのか。

自分のした行いに誉められる点がある。そのことにどうして気づかないのだろう。

「フラーは忘れているかも知れないけれど」

「なんですか……?」

「あの時、君がギンガ団を牽制してくれなかったら、僕もハルも大変な目に遭っていた。君のおかげで僕達は助かったんだ」

彼女が勇気を出して動いた結果、二人の身の安全は守られた。悪いことばかりでなく、良いこともあったのだと。

目を丸くさせるフラーに、ダイはもう一度礼を言う。

「助けてくれてありがとう。フラーの選んだ行動はなにも間違っていないよ。博士のことは、これからどうすればいいか考えたい。君一人で背負い込まずに、ね?」

ダイの言葉に、話を聞いていたナルトやポツちゃんも鳴き声を上げて自己主張する。

「ほら、二匹も力になるって」

「……ありがとうございます。みんな、ありがとう」

涙ぐむ顔を伏せて、フラーは深々と頭を下げた。顔を上げたその表情には、わずかだが明るさが戻っていた。

「うん、元気が出たみたいで良かった。もうあまり自分を責めたりしたら駄目だよ？」

「はい……。あの、それで、博士のことは……………？」

「その前に、路地を出よう。明るい場所に出れば暗い考えも良くなるからさ。ギンガ団には気をつけて——、」

話が一段落ついたところで、場所を移そうとダイが提案する。フラーとポツちゃん、ナルトがダイの先導で路地の出口へ歩き出す。その後ろ姿に、反対側の入り口から声がかけられた。

「おい、その二人。ちょっと聞きたいんだけどよ、この辺でやけに派手な柄の鳥ポケモンが飛んでこなかったか？　くちばしに赤い箱をくわえ、た……」

「……あ」

「あの人は……」

ダイもフラーも、声をかけた男も互いの姿を見て動きを止めた。男は公園で撒いたギンガ団の一人、フラーとポツちゃんに暴力を振るった人物だ。

ダイが小声でマズいと呟くのと、男が目を見開いて指差したのは同時だった。

「あー!! さっきのしつこいガキ! お前こんなところに逃げ……待て。その手にあるのは凶鑑じゃないか? さては、あのナマイキドリはお前達のか!」

「フラー、ナルト、コッチに。早く!」

「は、はい!」

「待て、二回も逃がしてたまるか!! ——コロトック、“シザークロス”!!」

フラーの片手を握ったダイとナルトが急いで通りに向かい、なにがなんでも捕まえようと息巻く男がポケモンを繰り出してきた。

“こおろぎ”ポケモンのコロトック。コロボーシの進化系で、ヴァイオリンを彷彿とさせる姿のポケモン。あらゆる鳴き声を使い分けて美しい音色を奏でるのが得意だ。

コロトックは狭い路地に降り立つと、羽根を広げてダイとフラーに跳びかかった。連れているナルトやポツちゃんではなく、トレーナーを目標として。

「ッ!!」

相手の狙いを知ったダイは、間髪を入れずにフラーを抱き寄せて倒れ込んだ。フラーと腕に抱えられたポツちゃんがなるべく傷ついたり痛みを受けないように、自分の体を地面との間に滑り込ませて衝撃を和らげる。

「わわっ！　ダイさん……！？」

ダイの腕にすっぽりと収まったフラーは思わず赤面したが、ダイはそれに気づくことなく、すぐ体を離してギンガ団構成員の前に立った。

人にポケモンを攻撃させた卑劣な男へ、ボソツと口から洩らしながら蔑視する。

「チッ。ルールをわきまえない屑が^{くず}」

「ク……！？　お、お前、なんだ？　ガキのくせに、えらく態度がでかいぞ！」

「ハア。ギンガ団って、子供でもわかるだろう人の道理を一から教えないやいけないんですね。困ったなあ。僕、喧嘩も説教も好きじゃないんですよ。……手間、かけさせないでもらえます？」

帽子の鰐を摘んで深めに被ったダイが“にらみつける”と、その凄みに男はたじろいだ。どうやら見たままの、威勢ばかりの小者のようだ。

男の近くまで下がったコロトツクの方は、初手の攻撃を終えてからずっと周囲をキョロキョロ見回して落ち着かない様子でいる。

トレーナーとポケモン、双方を注意深く観察したダイは考える。

（この人のトレーナーとしての実力は低い。コロトツクも……。さて、どうあしらおうかな）

コロトツクのタイプは虫。ダイの手持ちで相性が良いのは、飛行タイプのラッパード。ラッパードならコロトツクを相手にしても負けることはないし、ついでに技の使い方次第で、勝敗をつけずに相手

ポケモンの無力化も狙える。

後ろに控えるフラー達を巻き込まないよう心がけて、ダイはラッパのボールに手をかけた。それを遮り、一つの影が前に躍り出る。

「あ、あれ？ ナルト？」

一番手に名乗りを挙げたのは、すでにボールから出ていたナルトだった。相手側の取った行為に怒り、それ以上に初めてとなる対人戦でやけに張り切っている。トレーナーとのバトルが嫌だからと避けて通っていたのが裏目に出たか。

準備万端、いつでも指示していいと眼差しを送るナルトのやる気に、ダイはすぐに応えなかった。先刻の問答でナルトはダイに不満を抱いているため、ボールに無理矢理戻すとさらに怒るだろう。かといって草タイプのナルトは虫タイプのコロトックと相性が悪い。勝てる保証はないし、そもそも“勝ちにいく必要がない”のだが。

「うーん。でも、あのコロトックなら……そうだね。ナルト、初陣を飾ってみるかい？」

ダイは潔く説得を諦めて確認を取ると、ナルトは顔を輝かせて大きく頷いた。

腰の引けていた男は、コロトックよりも小さな体のナルトを目にして余裕が生まれたのか、また威勢良く“ほえる”。

「へっ、そんなチンケなポケモンじゃ、俺のコロトックの足元にも及ばないぜ！」

「へえ、そうなんですかー。良かったですねー」

「てっ、適当に受け流すな！！　ちくしょう、舐めやがって…。い

け、コロトック!!」

再度、攻撃を命じられたコロトックが走る。細長い腕を武器のように構えてナルトへ一直線。

「きりさく”だ!!”」

「ナルト、相手の動きをよく見て………避けて!」

ダイの言葉に耳を傾けるナルトは、指示通りにコロトックの挙動をジッと睨み、振り下ろしてくる腕の刃をスレスレでかわした。

横へ逃れたナルトにコロトックは踏みとどまり、後ろへ振り返って追いかける。トレーナーからは、指示より先に汚い野次が飛んだ。

「なにやってるんだ、この愚図が!! 次は外すんじゃないぞ、
れんぞくぎり”!!”」

コロトックは無我夢中で腕を振り回し、ナルトに切りかかった。それらはてんで狙いがつけられておらず、ナルトは余裕でかわしてのける。

相手側の体たらくさにダイは呆れ、心の内でコロトックに同情しながら次の指示を与える。

「ナルト、コロトックを中心に円を描いて走る!」

ダッとナルトはコロトックの周りを駆けてぐるぐる回り始めた。コロトックはナルトの姿を目で追って切りかかり、そのすべてを空振る。決してナルトの動きが速い訳ではなく、コロトックは右往左往しているうちに目を回してしまい、フラフラとよろめいた。

ナルトも目を回す前に、頃合いを見計らってダイが止める。

「ナルト、その場で“からにこもる”」

「チャンスだ、コロトック！ “シザークロス”！！」

ダイの声にナルトは急停止して、手足と頭を丸めて甲羅に隠れた。男の声にコロトックはフラフラながらも攻撃。：よたよたと頼りない足取りで、腕を重ね合わせてナルトへと近づいていき――甲羅に蹴つまずいた。その先には、路地の左右に建つビルの壁。

ゴチ！！ と、コロトックの顔がコンクリートとぶつかった。あ：と男は声を上げて、ダイは痛そうな音を聞いてごめんねと謝り、恐る恐る見守っていたフラァはヒヤッと叫んで目を伏せた。

受け身もなにも取れなかったコロトックは、ズルズルと落ちて地面に倒れる。意識を失って戦闘不能となった。

バトルに勝利したナルトは嬉しそうにダイの元へ、お腹に飛び込んで喜びを表現した。ちよつとよろめきながらもダイはしっかりと受け止めて、頑張ったねと褒めて頭を撫でてやる。

「この、役立たず！ あんな弱そうなポケモンに負ける奴があるか！！ 進化して強くなったんじゃないのか？ 弱いままの、価値なしポケモンが！！」

負けた男は悔しさもあって、倒れて動かないコロトックをこれでもかと罵り出した。その口汚さに、ダイはナルトを離して嫌悪感を露わにする。

「今のバトルで、コロトックにはなんの落ち度もありませんでしたよ。敗因は貴方にあります」

「なに？ 負けたのは俺のせいだっていうのか？ ふざけるな！」

ダイの指摘に男は当然の如く突っぱねた。もう相手にするのも嫌になってきたダイだが、コロトックに責任をなすりつけたままにするのは心情的に許せない。

気絶したコロトックに男がなんの行動も見せないのです、ダイが代わりに介抱しながら、刺々しく話す。

「このコロトック、貴方が捕まえたポケモンではありませんね。所有者が違う」

ポケモンはボールで捕らえると、内蔵されたメカによって識別番号が割り当てられる。どのトレーナーがどのポケモンの親であるかはこれで判別される。

「ポケモンセンターの通信機を使って交換するか、あるいは“奪い取るか”。どちらにせよ、他人名義のポケモンはトレーナーとの信頼関係が薄いから、言うことを聞かなかったり指示とは別の技を使ったりと、バトル中いろんな支障を出します」

コロトックの怪我は軽く、程なくして意識を取り戻した。戦闘態勢は解けて、ダイやナルトに敵意を抱いている様子もなく、大人しくしている。

処置を終えたダイは改めて男を睨む。

「コロトックには迷いがあった。ひとまずは貴方の言うことを聞いてはいたけれど、動き出しが明らかに鈍かった」

“れんぞくぎり”で攻撃してきた際には、ダイはナルトへ指示すら送っていなかった。初めの“きりさく”でコロトックのぎこちなさを見切っていたナルトに、避けるタイミングを計ってやるまでも

なかったのだ。

「もう一つ。貴方はこの子をあまり外に出してあげていなかったんじゃないですか？ 普段からボールに閉じ込められっぱなしだったせいで、落ち着きをなくしていた。あんなに浮き足立った状態じゃ、ベストを尽くすなんて土台無理だ」

ポケモンを育てる上で欠かしてはならないのは愛情だ。ただの『道具』として扱っているようでは、懐くことも強くなることもあり得ない。

ぐうの音も出なくなった男へ、ダイは一気に畳みかける。

「わかってないようなら言いますが、愚図は貴方です。誰かの価値がどうか御託を並べる前に、自分の価値を上げる努力をしたらどうですか？ これは個人的な意見ですが、貴方はギンガ団にとっても、何処の組織や団体からしても、使い物にならない不要な存在でしょう。価値がないのは、あ・な・た・だ」

「こ…ッ、こいつう…!!」

「あれ、まだなにか吐ける口があるんですか？ やめてください。貴方に残されているものなんてありませんよ。あるとしたら、コロトックへ誠心誠意謝ることか、生まれてきてしまったことへの懺悔ですね。でも、僕はもう貴方みたいな価値のない人間には多くを望んだりしません。あと一回しか言わないから、よく聞いてその無価値な頭で理解して下さいね？ ——良いから、とっとと、消えろよ。ゴミ屑」

「うっ、く……うぐぐ……っ!!」

ここまでが限界だった。

執拗な言葉責めで心を根元から折られ、男は堪えきれない涙を袖で拭いながら逃走を余儀なくされる。

去り際に定番の捨て台詞を吐いて、

「ギンガ団を敵に回して、タダで済むと思うなよ！ 覚えてやがれ！！」

「失礼ですが、貴方とは何処かで会いました？」

「——ッ！？ う、うう、……うわああん！！」

コロトックをボールに戻すことも忘れて、泣きべそをかきながら走っていつてしまった。

悪いのはあちらであるとはいえ、ちよつと可哀想に思える気もある。良心が痛んだフラァは、置き去りにされたコロトックをどうしようかと考えるダイへ、おずおずと話しかける。

「ダイさん……あの、言い過ぎだったのでは？」

「ああいう人には、あのくらい言わなきゃわかってくれないよ。あれで、少しでもポケモンとの接し方を見つめ直してくれれば良いんだけどね」

やっぱり無理かな？ とおどけるダイの顔に、反省の色はなかった。ほんの少し前に優しい言葉をくれた人物とは思えない天の邪鬼っぷりだ

ダイのサディスティックな一面にフラァは気後れ。知ってか知らずかほくそ笑むダイは、邪魔者もいなくなったので今度こそ路地を抜け出そうとする。

そこで、またしても声がかけられた。

「待てえい!!」

「はい？」

「ん。…まさか、また？」

きょとんとしながら、訝りながら——二人がギンガ団の男が走り去った後ろへ向くと、逆光を背にポーズを決める新たな人影がいた。

影は仰々しい身振り手振りで体をくねり、ビシィッ!! とダイ達を指差す。

「その君達、私が来たからにはもう安心だ。——この世にはびこる悪者達を、許しちゃおけないポリスメン……そう、私は国際警察から派遣された凄腕エージェント、コードネーム“ハンサム”だ!! 以後、見知っておきたまえ!!」

ババーン!! と、茶色のロングコートを羽織った黒いスーツの男が、声高々に名乗りを上げた。

ダイと、フラートと、ナルトと、ポツちゃんと、コロトツクの面々は、

「「「……………」」」

不審者を前にして、呆然。

全員から引かれているとは露知らないエージェント・ハンサムは、続けて辺りを警戒する。

「さあ、悪事を働く不埒な輩よ。かかってこい！ このハンサムなハンサムさんが、ケチヨンケチヨンに倒してやるぞ！」

何処か、格好いい（と勘違いしている）自分自身に酔いしれている彼へ、ハンサムシヨックからいち早く立ち直ったダイが申告する。

「あの、もう終わりましたよ？」

「ハーツハツハツハツ。私に恐れをなして逃げたんだな？ 賢明な判断だ！！」

（…、煩わしい人だなあ）

笑顔で誤魔化すダイのこめかみに、ピキピキと青筋が浮かぶ。

第三話 剣呑な歓談

side“微男子—handsome?—”

「それでは、改めて自己紹介しよう。私の名はハンサム、国際警察に所属する“凄腕”エージェントだ。よろしく！」

場所は変わり、中央公園からほど近い喫茶店の店内。

自称国際警察のエージェントに連れられて店に訪れたダイとフラ―は、無駄に澁刺とした笑顔を振りまく男と向かい合って席につく。正直に言えば、ハンサムという偽名で通す彼の怪しさは満点。関わらない方がいいと二人は（主にダイが）判断していたが、わずかながら話を聞いてみると無視する訳にいかなくなり、連れてこられた次第である。

その理由は簡単だ。

ハンサムは、ダイとフラ―の素性を知っていた。

「君ともう一人、ハルくんが旅に出る前後に博士と連絡を取り合っていてね。ジム巡りのことも、バッジを八つ集めたら“悪者退治”に協力していいことも、全部教えてもらったよ」

「はあ」

気のない返事でダイは応える。

フラーも面識こそなかったが、ナナカマドが国際警察へ助けを求めていたことは知っていたのでダイに教えた。信じたくはないが、どうやらこの男がそうらしい。

先ほどのギンガ団との一件からずっと険しい表情のダイをよそに、ハンサムは構うことなくサクサク話を進める。

「ギンガ団の下っ端が連れていたあのコロトックは、私の方で一時預からせてもらうね。盗難、あるいは強奪の届け出があるだろうから、身元を割り出して本来の持ち主に返すよ。そう時間はかからないだろうね」

「そうですか。ありがとうございます」

「いやー、コトブキシティで君達と合流できたのは幸いだった。特にフランシアくん。君のことは、ご両親から話を聞いたよ？ 黙って家を飛び出すなんてやんちゃだねえ」

「ご、ごめんなさい…」

ハンサムの話では、彼はシンオウ地方に来てからナナカマドと合流して安全を確保したのち、ギンガ団の動向を調査、逮捕に向けて動く予定だったらしい。

しかし、その矢先に合流するはずだったナナカマドが襲撃されてしまった。先手を打たれた形のハンサムは、一旦マサゴタウンへ向かって現状を把握。ひとまず、単独行動に走って行方がわからなくなったフラーを搜索するため、コトブキシティへ折り返してきたのだそう。

自分の勝手な行動でまた誰かに迷惑をかけた…。フラーは後先考えずに行動する自分の情けなさに縮こまったが、ハンサムの次の言葉で体を強ばらせた。

「幸先の良いことに、比較的早くフランシアくんの身柄を得られた。私としては、すぐにでもご両親と連絡を取りたいんだが、」

「待って下さい！」

いきなりの大声にダイは驚いた。口を挟まれたハンサムも多少びつくり、だが取り乱すことなく、黙って発言権を譲った。

とっさの行動に顔を真っ赤にするフラーは、それでも言いたいことはきちんと言つてのける。

「わ、私、戻りたくありません。私も、博士を助けたいです！」

「そうかい？ だったら、ご両親にそう話すといい。私は君の決断に反対はしないから」

「ちょっと待ってください」

二人の会話に、次はダイが横槍を入れる。フラーを止めるべき立場の人間が、まるでその背中を後押しするような言い草をするとはどういうことか。

「フランシアを連れ戻さないんですか？ ただでさえ犯罪者が平気な顔して表を歩いているのに、博士が襲われたあとなのに。止めるのが筋でしょう」

「それを言ってしまうと、先に旅立った君達はどうするんだい？」

ハンサムの切り返しに、ダイは厳然と答える。

「旅は取りやめて帰るべきです。もちろん、貴方もそう勧めますよね？」

キツイ物言いであからさまに敵愾心を見せるも、ハンサムは飄々としたもので、こともなげに論してくる。

「ギンガ団がナナカマド博士を襲ったのは、彼らの計画に博士の研究成果が役立つから。ギンガ団が君達を『本気』で襲う理由がない」

「だからって、」

「そうだ、こうしよう。フランシアくんはこれからダイくんと行動すればいい。ダイくんと一緒に彼女も無理はしないだろうし、君も安心できるんじゃないかな？」

勝手な言い分にダイは反論しかけて、フラーに腕の袖を握られた。

「ダイさん……駄目でしょうか？」

「…」

駄目、とかではなくて。

いや駄目なんだけどなにその反則的なあの“こいぬ”ポケモンが切なそうに見上げてくる某CMの『どうする？ アイ○○』的なあれみたいな潤んだ瞳で今にも泣き出しそうな眼差しで断ったら人としてなにかが欠落してるとか取られてもおかしくないだろうってどうするもこうするも断れますかっ。

ピシッと硬直して動かなくなったダイを見て取り、決まりだね！とハンサムが判断を下した。

従うしかなかった。

「でも、譲れない部分もある。さっきフランシアくんは博士を助けたと言ったが、それは駄目。君にも、ダイくんやハルくんと同じ制限の元で動いてもらうよ」

同じ、とはつまり“道中でギンガ団と接触してはならない”。手を出すなら、“ジムバッジを八つ手に入れる”。この二つを守ると約束しなければ、旅の許可は出ない。

実際フラーは約束する前に、自らギンガ団に言い寄って危ない目に遭っている。それもあってフラーは反対こそしなかったものの、暗い顔で呟いた。

「博士は無事でしょうか…」

「無事だよ」

ハンサムは即答した。納得のいかない様子のフラーが顔を上げると、努めて明るい表情のハンサムは話す。

「無事でいてもらわないと、助ける身としても困るよ。まあ、ギンガ団が博士に危害を加えるとは思えないけどね」

「でも、博士のお家、研究所は！」

ギンガ団が襲撃した結果、ナナカマド邸は謎の爆発で全焼した。目的のためならどんな荒事でもやるという確かな証明。それを踏まえた上で、ギンガ団はナナカマドに危害を加えないと言い切れるのか。

「博士の家を爆破したのは、本当にギンガ団かな」

話を噛み砕いて咀嚼するダイがポツリと言った。やや熱が入り始めたフラーがどういうことですか？ と詰問してきたので、ダイはうつすら笑みを浮かべたハンサムに確かめるように答えた。

「ギンガ団は博士の研究資料を欲しがっていた。なら、資料を手に入れるのに研究所を爆破したりしないはず。目的を達していたなら爆破するのは不自然ではないけれど、それなら博士を拉致することもない。研究所を破壊されて困るのはギンガ団の方。だったら、」

「んー、ダイくんは賢いねー。正解、研究所を爆破したのはナナカマド博士だよ。研究資料はすべて博士の頭の中にある。だからギンガ団は博士を連れて行ったんだ。博士がその情報を開示しない限り、博士の身の安全は絶対に保障される、と」

ダイとハンサムの回答にフラーはひどく感心して頷いた。博士の身は取りあえず安全。それを聞いたおかげで、肩から力が抜ける。根を詰めていたフラーが安心したのを見て、ダイもホッと胸を撫で下ろした。が、樂觀視はしなかった。

今の話でハンサムは語らなかったが、ギンガ団がどうしても欲しい情報を得るために強行手段に出ないとは限らない。絶対に安心とはいかないのだ。

言ったところでフラーをまた不安がらせるだけなので、ダイは口を閉じる。ハンサムも心得ているから敢えて言わなかったのだろう。相手の心中を推し量ってそれとなく気遣える。当たり前のようではなかなかできることではないこれを自然体でこなしたハンサムは、やはり信頼するに値する人物だ。

ややおふぎの度が過ぎるのも、フラーは元より、ダイも許容範囲内にある。

だとしても。

それでもダイはハンサムを信用しない。国際警察のエージェントで、頼りにできるのは現時点でこの男の他にいない。だけれども。

「フランシアくん。ご両親に電話をしてきたらどうだい？ 連絡するなら早い方が良い」

「あ、はい。失礼します」

ハンサムの勧めにフラァは席を立つ。残った二人は男同士で、ハンサムはちよつと照れくさそうに、ダイは徹頭徹尾無表情で会話を交わす。

「ちょ……ダイくん、そう見つめないでくれ。勘ぐるじゃないか」

「僕は貴方のことを信用していません」

ダイはズバリ言い放った。

ハンサムは態度を崩さない。

「信用ならないかあ。フランシアくんを止めなかったから？」

「一つは」

「うんうん。わかるよ。でもね、私もいい加減な気持ちで許した訳ではないんだ。私の座右の銘は“自由”でね。私は、君達の自由を尊重したかった。君がもし本気で嫌がるなら、無理強いはしないよ」

言葉に嘘はない。だが気に食わない。

「フランシアの同行は、良いです。どのみちハルを追わないといけ

ないですし、言った通り、身近にいてくれた方が安心できます」

「そう、それなら問題はないね。君になら彼女を託せると信じていたよ。きっと、君なら大丈夫！」

なにが大丈夫なものか、とダイは言いたい。どの口が戯れたことを吐く。

「だって、ギンガ団の荒くれ者を相手に、あれほどの立ち振る舞いをしていたのだから！！」

この野郎は、僕達が襲われているところを黙って見ていやがった。

ダイの実力が見たかったのか、傍観して楽しみたかったのか、他になんらかの理由があったのか、けれどどんな理由があっても関係ない。

ダイは極めて簡潔に答えを出す。

この男には、一切の気を許さない。

「ダイくん、そう“こわいかお”していると、ヤーさんに間違われるよ？」

「すみません。僕もハンサムさんのような底抜けの明るさを見習いたいです」

「ハッハッハ、見習うならこの優秀さを見習いたまえよ。将来きつと役に立つ」

「そうですね。“能あるムクホークは爪を隠す”と言いますし、その優秀さを垣間見れたなら、役立てようと思います」

「アッハッハッハ」

「うふふふ」

楽しげに話している。二人共笑っている。それなのに、周りの席に座る客や店の従業員などは、ゾッと背筋に冷たいものを感じ取った。

一人、店の外にある公衆電話から戻ってきたフラーはこの空気に気づかずに呑気なことを言う。

「ふふ、もう仲良しになったんですね？　羨ましいです」

「…」

「そうなんだよー。でも心配しないで、フランシアくんもすぐに仲間入りしちゃうから！」

内心、よくもぬけぬけと、とダイは舌を打ちながらも、表面上はこやかに応対した。フラーも談笑に加わり……………気のせいだろうか。少し表情に陰りがあるように見える。

話の要点を話し終え、その他にもいくつか情報交換したハンサムは席を立った。

「そろそろ、おいとまさせてもらって良いかな？　ギンガ団の逮捕に博士の救出、仕事が山積みだよ」

「はい、お構いなく。…頑張ってください！」

「どうぞ、僕達も出ますので」

「それでは諸君、またー……の前に、もう一つあったね」

手を振って別れるかと思いきや、ハンサムはくると半回転して戻ってきた。ダイはフラァから見えない位置で、さっさといけよ…と惜しめない嫌悪感を表しつつ、どうしたんですかと訊ねた。

「うん。ハルくんにも話を通しておきたいんだけど、何処にいますかわかるかい？」

「ハルですか？　ハルなら今頃…」

草木もまばらな山肌が目立つ、炭坑の街クロガネシティ。
黄土色の路上を吹き抜ける一陣の風が、そこに仁王立ちする少年の体を掠めていく。

少年の顔には不敵な笑み。両手を腰に当てて、どうだと言わんば

かりに自分自身を誇示する。

彼の名はハル。ポケモントレーナーのハル。

シンオウ地方に点在する各街のポケモンジムを巡り、すべてのジムリーダーを倒さんとする男。

そう、彼はこのクロガネシティで、初挑戦となるクロガネジムで、今まさに栄光の勝ち鬨^{かちご}を上げ――、

「……………勝てねええええええッ!!」

世の中そんなに甘くなかった。

第三話 剣呑な歓談（後書き）

クロガネ住人「うるせえ」

第四話 黒金珍道中

カンカンと甲高い音が響き渡る、ある程度の広さを確保した通路。ところどころでは壁を掘る人や持ち物を交換する人々が散見する。

クロガネシティ名物が一つ、『地下探険』。無料配布される『探険セット』を持参すれば、誰でも遊べる娯楽施設。利用者は街の下に広がる地下道を巡りながら岩壁を掘り、ある場所では秘密基地を作って友達と旗取りに興じ、別の場所では化石や古物などを掘り当てたりしている。

その他大勢に混ざるハルも同様、ハンマーとピッケルを手にとって化石掘りに挑戦しており……まったく身を入れておらず、地面にあぐらをかいて壁の適当な部分を叩いては削っていた。

無意識に手を動かしていると、色んな物が自分勝手に掘り出されていく。そのいくつかはヒコザルが手にして遊ぶか、居眠り中のビツパを囲むように散乱している。

ハルの視界に映っているものはない。ここ数日の対戦成績を思い浮かべては、うゝ…と悩んでいた。

ハルがクロガネシティへやってきたのは一週間前だ。

緑の少ない殺風景な景観に浪漫を感じて、高揚した気分をそのままにジムの門を叩いた。そこで待ち受けるジムリーダーへと勇猛果敢に突撃して、

あっさり返り討ちに遭った。

一度破れたからなんだというのか。ハルはネバーギブアップの言葉を掲げ、立て続けにジムリーダーに挑戦状を叩きつけて、

また負けた。

ポケモンセンターをダッシュで往復、その日のうちに何度も挑せ

ジムリーダーは困り顔だ。

…その日のジム攻略は取りやめた。理由は夕陽が地平線に隠れたからであって、別に諦めたとか無理だとかへこたれた訳ではないのだ。……断じて！

それから一週間。

本日はジムリーダーが午前一杯を留守にするので、気分転換に地下探険へ遊びに来ていた。ポケモンのレベルを上げに行っても良かったが、このところ…ジムリーダー挑戦・敗北…近場で野生のポケモンと交戦・修行…ポケモンセンターに宿泊・休眠…と、四六時中戦うか休むかを繰り返したためにビッパとヒコザルが気疲れ。負担を強いても強くはなれないとして、今日はバトルを一切行わないことに決めた。

“いねむりがおい”ビッパも、この一週間は特訓で起きっぱなしだったせいか、朝からずっと寝てばかりだ。ちよっと申し訳なくてビッパの背中を優しく撫でてやり、ピッケルを持ち直したハルは岩壁を睨んで呟いた。

「やっぱり、相性か…」

負け続けている最大の要因、それは“タイプの相性”。

ポケモンジムでは、それぞれ専門、得意とするタイプが決まっている。クロガネジムの場合は『岩』。そのタイプの大半が鉱物の体を持ち、生半可な攻撃では傷をつけることもできない。もちろん弱点はあるが、残念なことにハルの手持ちのタイプは『炎』と『ノーマル』。どちらも岩に対して不利なタイプだ。

ジム挑戦から四日目、飽きずに立ち向かうハルを見かねたジムの

トレーナーが、親切にこのことを教えてくれた。君のポケモンのタイプだここでは通用しづらいよ、と。

さて、困った。タイプの相性がなんだ意地と気合いと根性でどんな困難もうおおと息巻いてはみたものの、結果は全戦全敗。新しく仲間を迎えようと草むらを散策するも、あんまり勝負を挑みすぎたせいで野生のポケモンがなかなか近づいてこない始末。虫よけスプレーいらないうぜひゃっほう！ とか強がってみても状況は良くならなかった。

「ビッパもヒコザルも頑張ってる。これ以上は負けたくない。次でジム戦初突破いきたい。じゃあどうする……？」

ポケモンの問題ではない。トレーナーの問題だとハルは決めつけていた。タイプの相性なんて初めから決まっているものをどうにかしてこそその一流。二の足を踏んでいる時点でハルは三流、いや四流トレーナーも同じと言えよう。

不甲斐ない。こんなことではジムバッジを八つ集めるなんて夢のまた夢、打倒ギンガ団が遠のいていく一方だ。

どうにもいかない現状に、ハルは苛ついて壁をガリガリ削りまくる。その都度、化石やらタマやら貴重な道具が山となって積まれていく。

通りすぎる人達は、足を止めてその様を凝視していた。

「すげえ……」

「坊主、何者だ……？」

強いて言えばポケモントレーナーである。

意外な才能に見物人が脱帽しているとは知らないハルは悩み続ける。岩タイプに有効な技を覚えさせるのが手っ取り早い、都合良く二匹が覚えてくれるとは限らない。ならばやはり新規加入か……？

あーでもないこーでもないとかくその後ろ姿に、見物人の中から抜け出てきた一人がしゃがんで話しかけてきた。

「壁を崩さずにこんなに掘り出すなんてすごいね。ハルくん、才能あるよ！」

「…、ヒョウタにいちちゃん？」

すっかり馴染みとなった声を聞いて振り向けば、くだんのジムリーダーが顔を輝かせてハルの手並みを拝見していた。

薄茶色の作業服にブーツ、頭を守るヘルメットにライトを取りつけた眼鏡の男性。こんな場所だからこんな格好をしているのではなく、これが彼の普段着となる。

彼こそクロガネジムのジムリーダー、ヒョウタ。この一週間ずっとハルを負かしている張本人だ。

ヒョウタはハルが頭を悩ませていることなど気づくよしもなく、目をキラキラさせて言い寄ってきた。

「ハルくん、この才能は活かすべきだ。僕と一緒にここで修行を積んでみないかい？ ハルくんならきつとすごいトレジャーハンターになれるよ！」

「と、トレジャーハンター！？ と言ったらアレか、山とか洞窟とかいわゆるミカイノチって場所を大冒険する、アレか！！」

「そうだよ！ 基本的には地下に区切るけど、君と僕でシンオウ中に眠る財宝を掘り起こすんだ！！」

夢見るオトナが夢見がちなコドモを口説き始めた。

ハルの方は先ほどもでの苦悩は何処へやら。壮大な夢物語に胸を高鳴らせて、

そこでふと気がつく。

「ヒョウタにいちちゃん、今日は炭鉱で仕事って言ってなかった？」

「ん！ ……あはは。あはははは」

鋭い指摘に、良い大人は笑って後ずさる。

背中を汗でびっしょり濡らしながら、ピッ！ と手をかざして、別れの挨拶を切り出す。

「それじゃあ、ハルくん！　僕はジムに戻るとするよ。いつでも挑戦しにきていいからね！　さっきの話、考えておいてね〜！！」

大量の掘り出し物を詰めた袋を担ぐイシツブテを後ろに従えて、ヒョウタは颯爽と通路の奥へ立ち去っていった。

ジムリーダーと炭鉱員。二足のわらじで頑張りながらも、夢を追うことも忘れない。あんなステキなおトナになりたいなど、ハルはとても強く思うのだった。

彼の友人が許さないだろうけど。

『地下探険』で手に入れたもののうち、“進化の石”などの役立ちものは手元に置いて、価値のあるものはいらないものは博物館に売却するか譲り渡した。持ち物を軽くしたハルは、陽の照りつける地上へと帰還する。

懐は相当温かくなったが、ジム戦に関する問題はなに一つ解決していないので、気分的にはかなりお寒い。頭の上でまた席取りを始めた二匹を好きにやらせたまま、ハルはぶらぶら街の通りを歩いて回る。髪の毛を引っ張られ、額や頬を引っ搔かれるのも意に介さな

いで考えに耽っていると、ハルの目にある店が入り込んだ。

そこはモンスターボールやポケモンに使う傷薬などを販売しているフレンドリイショップ。大抵のトレーナーがご厄介になるその店では、ハルと同年代の子供達が入りする場面が見れる。

なんとなくそれらを眺めて、なにか買い足しておかないといけなものではなかったかなと、思考が無意識に切り換わった。悩んでいたジム戦攻略をすっかり忘れてしまいが、偶然にも二つの思考は上手い具合に合致して、ある便利な道具を思い出すきっかけとなってくれた。

「そうだ。技マシンがあるじゃん」

それはポケモンが成長と共に、あるいは鍛えられるごとに覚えていく技を人為的に覚えさせる機械。ディスクと同じ形状で、ポケモンセンターに据え置かれてある専用の装置を用いて起動する。

多種類に及ぶ技マシンの中には、当然岩タイプに有利な技も収録されてある。ナイスアイディア俺天才！と自分を褒めつつ、ハルはさっそく購入しようとフレンドリイショップへと駆け込んだ。

五分と経たずに店を出てきた。陳列棚を探して、店員に話を聞いて、得られたのは『ここにはありません』の一言。トバリシティのデパートになら販売されているらしいのだが、それ以外では基本、その辺に落ちているボールに収納されているのを拾うしかないと言われてしまった。

「意味わかんねえ…。お役立ちアイテムがなんでその辺に落ちてんだよ。誰が捨てたんだよ、もったいないだろ。ダイに落ちてるモノ拾ったら交番に届けろとか、勝手に持ち帰ったらダメって言われているのに、俺に一体どうしろって言うんだよ…」

理不尽な世の中がっくりと肩を落としてとぼとぼ歩くハル。そ

の様子に同情してか、ビッパとヒコザルも争うのをやめて大人しくなり、両肩に移動して頭をナデナデしてくれた。

「…サンキュー。よっし、元気出たぞ！」

励まされたハルは、二匹の気遣いを受け取ってすぐに立ち直った。しよげていても仕方ない。振り出しに戻った問題とまた向かい合う。振り出しとはいっても、技マシンを活用する案は悪くないだろう。あとは入手して覚えさせるだけで良いのだから。問題は、その技マシンをどうやって手に入れるか、だ。

ダイの忠告はこの際無視するとして、手当たり次第に探せば二つ三つは見つかるかも知れない。草むらや池の周辺、木々の合間など、とにかくしらみつぶしに探してみよう。

そうと決まれば善は急げと、ハルは街の入り口にあるクロガネゲートへと急いだ。頭の中を技マシンで一杯にさせた彼は、道行く人と何度もぶつかりかけながら、危なっかしく街を横切っていく。

クロガネゲートに辿り着く手前。爆走するハルの前に、道を遮るようにして座る男の姿があった。

袴を穿いた和装の男は、竹で編んだ三度笠さんどがさを被っているため、顔がよく見えない。男の前には広げられた風呂敷と、その上に雑多な物が値札付きでいくつも並べられている。

ハルは走ることに夢中で、行く先の障害物が意識に入らない様子だ。この調子で行けば、風呂敷の上にある商品はことごとく蹴散らされていくこと必至である。

「…」

露店商の男は、迫る危機に動じなかった。椅子代わりに使っている旅行鞆の隙間に手を突っ込んでガサガサ漁り、目当てのものを探り当てて掴むと、鞆の中でそれを“開いた”。

「ウオオオオ！ 猪突、猛進！！」

「スボミー、“くさむすび”」

ハルが風呂敷の上を駆け抜けようとしたまさにその時。足元の地面から草がニョキニョキと生えて輪を結んだ。

ハルの足首が輪っかに綺麗にハマる。

青春の汗を流し満面の笑みでハルは――、

「オぶっふ！！」

ビターンッ！！ と、気持ちよいくらいの勢いで倒れ、前面を路上に叩きつけた。

ピクリとも動かなくなったハルを窺い、なにかしたであろう男は、謝罪もなしに商売を優先する。

「その少年。ちいと、それがしに付き合うてはくれぬか？ お主の売買意欲をそそってくれる品を取り扱っておるのだが」

「……………返事がない。ただのトレーナーのようダバア」

「うむ。軽口を叩けるなら心配はいらぬな」

「してくれたって……。イテテ」

ハルはブツブツ文句を垂れながら起き上がり、何に足を引っかけたのかと見回したのち、露店商の売り物に目を向ける。

「へえ、見たことないのがいっぱい売ってるな。おっちゃん、このガラスはなに？」

「ビードロという笛だ。この数種類を吹いて音色を聴かせれば、ポケモンの状態異常のいくつかを治せる。こっちの二色は、それぞれ野生ポケモンを呼び寄せるのと遠ざけるなどの効果を持つ。トレーナーならば、買って損はないぞ？」

怪しげな露店商は通行人から避けられがちなせいか、年齢が低く警戒心の薄いハルに狙いを定めて、熱心に売り込んでくる。

露店商の思惑にうっかり乗ってしまったハルは、興味津々で解説される珍品希少品を観賞。：実は買う気が一切なく、一通り見たらさっさとクロガネゲートへ急ごうという賢明な判断をしていた。

ところがハルの両目がある品に移ると、本当に関心を持っていた。忘れてしまった。

「おお、盆栽だ！？ カッコイイ！！」

両手で持てるサイズの小さな植木鉢。植わっているのは松の苗だ。売れそうな雰囲気もあって、露店商の口元もほころびる。

「ほう。そやつに目をつけるとは良い趣向だな、少年」

「いやー、やっぱりニッポン男子といったら、和の心だよな！ 俺、渋いの大好きなんだよー」

個人的に大変気に入ったらしく、盆栽を掲げて陽に当ててやる。その幼くも雄々しい木の幹をじっくりと堪能して――、

プルプルっと幹が震えた。

ん？ とハルは首をひねり、目をパチパチさせてよく見直してみる。単なる気のせいかな、盆栽がまた震え出す気配はなかった。なにか腑に落ちないハルを尻目に、露店商が盆栽について補足する。

「まっこと残念ながら、そやつは売り物ではなくなてな。すまぬ」

「マジ？ あ、よく見たら値札付いてない……。あーあ、これだけでも買おうかなって思ったのに」

「待てい。これだけでもとはどういう見か。他は買わぬとでも申すつもりか？」

口が滑ったのを男は聞き逃さなかった。

一度見たならどれでも良いから買っていけ、そう言わんばかりの眼光を笠の下から覗かせる。鬼気迫る気配から、男の懐はかなり切羽詰まっていると見える。

アーボックに睨まれたニョロゾよろしく、追いつめられたハルは購入の選択しか取れなくなった。仕方なく適当なものを買うことにする。

そこで妙案を閃いた。

「なあ、技マシンは売ってない？　できれば格闘タイプ、攻撃の技！」

「ないな」

「よっしゃ。それじゃ、商売ガンバ〜」

即答されたので、なにも買わずに露店から離れることにした。

せっかくの金づるに逃げられては困ると、男は別の案を持ち出す。

「待たれよ。お主の求める品は、技マシンでなければならぬのか？」

「どーゆー意味？」

「秘伝マシンならばあるぞ」

ハルの足が止まった。

技マシンと秘伝マシン。違いがよくわからない。

引き返して詳しい説明を求めると、技マシンは戦闘に向いた技を収めたもので、秘伝マシンは戦闘時以外の場面でより効果を発揮するものだと言われた。

「自然からもたらされる困難を打破するために編み出され、長年に渡り伝えられてきた技。それが秘伝技だ。たとえるならば、“うずしお”という技があるが…」

「凄そーに聞こえるけどさ、バトルには向かないんだよね？」

「聞けい。技マシンに比べればの話だ。使いようによっては戦闘を

優位に進められる。：し、あらゆる技を闘いに活かすはトレーナーの腕次第、ではないのか？」

言われたハルはむむっと唸る。

しかも聞くところによれば、男の持つ秘伝マシンはちょうど格闘タイプの攻撃技。これを買って逃す手はない、さあ如何様に！？と啖呵を切られたハルは決断する。

「：買った！ 値段は？」

「ちと張るが………十万円」

小声で提示された額はぼったくりも良いところでハルは一括で支払った。

要求した側に衝撃が走る。

「………ツツツ！！！！ それがしの戯言を真に受けた挙げ句にこれほどの金額をポンと出したる貴殿は何奴でございまする？！」

強いて言えばポケモントレーナーである。

驚きのあまり言葉づかいまで怪しくなった男はへへっとひれ伏した。お金に余裕があっただけで敬われるいわれはないのだが、とにかくハルは秘伝マシンのケースを受け取り礼を言う。

「サンキューな、おっちゃん！ この秘伝技で、今度こそジム戦初勝利を飾ってやるぜ！」

「ジム戦………修行の身であったか。では、武運を祈ろう」

「おう。じゃあな！」

互いに別れを告げて、ハルは来た道に戻っていった。予想外にも早く目的が達成されたのでクロガネゲートへ向かう必要がなくなったのと、ポケモンセンターで秘伝マシンを起動するためだ。

また前方不注意で全力疾走していく少年を、男は札束をそそくさと鞆にしまいながら見送る。

「いやはや、なんとも器の大きい若者か。おかげで、しばらくは路銀に事欠かぬな」

将来は大物になるに違いない。金払いの良さでそう判断した俗物男は、儲けも出たので店じまいを始める。鞆から重たい腰を上げ、手始めに盆栽を風呂敷から退かそうとして“盆栽は自分から立ち退いた”。

鉢の底から出てきた二本の足でしっから立つと、風呂敷を下りて独りで歩いていく。勝手気ままに何処かへと去っていく器物を、男は追いかけるようとはせずにもた見送った。

「…己が仕えるべき主に巡り会えたか。寂しくはあるが、同志として引き止めはすまい。達者で暮らせよ、ウソハチ」

ここまで連れ添った旅の仲間の門出を祝い、露店の片付けを再開した。

第四話 岩の迷彩戦

決戦当日。

ポケモンセンターから出てきたハルを、輝かしい朝日が迎える。眩い光を一身に浴びた彼は、軽く腕や足を伸ばして深呼吸を繰り返す。

「うっし。行くぞ！」

トレーナーの仕草を真似していたビツパとヒコザルに合図を送り、ハルはクロガネジムへと歩を進めた。

気合いで引き締まった顔のハルが通りを行けば、クロガネシティの住民達は揃ってその勇ましい姿を目で追う。

勇ましい。あるいは、珍妙な姿を追いかける。

その日のヒョウタはいつにも増して真剣だった。

ジムに通う一般のトレーナーも近寄れない気の入れようで、朝からずっと腕を組んだ仁王立ちの姿勢を貫いている。恐らくは、今日

もまた挑戦しにくる“彼”を待ちわびているのだろう。

二人の間になにかあったのだろうか。ジムリーダーのただならぬ
い雰囲気、ジムトレーナー達は様々な憶測を立てていたが、その
内の一人――四日前に挑戦者へアドバイスをくれたトレーナーが、
見かねてヒョウタに歩み寄っていた。

「ヒョウタさん。朝早くからこうして、もう二時間ですよ。ちよつ
と休憩したらどうです？」

「うん、ありがとう。でもね、今日の僕ははっきり言って、冷静で
いられる心境じゃないんだ。昨日、ハルクんの凄いところを目撃し
てしまったから」

トレーナーの心遣いをやんわり断ったヒョウタは武者震いを見せ
る。

各街を代表する実力者をここまで“ふるいたたせる”とは、例の
少年はどれほどの特訓をしていたのか。これは、二週間目の初日で
想像だにしない大バトルが繰り広げられるのではと、ジムトレーナ
ーも固唾を飲んだ。

当のジムリーダーは、

「初心者なんてハンデも気にせず、心赴くままに手を動かすだけで
あれだけの埋蔵量を掘り当ててしまう、あの採掘技術……。僕とし
たことが、年甲斐もなくライバル意識を燃やしているよ……！」

「……。ヒョウタさん、ポケモンの話では？」

「僕もまだまだだね。慣れ親しんでしまったせいで、向上心という
ものを見失っていたよ。世界には僕を上回る技術を持つ人がたくさ
んいるってことを、彼は身を以て教えてくれたんだ」

「あの、聞いてください。ポケモンの話ですよね？ ヒョウタさーん？」

「これだから父さんはいつだって僕をひよっこ扱いするんだ。反発ばかりして、ちゃんと忠告を受け入れないで。僕はなんて未熟なんだろうか……。こうなったらもう、しばらくジムと炭鉱は休んで、武者修行の旅にでも出るしか！！」

「お願いです落ち着いて下さい。……。あのですね、なんていうかこう、盛り上がるところを間違えている気がします」

「どこがだい？」

「その情熱にポケモンの『ポ』の字も入っていないところですよ！！しっかりとして下さいジムリーダー！！」

趣旨が明後日の方向に飛んでいってしまったのをトレーナーが必死に引き戻す。ヒョウタは反論こそしなかったが、不服な顔で子供みたいな愚痴をこぼした。

「人はいつだって夢を追いかけていないとき。一つのことにとこだわっていたら、岩のように固くなって動けなくなるじゃないか」

「一つにとこだわって他をないがしろにしていた貴方が言いますか。せめてポケモンは忘れないで下さい」

「それなら心配いらないよ。僕もポケモン達も、トレジャーハンターを目指している同志だからね！」

トレーナーがトレーナーならポケモンもポケモンということだろうか。

この人の発掘好きも手に負えないなとトレーナーが説得を諦めると、邪魔の入らなくなったヒョウタは引き続き仁王立ちで考えに耽り、ジムを休みにするならポケモン協会に連絡を入れた方が良さだろうか、などと具体的な計画を練り始める。

ジムリーダーが職務を丸ごと放棄しかねないこの事態。歯止めをかけたのは、他ならぬ原因の挑戦者だった。

「たーのもー!!」

「ふふん、来たようだね。僕の最高のライバル！」

なんのライバルかはさておいて、ヒョウタは常連となった挑戦者の少年を出迎えた。
出迎えて、

「……………」

反応に困った。

おかしい。ヒョウタも、ジムでトレーニングをしているトレーナーやポケモン達も、ジムの扉を開けて立つ少年にジッと注目を集める。

昨日までにはなかったもの。

今日になって追加されてあるもの。

挑戦者ハルの頭の上に、何故か盆栽が乗っかっていた。

「…………え。あれ、ふざけてるんじゃないの？」

「やーどうだろ。本人至って真面目な顔してるよ」

「いやまさか、ファッションってことはないんじゃない？…ねえ？」

「まず、重くはないのかな。首を鍛えてるとかそんな訳、」

「よく落とさないで載せていられるな。…………着眼点そこじゃないか」

「謎だ…。今日の彼は、とこつとん謎だ」

誰しもが首を傾げ、口々に話し合い、奇異の目を向けたが、注目の的になっているハルはまったく気づかない様子でヒョウタの元へ。こちらもどう応対すれば良いのやらで迷っている最中だったが、ハルは待たずに宣戦を布告した。

「さあ、今日こそはヒョウタにいちやんに勝って、ジムバッジを持って帰るからな。覚悟しろ！！」

「う、うん。…………ところでハルくん、その頭は？」

「キマってるだろ？ 闘魂注入もかねて、ビシッとセッティングしたんだぜ！」

「…………、（えー？）」

さも当然のように返されてますます混迷を深めたが、ハッとヒョウタは気づいてしまった。

（ま、まさか。この奇抜なセンスが彼の類い希な技術の土台になっているんじゃない……？ 天才と凡人の感覚は一線を画すというし、これを理解できない僕は、彼を追い越すどころか追いつくことも叶わない！？）

盆栽クオリティと採掘技術にどのような関係があるのだろうか、明明後日に飛んでいった発想を思いつく彼の頭にそんなまともな思考は到らない。

とにかく重要なのは、ハルのセンスを否定的に捉えるのではなく、ありのままを受け入れるべきということだ。

そうして彼の取った行動はといえば、

「ハルくん。その頭、——スッゴク、キマってるね！！ 君の非凡なセンスを、ビシッバシッ感じるよ！！」

「でっしょー！？ 俺もさ、鏡見た瞬間、キタコレエエってなったもん！！ なー？」

「僕もそう思うよ！ 今の君は、シンオウ一番のっオシャレさんだ！！」

「照れるなもーっ。そんな褒めても手加減なんてしてやんないからなー？」

独特の世界観で盛り上がる二人を遠巻きに、トレーナー達はヒソヒソと相談しあう。

「誰か止めに行ったら？」

「やだ。近づきたくない」

着実に天才と凡人の線引きが為されていく。

「さあ、それじゃ始めよう。僕の手持ちは二匹。ハルくん、君はポケモンを何匹出す？」

「俺も二匹で良いぜ」

「ということは、もしかして？」

「うん。ビッパとヒコザル」

「…」

場所は変わって、ジムの最奥に設けられたバトルフィールド。壁や天井を岩に覆われ、フィールド上は固く均された茶色の地面。岩タイプ専攻のクロガネジムならではの、洞窟の内壁を思わせる造りとなる。

ハルとヒョウタは互いにフィールドの両端に立ち、ヒョウタは打って変わって真面目な様子でハルを観察した。使用ポケモンに変更がないとすると、またしても作戦なしの出当たり次第で来るのか。

（そろそろ“せいちょう”しても良いんだけど、ね。…いや）

ハルの顔には余裕があった。負けが込んでいてやけになりがちだった前日までとは違い、今日は必ず勝てるという自信を持っている。観察を終えたヒョウタは、ウエストポーチからモンスターボールを取り出してフィールドに投げた。出てきたのはイシツブテで、舞い戻ってきたボールを掴んだヒョウタはハルのポケモンを待つ。

「行け、ヒコザル！」

ハルが一番手に選んだのはヒコザルだ。ヒコザルは小さな体でピョンピョン飛び跳ねながら身軽さをアピールする。

「おっと、その前に——ヒョウタさん。対戦、よろしくお願いしますー！！」

始める前にハルが一礼して、ヒョウタもこれによろしくと応じた。普段から粗雑な振る舞いが目立つハルだが、こういった挨拶は欠かさず行っているのでヒョウタは何気に感心しつつ、ハルに好感を抱

いていたりする。

フィールド外中央に立つ審判員が、両者を見遣って旗を上げた。
バトル開始の合図だ。

「――ヒコザル、“いわくだき”だ！」

「やっぱり、技の相性を考えてきたんだね。：イシツブテ、避けるんだ！」

先手はヒコザル。四つ足走行で素早く駆けてイシツブテに接近、固く握った拳を突き出した。怪しい露天商から買い取った秘伝技“いわくだき”を繰り出す。

ヒョウタの指示にイシツブテは反応したが、岩タイプは大抵は移動速度が遅いため、回避できずに拳を食らってしまった。イシツブテの体にはヒビが入り、表情は辛そうなものへと変わる。

「おお、初めて効いた。その調子だぞ、ヒコザル！」

ハルの声援にヒコザルも得意気だ。

開始早々に手痛い傷を負ったイシツブテを前に、ヒョウタは冷静に分析する。

（秘伝技を持ってくるとはね。岩を粉碎するほどの強力な一撃……：ではなくて、“岩を砕くことにのみ突出させた”技。実はそれほどの威力はない技だけれど、“追加効果”は侮れないね）

“いわくだき”の追加効果は、受けた相手の防御力を下げるというもの。威力は低くても、効果は抜群な上に受けるごとにダメージが増えるとなれば、そうそう受けてはいられない。

しかし、イシツブテの行動順位は二番手だ。どうしても次の一手

でヒコザルに倒されてしまう。

それならと、ジムリーダーはこれまでの対戦でハルに見せなかった一手を打った。

「イシツブテ、“ステルスロック”」

「ヒコザル、もう一度“いわくだき”！！」

すでに詰まっている距離をさらに詰めてヒコザルが攻撃。イシツブテは険しい表情のまま、微動だにしない。

痛快な一撃が決まった。イシツブテは大きく弾き飛ばされて、ヒヨウタの近くに転がった。

「お……、おおおッシャアー！！ やったぜ、ヒコザルー！！」

ジムリーダー戦において、ようやく一匹目のポケモンを倒せた。

ハルは勝利した訳ではないとわかってはいても、喜びを抑えきれなくて天高くガッツポーズをする。フィールドの真ん中辺りに立つヒコザルも、キャッキャツと嬉しそうに鳴いた。

挑戦者達が浮かれている間、ヒヨウタは意識を失ったイシツブテに屈んで傷を労り、ボールへと戻した。残るは一匹、あとがないヒヨウタの口元には笑みが作られる。それは、単純に喜んでいるハル達が微笑ましいからでもあり、イシツブテがしっかりと“仕事”をしてくれたからでもあった。

「お見事。戦い方を一つ学んだね、ハルくん」

「おう！ さあ、次のポケモンを頼むぜ。ヒヨウタにいちちゃん」

「うん。これでやっと僕も“本気”を出せる」

ヒョウタの言葉に、え？ と呆けるハル。ウエストポーチから二つ目のボールが取り出され、二番手にして最後となるポケモンが繰り出される。

ヒコザルの前に現れたのは、青と灰色の体に尻尾を持った恐竜ポケモン。特徴的なのは鈍器のような堅い頭で、どんな岩でも粉々にしてやると言いたげな顔で前後に素振りをしてくる。

「めっちゃ強そうじゃん。しかも見たことない！ ヒョウタにいやん、そのポケモンは？」

「“ずつき”ポケモンのズガイドスだよ。発掘した化石から復元されるポケモンだから、野生で見えることはまずないだろうね」

およそ一億年前に生息し、高度な科学技術により現代に蘇ったポケモンだとヒョウタは話す。化石の復元を行ったのは博物館で、そのことを知らずに掘り当てた化石をすべて売却したハルは後悔した。

「そんな、ロマン溢れるポケモンをゲットできるチャンスを棒に振っていたなんて……俺のおバカ！！」

「また掘れば良いじゃないか。ハルくんの腕なら、いくらでも手に入れられるよ」

「そうか……。そうだな、また掘りに行けばいいか。その時はヒョウタにいちちゃんも一緒に行こうぜ！」

「勿論だよ！！ 僕と君で、地下に埋まった化石や宝を、全部掘り起こしてしまおう！！」

「…ゴホン」

バトル中に、掘り出したブツで山を築こう、山を！ とはしゃぎ出すジムリーダーと挑戦者へ、咎めるような咳払い。

審判員の人が、冷めた眼差しで二人を見ていた。

「二試合目を、始めても？」

「う、うん。そうだね。始めよっか」

「よ、よし。それじゃあヒコザル、気張っていこーっ」

白々しい二人の態度には、ヒコザルとズガイドスも呆れ顔だった。

仕切り直して、ヒコザル対ズガイドスの戦いが開始される。

「先手必勝！ ヒコザル、“いわくだき”！！」

イシツブテを倒したことで味を占めたか、ハルは三度秘伝技での攻撃を指示。ヒコザルは言われた通りにズガイドスへ接近して――

「残念。その攻撃は通らないよ」

「んな？」

フィールド中央を跨ぐより前の方で、見えない何かに激突して倒れてしまった。

ヒョウタの手前を陣取るズガイドスに動きは見られない。不可解な現象に戸惑いながらも、ハルはヒコザルへ攻撃命令を繰り返す。

「行け、ヒコザ……ああ!？」

駆けるヒコザルをまた何かが妨害した。仰向けに転んだヒコザルはすぐさま飛び起きて目を凝らし、前方を指差してハルに訴えかけてきた。

ハルもヒコザルを真似して、よくその場所を注視する。最初はなにもないように思えたが、見つめている内にぼんやりと半透明の物体が浮かんでいるのがわかった。

周囲の色に溶け込んだ謎の物体の正体を、ヒョウタが明かしてくれる。

「それはね、“ステルスロック”という技だよ。目に見えない岩を浮かべて、相手の動きを封じているんだ」

イシツブテが倒される前に、ヒョウタはこの技を放つように指示していた。仕掛けられた罠に気づかなかったハルはまんまと引っかったという訳だ。

ヒョウタの術中に嵌められながら、しかしハルは挫けなかった。

「いくら目にみえなくなっても、そこにあるのはわかったんだ。邪魔な岩は砕いて退かせばいい、ヒコザル!」

狙いをズガイドスからせき止められた場所に向けて拳を構え、通り道を塞いでいるであろう不可視の岩を砕こうと突き出す。だが、“いわくだけ”は空を切った。

「え、なんで…？」

「ただ浮かんでるんじゃない。この“ステルスロック”は、遠隔操作も可能だ。それは、技を放ったイシツブテから交代したズガイドスにも行える」

動きがないように見えるズガイドスだが、実は“ステルスロック”を操るために神経を集中していた。見えない岩が現在何処に浮かんでいるのか、ハルとヒコザルにはわからなくなった。

「……岩は一つだけだろ。だったら、」

「一つと言った覚えはないね。つけ加えると、“ステルスロック”はフィールド全域に散りばめてある。君のヒコザルに逃げ場はない」

「……ズガイドスだって、攻撃するなら近付かなきゃいけないだろ！そこを狙えばッ」

「“しねんのずつき”」

じっと動かなかったズガイドスが、途端に頭を振りかぶって前に打ち下ろす。額が下がりきる手前で、ゴツツ…と鈍い音が鳴り、同時に離れた場所に立っていたヒコザルがびくりと震え、フラフラと足元がおぼつかなくなった。

なにをされたのかわからなかった。ただ攻撃されたのは明らかで、

ズガイドスがさらに畳みかけようと上半身を仰け反らせたのを見て、ハルはとっさにボールを投げてヒコザルを戻した。

「交代、こーたい！　ちよつと際どいけど良いよな、ヒョウタにいちゃん？」

「構わないよ。さあ、次のポケモンを」

淡々と返されてハルは尻込みするが、他に選択肢はなかった。続けて投げたボールは“ステルスロック”の一つに当たったのか跳ね返り、ハルの近くに落ちてビッパが出てきた。

包囲された状態でズガイドスの元まで行けるかどうか、加えて回避しようのない“ずつき”技をどうやって防ぐのか。良い糸口が見つからないまま、ハルはビッパに指示を送る。

「…………、ビッパ、跳べ！　見えない岩に乗っても慌てるな、跳びながら前に進むんだ！」

ビッパはトレーナーの焦りもなんのその、いつものゆったりした動きで——見かけによらない跳躍力でフィールドの上空へ。下に気をつけながら降下していき、…………地面に着地した。

「…」

「…」

ハルもヒョウタも無言で眺める。ヒョウタは同じ説明を二度も繰り返すことなく攻撃を言いつけ、ズガイドスの“しねんのずつき”がビッパの脳天を揺さぶった。

たった一発で戦闘不能。ビッパは意識をなくしてコテンと転がっ

た。審判員が旗を振ってズガイドスの勝利を宣言するなか、ハルはビッパを抱き寄せてボールに戻した。

顔にあった余裕や楽しいな雰囲気はとうに消えている。ハルは眉間にシワを寄せて、ズガイドスとヒョウタを睨む。

「イシツブテは倒した……ヒコザルは体力があまり残ってない……ズガイドスの攻撃が見切れない……ビッパは戦えない……“ステルスロック”は、どうしたら……ッ」

現状を打破する方法を模索するハルを、ヒョウタは黙って見守った。最後まで諦めないその姿勢は評価するが、しかし今日はここまです。

酷なようだが、向かいくるトレーナーの壁となり試練となるのがジムリーダーの務めである。同情は厳禁と割り切って、再びヒコザルを出すのか、それとも敗北を認めるのかをハルに聞こうとした。

「ハルくん、今日は――」

「……………」

ヒョウタは口にした言葉の言葉を呑み込んだ。ハルは考えるのを忘れてパチパチと目を瞬かせる。

審判員とポケモンも含めた四対の目がそこに集まった。朝からここまでずっとハルの頭に取り付いていた盆栽が、パツと身を翻してフィールドの中に降り立ったところを。

盆栽に似た形のポケモン……と考えが及んだヒョウタに、心当たりが思い浮かぶ。しかしそのことを取り上げる前に、ハルが驚きの反応を示してきた。

「あーっ？ 昨日の露店に置かれてた盆栽！！ なんてここにある

んだ？ てか、お前ポケモンだったの！？」

（…あれ。なにこの初めて気づきました的なアレは。まさか頭の上に盆栽が乗っていたのを知らなかったとでも……………？）

衝撃の事実に硬直してしまうヒョウタの耳に、なおも無情な言葉が聞こえてくる。あーどうりで首が疲れると思ったーとか、いやいや鈍感を通り過ぎでしょ！！なんて突っ込みも入れていられない。ヒョウタはハルの才能に嫉妬して彼の感性を受け入れようとしたのに、実はそれが激しい勘違いで、うっかり新たな（常人には理解不能な）ファッションセンスの先駆者となった自分は一体どうしたら！？

後戻りできないジムリーダーはほったらかしで、ハルは盆栽に瓜二つのポケモンをしげしげと覗き込んだ。

「おお……。やっぱり渋くて良いな、お前。…………アイタ？！」

褒めたら何故か蹴りがきた。

なんか怒らせるようなこと言った俺！？ と蹴られた箇所を抑えてハルが叫ぶと、ポケモンは顔を赤くしてもじもじと身をくねらせた。どうやら照れ隠しだったらしい。かと思えば、今度は目から涙をポロポロ零し始めた。

盆栽の心境がサッパリ掴めなくて戸惑うハルに、助け舟とばかりにバッグの中からピピッと電子音が鳴った。なんだろうと漁ると、音を発していたのはナナカマドから手渡されたポケモン図鑑。二つ折りの電子機器を開いて上下の二画面を見れば、目の前のポケモンの詳しい情報がすべて表示されていた。

「なになに、“ぼんさい”ポケモンのウソハチ。“…めからみずをだしてからだのすいぶんをちょうせつする”と、泣

いてる訳じゃないのか。へー、これ便利だなー………イタいッ！」

ポケモン図鑑の利便性を知って感心するハルを蹴りが襲う。“ちからがじまん”なのか、小さいくせに強力な蹴り技を放ってくるウソハチに、涙目でなんだよーっとハルが聞く。

ウソハチはズガイドス、ヒョウタ、ハルと順番に視線を移し、たしたしと足踏みした。

「…もしかして、戦ってくれるのか？ 俺と一緒に？」

訊ねるとウソハチはコクコク頷いた。

ハルはしばし考えて、待ち惚けのヒョウタと審判員に問いかける。

「バトル始める前に二匹までって言ったよな。あれ、変更していい？ 三匹目にこのウソハチを出したいんだ」

「……ジムリーダー？」

審判員はヒョウタの判断に委ね、ハル共々窺う。肝心のヒョウタはなにやらうちひしがれていたが、自らを鼓舞するかのように話した。

「良いよ………嗚呼、良いさ。たとえこの世界でたったひとりだとしても、僕はこの感性を大事にしていくのさ………」

「良いんだな？ よし、それじゃあウソハチ、次はお前だ！」

ヒョウタの決意表明も虚しく、威勢を取り戻したハルがウソハチを送り出した。ウソハチも名乗りを上げただけあって、気合い満々で試合に臨む。

ヘルメットを外して頭の上にモンスターボールを乗せていたヒョウタも表情を引き締めた。新たに加わった戦力でどこまでやれるのか、斬新なファッションセンスで出方を窺い、カッと目を見開いたハルが攻撃を宣言した。

「ウソハチ、“はっぱカッター”だ!!」

グッとウソハチは力んで、頭部の先にある枝の葉を飛ばそうと――しなかった。

シン…、と静まり返る。

命令したハルはあれ？ と首を傾げてウソハチを見下ろすと、ウソハチはトコトコとハルの元へ戻って良い蹴りを喰らわせた。

「アッ――。…ッすね！ すねがイッタイって、ちょっと待て待て連続はキツいってちよ、タンマ!!」

堪らずにタイムアウトを取って作戦会議に入った。使い方がわからないポケモン図鑑を片手に四苦八苦する挑戦者を、ジムリーダーとそのポケモンは手持ち無沙汰で待つことに。

「――なるほど、ウソハチは草タイプじゃなくて岩タイプだったのか。紛らわしいな……いや冗談です蹴らないで」

どっちが主人なんだか、上下関係がほぼ決まったところでハルとウソハチは戦線に復帰。

改めて、ハルがウソハチへ指示を出す。

「ウソハチ、怖がるな。ズガイドスのところまで突っ走れ！」

ハルの“ステルスロック”に対して取った行動は単純明快、“構わず無視して強行突破”だった。無謀とも呼べる無茶な指示、しかしヒョウタとズガイドスは油断なく相手を見据える。使う技と相手のポケモンが同じ場合、大概は威力が半減してしまうからだ。

事実、ひたすら走ってくるウソハチは“ステルスロック”の妨害に遭っているはずなのに、ものともしていない。包囲網が敷かれてから初めて、ハル側のポケモンがヒョウタ側のポケモンへと接近していった。

「そうはさせないよ。ズガイドス！」

ヒョウタの呼びかけに、ズガイドスが“しねんのずつき”を放つ。攻撃はウソハチの額を捉え、弾き返しはしたものの、あまりダメージを与えられなかった。岩タイプに物理技は効きづらいのだ。

後ろに数回転がったウソハチは、すぐに立ち上がって再びズガイドスめがけて走り出す。

（ズガイドスは特殊攻撃が苦手だから技は覚えさせていない。“ステルスロック”も足止めにすらならなくなった。…いよいよ、ここまで来たね）

ズレた眼鏡を人差し指と中指で上げて、ヒョウタは次なる一手を打ち出す。

「ズガイドス、“ストーンエッジ”」

「ウソハチ、来るぞ！ 気をつけ、……………？」

どんな攻撃が繰り出されるのか、気構えたハルの目には“なににも映らなかった”。ウソハチも同様に警戒するが、ズガイドスは一点を睨んで集中するばかり。

その様はまるで、“ステルスロック”を操っていた時のような――

「……ッ。ウソハチ、止まるな！ 攻撃が来る！！」

ハルが気づいて指示した時には遅かった。ウソハチは“見えないなにか”の強襲を受けて、また自陣の方に弾き飛ばされてしまった。戦局を元通りにしたヒョウタは、教師が生徒に授業を行うような優しさで教える。

「“ストーンエッジ”。鋭く尖った岩の塊を相手に飛ばして攻撃する技。とても強力な技だから、同タイプのウソハチでも無傷では済まないよ」

「…、その技も消えるのか？」

「いいや。―――“普通はね”、消えたりはしないけれど。僕達は長い特訓の末に、“ステルスロック”と“ストーンエッジ”を複合させることに成功したんだ」

証明するかのように、パチンとヒョウタが指を鳴らすと、ズガイドスは両腕を広げて体を揺らし始めた。それを境に、フィールド全域に散らばっていた“ステルスロック”が、次々にウソハチへと襲いかかる。

ズガイドスの攻撃が見えないハルには、ウソハチが踊っているように錯覚した。

でも違う。ウソハチは苦しんでいる。

ズガイドスの猛攻に為す術なく、ウソハチの体力はどんどん削られていってしまう。

「ウソハチィ!!!」

痛みに必死に耐えるウソハチの名をハルが叫ぶ。トレーナーの聲が届いたのか、ウソハチは倒れかかった体を踏ん張って持ち直し、攻撃が止むまで辛抱強く立ち続けた。

つい先ほど仲間になったとは思えない絆がハルとウソハチの間にはあった。ポケモンと仲良くなる才能とでも言うべきか、これなら命令伝達や連携に齟齬^{そご}は生じないだろう。そう判断したヒヨウタは、押せば勝てる戦況で敢えてズガイドスの攻撃を止めさせた。

手を抜いてやるつもりはなかった。ただ、この劣勢を撥ね退けられるかどうかを試したい。ポケモントレーナーとしての底力を、自分に魅せて欲しい――!

「ウソハチの体力も残り少ないね。勝算はあるかい、ハルくん」

「く……ッ。必ず、勝つ。先に倒れたビッパのためにも、一週間頑張ってきた二匹のためにも、今日こそは絶対に勝つって決めてきたんだ!!!」

「気合い、根性、精神論、大いに結構だよ。でも、それだけじゃ僕のバトルスタイルは崩せない」

クロガネジムジムリーダーのヒヨウタが得意とする戦術。それは防御と攻撃の一体化。

“ステルスロック”で敵の前進を阻み、遠距離から“しねんのずつき”で迎撃。時には防衛目的で敷いた“ステルスロック”を攻撃

手段（“ストーンエッジ”）として狙い撃つ。

「守りながらにして攻める”。それが僕の、僕達のバトルスタイル——『堅守攻勢』だ。破れるものなら破ってみせてくれ、ハルクン」

「堅守、攻勢？ 守りながら、攻める……」

すべての手の内を晒してきたヒョウタを前に、ハルはなんとか攻略法はないかと頭をフル回転させる。

“ステルスロック”の包囲網は突破できるようになった。“しねんのずつき”もウソハチには効果が薄い。問題は、“ステルスロック”の迷彩効果を受け継いだ“ストーンエッジ”が、何処から飛んでくるのかわからないところだ。

防ぎようのない攻撃が四方八方から襲い来る、まさに八方塞がりの状況。攻撃されている間はやはり身動きが取れず、結果的に防衛の役割も果たすことになる。『攻撃は最大の防御なり』とはよく言ったものだ。

“ステルスロック”の厄介な特性、迷彩。“姿を隠して発見を防ぐ”、そのメカニズム——。

「……………閃いた。ウソハチ！」

「来るか？」

先手を譲って待ち構えるヒョウタとズガイドスに対して、ハルはウソハチに走るよう命じた。

これといって変わり映えのない全速前進。やはり手はなかったのか、それともこれからなにかしでかすのか。どちらにしても、ズガイドスはこれを“ストーンエッジ”で迎え撃つのみだ。

そこでハルから奇策が飛び出す。

「今だ、ウソハチ！ “まねっこ” ！！」

最後に使われた技を真似して放つ“まねっこ”。しかしヒョウタは首を振る。ただでさえ高難易度の技を二つ合わせた状態の“ストーンエッジ”。“ものまね”なら模倣も難しくはないだろうが、一段階劣る技“まねっこ”でこれを真似するのは至難だと、ヒョウタは失敗を予測した。

だが。

予測は大きく裏切られ、ウソハチは驚きの行動に出た。

「そうだ。そのままジツと動かずに、―――“盆栽になりすませ”。これぞハル流“ステルスロック” っだー！！」

猛々しい雄叫びと共に、フィールドの中心で盆栽が一つ、ポツンと置かれた。

ヒョウタはハルの顔を見た。得意げな、もう何処をどう探したってウソハチは見つけられない、そんな確信した表情をしかと目撃して“ストーンエッジ”。

「あれ？ バレた！？ ……あ、ちょ、ごめん。俺の作戦ミスだった。反省するから小指ィ…、」

格好の的となったウソハチはまともに攻撃を喰らって阿呆の元に戻され、ついでだから彼の足を思いっきり蹴っ飛ばした。阿呆は悶絶した。

これにはさすがのヒョウタも呆れるしかない。

「擬態と迷彩は似ていてもまったくの別物だし、ウソハチを隠せるだけの盆栽や植物がフィールドにはないじゃないか。…………ハルくん、おふざけはやめようね？」

「俺なりに真面目にマジメでドまじめだったんだよ！！ 次はこうはいかないからな！？」

割と本気だった本人の顔は真っ赤に染まっていた。

火照った頭をぶんぶんと振り、ハルは気を取り直す。目に見えない物体を見るにはどうすればいいのか。無色透明の岩が何処に浮かんでいるのか、突き止める方法を探す。

（無色透明…………“色が無い”、か。無いなら上から塗れば……………？でも、どうやって？）

考えが行き詰まっていく。出口の見えない迷路を歩き、思いつくものを頭に浮かべては何度も角を曲がって、やがて袋小路にさしかかる。

八方塞がりの暗闇が、ハルの探している答えを覆い隠した。

見つけられない。

（考えろ）

見当たらない。

（考えろ）

見えてこない。

（考えろって）

無色の闇の中では、なにも。

——今回も負ける。何度やっても結果は同じ。何故なら、お前は……………。

「…」

ハルは固く目を閉じて動かない。反対側に立つヒョウタは少し心配そうにするが、ハルから行動を起こすのを待ってやる。やがて、ハルは目を開けた。

視界を照らしたのは、小さく灯った明かりの標^{しるべ}。

「…ハハ、悪い。まだお前が残ってたのを忘れてた」

軽く笑って、謝って。戦えるよな、と確認して。

一度を力を抜いて深く息を吐く。絶対に勝てると自分に言い聞かせる。

戦ってくれるポケモン達を、信じ抜く。

「ウソハチ、戻ってこい！」

(…唯一戦えるウソハチを下がらせた。ハルクんの手持ちで戦闘を続行できるのは、)

フィールドの外にウソハチが出て、代わりにハルが投げたモンスターのボールからは、炎の尻尾を持ったポケモンが飛び出す。ズガイドスの“しねんのずつき”で弱り切り、フラフラながらも闘志を燃やすヒコザルだ。

ヒコザルは限界寸前、戦える時間はわずかしが残されていない。そうと知りつつも戦闘に戻したハルは、心の中で激励しながら指示を出す。

「ヒコザル。周りに“ひのこ”を放て！」

荒い息を思いつ切り吸い込み、ヒコザルは口から大量の“ひのこ”を撒き散らした。体力が残り少ないため、特性“もうか”により炎タイプの技の威力は上がり、通常より多くの火の玉が放たれる。フィールド全体に火の手が上がった。地面や岩に飛び散った“ひのこ”はパチパチと燃えて、そこに浮かぶたくさんの岩石群を揺らめかせた。

無色の岩に、赤と黄色が上塗りされる。

「見えたぞ、ヒコザル！ “いわくだき”だ！！」

かけ声と共にヒコザルは走り、目に見えるようになった“ステルスロック”に一突き、粉々に砕いた。続けて二個三個と、前進するのに邪魔な岩を砕いていく。

“ステルスロック”を攻略されたヒョウタは、岩のように揺るがなかった。冷静沈着にズガイドスへ指示を送り、各場所に配置してあった“ステルスロック”をヒコザルの前に移動。時間を稼いで攻撃に転じる。

「しねんのずつき」

“ステルスロック”の壁に阻まれて歩みの遅くなったヒコザルを開いた距離に関係なく届かせる打撃が襲った。岩のいくつかを壊す最中の、頭部への痛恨の一撃。ヒコザルは耐えられずに気を失い、天井を仰いで静かに倒れた。

追い打ちをかけるように、フィールドに放たれた炎は長く保たなかった。岩と土のみで燃えるものがないのだから当然のことで、火が消えて立ち上った白煙も“ステルスロック”が上空を回って攪拌し、霧散させた。“ステルスロック”はまた無色になる。

これで互いの手持ちは一匹ずつ。ヒョウタのズガイドスは未だ無傷を誇り、片やハルのウソハチは満身創痍で後がない。劣勢に立つハルは、それでも前を見据えた。

「サンキューな、ヒコザル。……ウソハチ、行け！」

ヒコザルを戻して再度ウソハチを前へ。ダツとズガイドスへ駆け出した。

「懲りないね。ズガイドス、“ストーンエッジ”！」

走るウソハチの周りに浮かんだ“ステルスロック”が、百八十度

全方位から狙い打とうと集まった。一発でも喰らえば恐らく戦闘不能になる。そしてヒヨウタは徹底して全弾を撃ち出させた。

「ウソハチ、——」“××××”」

岩同士が激しくぶつかり合う音がジムに鳴り響いた。直前で叫んだハルの声は掻き消され、ヒヨウタにはなにを言ったのか聞こえなかったが、どんな言葉であつてもこれでバトルは終わったとヒヨウタは思った。

それが勘違いであつたことを、すぐに知ることとなる。

ウソハチは、新たに怪我を負うことなく、そこに佇んでいた。

「……っ！ 驚いたね。どうやってかわしたんだい？」

「別に。ただ“じたばた”したんだよ」

「“じたばた”？」

ハルがウソハチに使わせた技“じたばた”は、ノーマルタイプの技だ。岩タイプとの相性は良くはないし、“ストーンエッジ”の攻撃をかくぐれるような技でもないはずだが……？

ヒヨウタは怪訝な顔で、今一度ウソハチを観察する。特に変わった様子はないように見えて、その姿が、やや“ぼやけて”映った。埃が舞っていた。ウソハチが“じたばた”したことで巻き上げられた、ジム戦を始めた当初はなかった砂埃——“ステルスロック

”を粉々にしてフィールドに撒かれた、無色を黄土色に塗り潰すための材料。

（…ヒコザルを出したのはこれのため？ 火で照らすのはいつときだけで、砕かれて迷彩効果を失った砂礫を“ステルスロック”の表面に付着させた。視認が可能なら、命中率の低い“ストーンエッジ”はいとも簡単にかわせてしまう！）

元々“ストーンエッジ”は的を外しやすく、相手に弾道を読まれて回避されやすい技だ。“ステルスロック”の迷彩能力を借りて相手の回避率を下げるといった手段も講じていたが、付着物で不透明となった今、傷ついた体のウソハチでもかわすことは容易となっていた。

「ヒコザルが残してくれた突破口だ！ ウソハチ、行っけえ！！」

最後の望みを託されたウソハチがズガイドスへと立ち向かう。ハルはとにかく接近を命じて、ウソハチはうつすらと見えるようになった“ストーンエッジ”の猛攻を必死にかわしながら、前へ前へと進んでいった。

ここにきてハルは薄々気づき始めていた。ズガイドスを繰り出してからのヒヨウタは、“ステルスロック”の妨害に次ぎ、“しねんのずつき”や“ストーンエッジ”による遠方からの攻撃と、極端に相手を近寄らせない戦法を取っていた。それはつまり、ズガイドスが“近接戦闘を苦手とする可能性”を示唆している。

「まあ、これだけ偏らせればバレもするよね。——ズガイドスの多くは、攻撃力がずば抜けて高い反面、その他の能力値がとても低い傾向にある。防御力もね。だから、いっそ相手を遠ざけたまま倒せるような戦術を考えてみた訳なんだけんど」

ヒョウタが語る間に、ウソハチが“ストーンエッジ”の包囲網を抜けた。ズガイドスまであと少しという距離、ハルも緊迫しながら拳を握り締めて身構え、攻撃を指示するタイミングを図る。

「……でもね。近づかれたら一卷の終わりとわかっているのなら、当然“対抗策”を講じるものだよね」

迎えるズガイドスは、ヒョウタの言葉を受けて技の操作を打ち切った。ウソハチの後ろで飛び交っていた岩石群が姿を現し、糸が切れたように地面へ落下していく。

足を開いて腰を落とし、眼前の敵を睨みつけて逃さない。“我が身を振り返らない覚悟”で頭を振りかざす。

「僕のズガイドスが唯一使える近距離攻撃技だよ。やれ…、”もろはのずつき”！！」

これまでの比ではない最大威力の“ずつき”が、ウソハチのてっぺんに振り落とされた。

掠ただけでも相当なダメージとなるのは必至。ハルの切羽詰まった大声が轟く。

「滑り込んでかわせえ！！ “けたぐり”！！」

ズガイドスの頭部がフィールドを抉り取った。打撃を受けた地面は爆破されたかのような烈しさで飛び散り、揺れと地響きがジム内の全員に襲いかかる。

破壊の痕にウソハチの姿は——…ない。ズガイドスの左手側後方、低い体勢で間髪逃れていた。ウソハチはすかさず起き上がって、ズガイドスのふくらはぎに強烈な蹴りを喰らわせる。

メキリ、と凹む音。ズガイドスの顔が激痛で歪み、片足を払われて倒れ込む。

……ウソハチを下敷きにする形で。

「……ズガイドス!! そのまま“もろはのずつき”を放つんだ!!」

「ウソハチ、“けたぐり”で横に弾けえッ!!」

倒れざまに狙い打たれた、ズガイドスの“もろはのずつき”。ウソハチは逃げることなく、足を振り上げてこれに応じる。

——互いの最後の技が交錯した。

タイミングがほんの少しでも遅れていれば、“もろはのずつき”が先に届いていた。ウソハチの全身はフィールドに埋まり、決着がついていただろう。そうならなかったのは、ハルとウソハチの両方が避けるか逃げるかで迷わなかったからだ。

躊躇わずに、攻撃を攻撃で返した。その結果、“けたぐり”が先んじてズガイドスのこめかみを捉えて真横へ蹴り飛ばした。

側頭部をしたたかに蹴られたズガイドスの体が、激しく地に叩きつけられる。ウソハチも体勢を大きく崩して倒れるが、後ろ宙返りで素早く起き上がった。ズガイドスが立ち上がってきた場合、すぐさま次の行動に移れるように。そして、それは杞憂に終わる。

「ズガイドス、戦闘不能。ウソハチの勝利! …——によって勝者、

挑戦者ハル!!」

動かなくなったズガイドスを見定めて、審判員が勝敗の行く末を高らかに宣言した。

敗北したヒョウタは目を伏せ、しかし満足げに笑みを零し、ズガイドスをボールに戻す。

勝利したハルは荒い息をそのままに、実感が持てずに呆然としていた。

嬉しさを滲ませた表情のウソハチが、傷つき弱っているながらも軽い足取りで帰ってくる。胸を張って見上げてくるその姿に、ハルの麻痺していた感覚も少しずつ戻っていった。

「……………勝った」

確かめるように口にすると、止まらなくなる。

「勝った。勝てた。やったんだ……………ッ。やったぞ、ウソハチ、ビッパ、ヒコザル!! 俺達の、勝ちだぁ……………ッ!!」

クロガネシティに訪れて八日目。ようやく手にしたジム戦初勝利の栄光。

この旅における、始めの一步ともなる記念すべき一勝。その喜びで胸を一杯にさせたハルは、途中参加でありながら頑張って戦い抜いてくれたウソハチを強く強く抱き締めたくて身を屈め、

「ウソハ————、おうふ」

照れ隠しの一撃を太ももに貰った。

「……………よし、それじゃあ次のジムのある街に行くんだけど、」

そう前置きしたハルは、目下で待機中のウソハチを見下ろす。

……………クロガネジムでの激戦を終えてポケモンセンターに帰ってきたハルは、ナースさんにポケモン達の傷と疲れを癒やして貰ったのち、ささっと旅支度を済ませて受付のあるロビーにやってきた。居眠りしているビツパと、その上でのんびり過ごすヒコザルの二匹を頭に乗せて、手には捕獲を済ませたモンスターボールを持ったハルが、いまさらながらウソハチに訊ねている。

「あの露天商のおっちゃんのところに戻らなくて良いのか？ 俺としては大歓迎だから追い出したりしないけどさ、本当に連れてっちゃうぞ？」

念を入れて確かめれば、ウソハチは笑顔で頷いてくれた。

ボールにもちゃんと収まったし、ウソハチが納得しているなら良いかな、とハルも受け入れて、ついでにもう一つの疑問も聞くことにした。

「なあ、ウソハチ。どうして俺に付いてくる気になったんだ？ 特別にかした覚えもないし、なんかワケでもあるのか？」

正面玄関へ歩きながらの質問に、ウソハチは後ろからてってて

っと走って追い越し、ハルの前へ。

新たなご主人様を見上げたウソハチは、出会った時の彼の言葉を
思い返した――、

『おお、盆栽だ！？ カッコイイ！！』

『いやー、やっぱりニッポン男子といったら、和の心だよな！ 俺、
渋いの大好きなんだよー』

『…つつつ (照) 』

ウソハチはポツと顔を赤らめてハルの足にしつこく“けたぐり”
“けたぐり” “けたぐり” “けたぐり” …、

「わかった。わかった。なんかよくわからないけど俺のこと好いて
くれてるのだけはよくわかったからお前の愛が痛すぎるーっ！！」

ギャー！？ と叫びながらポケモンセンターを飛び出していくト
レーナーと、懐きまくりで蹴り技を喰らせるポケモンの追いかけっ
こを、周囲の人達は眺める。

近所迷惑ではあったけれど賑やかだったなあと、名残惜しそうに
見送るのであった。

その五分後。

「……………ッ!! ナースさん! ここ一週間くらい滞在している黄色い髪の毛の男の子は!?!」

「ひっ!?! ……さきほど、出て行かれましたよ?」

「ありがとう、それでは!?!」

突然現れたかと思いきや、二言だけ残してUターン。“でんこうせっか”で行ったのは、この街のジムリーダー。マゲのように頭にピッケルを取り付け全力疾走していくその後ろ姿からは、鬼気迫る様相の理由が知れる絶叫が残される。

「ハーっ、ルーっ、くくくんっ!! ……………ジムバッジ受け取ってないよおおおおおッッ」

それからしばらく、クロガネの街で『ハル』の名は伝説として語られた、とか。

第四話 岩の迷彩戦（後書き）

・突発ネタ

ハル「かんそうした ばしよを このむ 。め から みずを
だして からだの すいぶんを ちょうせつする”。ウソハチはい
つも泣いているような顔をしている………つまり、」

ウソ『？』

ハル「泣きっ面に、“ウソハチ”………！！（ドヤ）」

ウソ『…』

ハル「うん、でも、そんな怒ることでもないって馬鹿にしたワケで
もなくて多分みんな思いついたネタだとオウツ！！」

第五話 草花の関係

コトブキシティから北へ進み、204番道路を通過したその先には“荒れた抜け道”という洞窟がある。ポケモンの住処となる環境を壊さないで欲しいという地元の願いから、道路整備を行わずにほとんど手つかずで残された空洞だ。道路から次の町の間には切り立った崖があり、秘伝技“ロッククライム”を使えるポケモンがいない限りは、この洞窟内部の段差を登って行く必要がある。

荒れた抜け道の崖上。町へ向かう予定の二人組が、通例に習い洞窟を抜けてから一時間ほどが経つ。二人は町への道筋を辿ることなく、入口付近の高台に留まって暇を持て余していた。

この場所で待機しようと提案した少年ダイは、陽を浴びてウトウトしているナルトを膝上に乗せて、背にある甲羅の土の湿り具合を確かめている。隣では手頃な岩に慎ましく腰掛ける少女フラーが、退屈したポツちゃんとリズム良く手のひらを合わせて遊ぶ。

ふと、そこそこ満足したポツちゃんが遊ぶのをやめて主人の両足に座ったのを機に、フラーはダイに声をかけた。

「ダイさん、ちょっと良いですか？」

「なに、フランシア」

「…、」

フラーは質問する前に、真顔でダイと向き合った。

「ダイさん。私はフラーです」

「うん、わかってるよ。それで、どうかしたの？ フランシ」

「フラーです」

「…それはわかったけど、話って、」

「フラーです」

「えっと」

「フラーです」

有無を言わせない語気の強さにダイはタジタジ。本名ではなく愛称で呼んで欲しいようだ。

正直に言えば、どちらの名を呼ぶのかで悩んでいたダイだ。本人がそうするよう頼んでいるのだから愛称で呼べば良いのだが、出会ってそう長くない仲で親密な呼び合いをするのはどうも気恥ずかしい。

とはいえ、これからしばらく旅路を共にするのだから、些細なことに後込みしていても仕方がない。

「えー、じゃあ、…フラー？」

「はい、フラーです。ダイさん、何でしょう？」

それはこちらの台詞だが。

ともかく、ダイは今のやりとりに不公平さを感じた。

「あのさ、フラー。“さん”付けはやめにしよう。僕のことはダイで良いよ」

「え…。ですけど、呼び捨てはしたくないです」

「構わないよ。フラーの方が年上なんだから」

言い切られて、フラーは目をパチクリさせる。

どちらの年齢が上なのかどうか、話し合った覚えはない。それなのに見透かしたダイは、ほぼ決定済みで確認する。

「僕の年齢は十四才で、ハルはあとひと月余りで十五才になる。フラーはもう一つ年が上で、十六才。でしょ？」

「…」

その通りだった。ズバリ言い当てた。
だが口にすべきではなかった。

「“からてチョップ”！！」

「ッ！？ え、なに、なんで！？」

「失礼ですよ！ 女性の年齢は聞いてはダメなのです！」

「いやでも、聞いたんじゃないくて確かめ」

「“かわらわり”！！」

「ゴメンナサイ割らないで！！」

やたらとキレの良い手刀が振り下ろされてダイは仰け反り、“みがわり”とばかりに膝の上で寝ていたナルトの甲羅に直撃。痛みはないものの驚いたナルトはヒアツと鳴いたり、誤爆したフラーは慌てて謝ったり、ダイはおっかなびっくりでたじろいだり。

『…なにやってんだよ。たかが年齢ごときで“さわぐ”なよな』

ボールの中から様子を窺っていたラッパーが、呆れながら出てきた。ナルトが怪我をしていないか見ていたフラーは、上手に喋るラッパーにパチクリとまた瞬きした。

「…？　今、しゃべって？　ペラペラ……？？」

「…………ラッパー。人前で“おしゃべり”は駄目って言うてるでしょ」

ダイにジトリと睨まれ、ラッパーはビクツと硬直する。普段“なまいき”で“ちのけがおおい”ラッパーにしては珍しい光景…、というほどではなくて、頻度で言えばしょっちゅう見られる。

“ダイは怒らせると怖い”。それを知っているからこそ、失敗した時などはふざけたりしないでさっと謝るのだ。

『わ、悪い。でもよ、これからずっと隠すのメンドーじゃないか？　フラーに聞こえないようにヒソヒソ話すのは嫌だぜ』

「そうは言ってもねえ。フラー、大丈夫？」

ラッパーの提案に、ダイは試しに確認する。フラーはグルグル目を回しながら、かなり怪しい言葉で答えた。

「はい。私のチョップは聞いてはいけませんよ。割れますから。ところがダイくん質問ですか！」

「…ほら、技の効果で混乱しちゃったじゃないか。僕やハルは慣れで耐性があるから良いけど」

『しょうがねえなー。じゃあ、フラーがいるときはなるべく口閉じといてやるよ』

渋々ラッパーが折れている間も、フラーはトンチンカンな言葉を流し続ける。

「ペラペラ叩いたらポツちゃんです。ここにいればコトブキと真逆さまなのは仕様です？」

『…技の効きが良いな。嬢ちゃん、才能あるぜ』

「なんの才能さ…。ほら、フラーもしっかりして」

「はいー。しっかりさんは何処ですよ。どっこいさんはあちらですよ…、」

混乱状態に陥った彼女を抱えたダイは、気持ちの良い風が吹く崖の方へ連れて行ってやる。ラッパーが迂闊に喋るたびにこうなるのなら、ちよくちよく聴かせて慣れさせた方が却って手っ取り早いかな、とラッパーの案を保留にしていると、手すりから身を乗り出さないよう支えていたフラーの意識がハッキリしてきた。

「はあ…、なんだかクラクラします。私、今、なにをしていますいま

したか？」

「僕になにか聞こうとしてたよ。思い出した？」

「：そうです。ダイ“くん”に質問です。ハルくんは、本当にここを通りますか？」

いつの間にか“さん”付けでなくなったのは、本人は気付いていないし納得のいく範囲内なのでそのままにして、ダイはこの高台で待っている友達の足取りを説明した。

「ハルは僕達より先にクロガネシティに向かったよね。そのジムに挑戦するために」

「はい」

「それで、首尾良くジムリーダーに勝利して次の街に行くことになると、選べるのは北のハクタイシティか東のヨスガシティ。でもヨスガはクロガネからは行けない状態にあるんだ。途中のテンガン山トンネルが崩れて塞がっているから」

ダイの説明を聞きながら、フラーは眼下の景色に地図を思い描いてなぞっていく。

「それでは、ハルくんの行き先はハクタイシティですね。私達のいるこの道もハクタイに繋がってますけど、ハルくんは直接ハクタイに向かうのでは？」

「こっちはソノオと森を経由しないといけないからね。せっかちなハルは、迂回路は通らないでしょ。でもね、ハクタイとクロガネの

間はサイクリングロードになってるから、自転車がないと通過できないんだ。クロガネから他の街となると、コトブキシティに引き返すしかない」

コトブキからは、ハクタイへと続くソノオとマサゴ、ミオと繋がり、ミオシテイへいく可能性も少なくはないが、これもないとダイは断言する。

ミオシテイへの途中の道路は半ばを海が横切って寸断。渡るには秘伝技“なみのり”か“そらをとぶ”か、それか定期便の船に乗るのだが、秘伝技はハルには早すぎるし、定期便は一日に二回しか運行していない。乗り遅れば次の便は最低六時間も待たなければならぬので、ハルなら九分九厘乗らないだろうと推測できる。

「旅に出て街から街へ向かう時は、必ず道路を通るようにって言い聞かせてあるから、獣道を行って僕達を見過ごすこともない。ハルの足の速さで、ジム攻略にそこそこかったとして、多分、今日辺りにはここを通ると思うよ」

「そこまで、わかるものなんですか、凄いです……。それでは、あそこからハルくんが出てくるのを待てば良いんですね？」

納得のいく説明を貰って頷いたフラァは、手すりに身を預けて眺めていた遠くのコトブキシティや山々から目を逸らし、後ろの荒れた抜け道の出口を指差した。道は一つしかなく、洞窟の中を通らなければ高台までは登れない。

そんな常識が通用する相手じゃないけどね、とダイは補足しようとして。

その通りに、ハルは荒れた抜け道を使わなかった。

「…しゃーんなろー！！！！　こんくらいの崖を、登れないでかーっ
！！！！」

「ひああ？！」

ぐわっ！　とフラーの後ろから人影が飛び出して彼女を驚かせた。
油断していたフラーは崖からの来訪に悲鳴を上げて飛び上がり、口
を開けたままピシッと硬直してしまった。対照的に、予想自体はし
ていたので驚かなかったダイは、タイミングの悪さにきつく目を細
めた。

「ハル、やっと来たね」

「お？　あれー、ダイがいる！　俺より先にいるなんて、明日は大
雪か！？」

「雪国だからなくはないけど、夏場だよ。そんなことより、ハル。
彼女を見てなにか言うことは？」

「あれ、フラーじゃん。どうしてダイと一緒にいるんだ？　もしか
して、博士もいたりするのか？」

「詳しい説明はあとでするから、彼女に謝っ」

「そうだ！　ダイ、見て見て、手に入れたんだぜ？　――クロガ
ネジム認定の証、『コールバッジ』！！　一つめゲットだぜ！！」

「そうだね、ハル。おめでとう。僕からも一つ良いかな？」

清々しいくらいに話を聞かない友達に、ダイは優しく微笑んで手のひらを彼の胸の中心に当てた。『?』と首を捻ったハルは、身に及ぶ危険には気づかない。

「僕と約束したよね、“ちゃんとした道を通るように”って。…じやあね、ハル。下に入り口があるから、今度はそこを通ってきてね」

意識、“出直してこい”。

トン、と体を押した。

『?』の顔のまま、ハルはゆーっくりに倒れていく。

そこから一気に下までズザ————つ。

「オギヤ——ッ!？」

『しんだか?』

「ハルは、強い子だよ」

一騒動あったが、ダイとフラァは無事(?)にハルと合流を果たした。

ダイはハルにこれまでの経緯を話して、フラァも旅に加わったことを伝えた。ギンガ団によるナナカマド邸襲撃とナナカマド自身の拉致についてのくだりでは、やはりというべきか、ハルは怒りを露わにした。

「チックショー。ギンガ団の奴ら、許せねえ！ 絶対に懲らしめてやる！！」

「ハル、博士との約束は？」

「わかってるけど！ ……バッジを八つ集めるまでは関わらない、ちゃんと覚えてるよ」

ダイの牽制にハルはぐっと“こらえる”。たった一言で暴走はおろか激情を抑え込んだのは初めてで、早くも旅に出たことによる成果が現れ始めたのだろうか、驚きながらも納得しかけたダイに、ハルからお別れの時間を知らされた。

「こうしてられねー。早く次のジムに行ってバッジを集めないとな。じゃ、ダイ、フラァ。俺行くな！」

「…」

つい再会したばかりの友達との交流を惜しむこともなく、ハルはダイとその背中に隠れているフラァに手を振って、

「はい、ストップ」

「おう！ ……ダイ？」

全速力で走り出す一秒前のハルの手を取り、出立を阻止した。
不可解そうに振り向くハルにはなにも言わず、ダイはフラーに倣
わせる。構図としては、ダイとフラーの間にハルを入れて両手を繋
ぐ（拘束する）形。

「はい。フラーはそっちの手を握ってね」

「は、はい。握りました」

「あの、お二人さん？ なにをしてらっしゃるのかナー？」

「うん。せっかく合流したんだから、一緒に行こう」

「それは、良いけど。ダイとフラーって歩きだろ」

「そうだよ。ケムツソより少し速いくらいで」

「歩くのです」

「…。俺は、風を切って、走りたい」

「その提案は、棄却されました」

「ハルくん、のんびり行きましょう？」

「…」

「…わー！！ 離せ離してくれ俺は次の街に行きたいんだジムバツ
ジ手に入れたんだ離してくれなきゃ泣くぞ泣くからなみつともな
くても泣いちゃうからなわぁーん！！！！」

その日の午前一杯、コトブキシティには、遠方から駄々をこねる
子供の泣き声が延々と木霊した。

第五話 草花の関係（後書き）

ジャンケンの要領で、

ダイはハルに強い。

ハルはフラーに強い。

フラーはダイに強い。

そんな関係でok。

第五話 穏和な一時（前書き）

色々諦めた結果。

（前回で詰め込もうとしてたけど多くて長くなりそうで台詞だけ書いた方が超☆楽だったのでこうなったのは仕方なきことでしたのネタ回）

第五話 穏和な一時

side “横道—road—”

〈1〉新規と決別一步手前

「ジャーン。俺達の新しい仲間、その名もウソハチ！！ 渋くて格好いいだろ？」

「わあ、可愛いです！」

『…、（不服）』

「へえ、珍しい子を捕まえたんだね。野生？」

「いいや、クロガネシティの道端で開いてた露店に置かれてた。次の日にジム戦に行ったらなんでかコイツがいてさ。でも、コイツが仲間に入ってくれたおかげで、ヒョウタにいちゃんに勝てたんだぜ！」

「ハルに良く懐いてるね。どんなことがあったのかは知らないけど、ウソハチはハルのことを好きになったんだね」

「おう。……表現が痛いけどなアアンツ。」

「ヒコザルとビツパは元気？」

「（しれっとスルーしたな…）、元気元気。最近は頭の席取りとかしなくなったのが気になるけど」

「…？ ハルくん、ビツパちゃんはボールの中ですか？ 見当たらないですよ」

「あれ？ ………あー」

『コイツ、またやらかしたか！』

「ノープロブレム、心配すんなって。いつもみたくダイが連れてきてくれるさ」

「僕が？ どうやって？」

「どうやってって、ほら、ダイが俺を追いかけてー…」

「…」

「…」

『このアホ』

「あ」

「……ビッパアアアアアアッツツ!!?」

「行っちゃった」

「だ、大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だよ。ほら」

『…(疲)』

「ビッパちゃん？ え、でも、どうして？」

「ハルがあんまりビッパを置いてきぼりにするものだから、暇な時にしつけてみたんだ。ハルの匂いを辿ってこられるように」

「は、」

「うん」

「……ハルくん、行っちゃいましたよ？」

「行っちゃったねえ」

『ザマア!!!』

〈2〉感動の対面

「ビッパア!!」↑戻ってきた

『ッ!』

「ビー…ッ、パア…:…ッ!」

『ッッッ (滂沱)』

♪BGM (某豪華客船沈没映画より)

「エンダ——」

「曲違う」

「:——ア、イヤ——」

『やかまし』

〈3〉変質者という名の

「ハル、フラーと博士のことを知らなかったってことは、ハンサムさんには会わなかったんだね」

「はんさむ？　なにそれ、人名？」

「強いて言うなら人だよ。自称国際警察のエージェントで、自分は格好いいんだって被害妄想を抱いている可哀想な人なんだ。ハルと一度話しておきたいからって、クロガネシティに向かったはずなんだけど」

「あ、待てよ……クロガネゲート出た辺りで、そんな名前を叫んでる大人に会った気がする」

「その時どうしたの？」

「ダイ、“変質者を見かけても目を合わさないで、全力でその場から立ち去るように”って言ってたよな？　その通りにした」

「正解だよ、ハル」

「正解で、良いんですか…？」

〈4〉図鑑使用法講座（軍隊式）

「あ、そうだ。ダイ、フラァ、これ見てみ」

「はい。ポケモン図鑑ですね」

「ハル、それについて博士からの説明受けてないでしょ」

「二人共知ってるのか…。まあいいや、これめっちゃ便利だよな！
今まで出会ったポケモンのことが全部出てくるぜ？」

「ポケモンの研究のために、オーキド博士やたくさんの人達と協力して造られたんですよ」

「ちようどいい。博士から図鑑の使い方を教えるように約束してきたから、今から」

「…でもさー、これ適当にイジってたら画面が真っ暗になってうんともすんとも言わなくなっちまってさ。叩いても直らないんだよ」

「ええ！？ それ、とても、高価で、大切………」

「…」

「まあ、気にすんな☆」

「えゝ…？」

「うふふ。まったくもう、ハルったらア」

脳 髄 の 裏 側 に ま で 、 叩 き 込 ん で あ
げ る よ 。

「――わかった？ ハル？」

「イエス、サー！！」

「僕の知識内で直せて良かったよ。ポケモン図鑑は精密機械なんだから、手荒に扱っちゃ駄目だよ？
・ ・ ・ へ ん じ は
？」

「さゝ、イエッサアッ！！！！」

「ダイくん…………コワイデス…………」

『へへっ。こんなもん、あの時に比べれば序の口よお…』

〈5〉 ハルとラッパ

『ハル!! テメエはいつもいつもふざけてばかりで、っとーに、
どうしようもねえな!!』

「ハーン? 俺はいつだって本気の印だっつーの! トリのくせに
難癖つけるなよな!!」

『トリ以下のテメーが悪いんだろうが!! その根性、叩き直して
やらあ!!』

「……………トリの叩きって、スゴく、くせですね?」

「フラァ、しっかりして。捉えようによってはかなり問題のある発言だよ」

「ハッ。……………はい、大丈夫です。フラァはアナタではありません。
ところで気になるんですけど、ハルくん達ってどうして中川に類似
ですか?」

「……………“仲が悪い”ね。それは、元々ラッパの最初のトレーナー
がハルだったからなんだけど」

「そうなんですか? では、どうして今はダイくん?」

「昔、フタバで行われる一年に二回のお祭りで、他の街から出稼ぎ
に来た屋台があってね…、」

そのポケモンは、222番道路で捕獲された幼いペラップだった。

屋台の陳列棚には子供達が喜びそうな景品が並び、ペラップはその中の特賞として、梁に引っかけて吊されたケージに入れられていた。

ペラップは自分が売り物であること、当たりくじを引いた人物が主人となることを知っていた。先行きがわからない不安もあり、それ以上に新しい生活への期待に胸を膨らませてその時を待った。

やがて、一人の子供が屋台の正面に近づいた。

——おじちゃん。その、ポケモン、プレミア……けーひん？

——ああ。一等賞より上の、特賞だ。当てるのは難しいぞ。どうだい、坊主。やってみるか？

——…オーケー。これ、コイン。

活発そうな子供はお金を渡してくじを引いた。ペラップは心臓を高鳴らせて開封を待って——外れた。とてもガッカリした。

ところが、子供はそこで諦めなかった。

——おじちゃん、ワンモア。

——もう一回か？ よしよし、ほーら。

——…、ワンモア。

——ほれ。

——…、ワンモア。

——うん。

——…、ワンモア。

——う、うん。

——…、ワンモア。

——十分経過——

——ワンモア。

——ぼ、坊主。小遣いは足りるのか？　そこまでハマってもら
うのは嬉しいが、ちっと心苦しくて……、

——ワンモア。

——だから、それは、

——ワンモア。

———お金の無駄遣いは、

———モア！

———。

結局、当たりくじが出るまで子供は引き続けた。当たった頃には、ハズレて貰った別の景品が山のように積まれていたが、子供はペラッポのケージだけを抱えて、嬉しそうに屋台を離れていった。

ペラッポは喜んでいた。自分を手に入れるために全財産をはたいた子供の腕の中で、きつと薔薇色の明日が待っているだろうと、そんな期待と喜びに満ち溢れていた。

そこへ、前方から同じくらい歳の子が現れた。子供の友達らしかった。

幸せ絶頂のペラッポを掲げて、子供はにこやかにこう言った。

———ダイ、ダイ！　ハッピーバースデー！！　プレゼントフォ
ーユーー！

幸せ絶頂のペラッポをケージごと手渡した。

ペラッポは一瞬我が耳を疑って、

———ありがとう、ハル。……………僕の誕生日、半年も先なんだけ
ど。嬉しいよ。

幸せ絶頂の余韻すら、残らなくて。

ペラップの幸せは。

薔薇色の明日は。

.....。

.....。

.....。

『シャー!! “つつく” “つつく” “つつく” “つつく” ー!!』

「うおお!! いっそ“みだれづき”にしろよ!」

『ハハアッ!! “みだれづき”より単発の“つつく”の方が威力が高いだよ!! 俺が何年ダイに育てられてると思ってるんだア!?!』

「何年だっけ。あれ、ラッパっていつダイの手持ちに入っただん?」

『て…ッ!? ん、メ………。俺のいたいな純情をグシヤグシヤに踏みにじっておきながら“ドわすれ”だあ…?! 勘っ弁ならねえッ、往生しろやア!…!!』

「…」

「あれでもマシになった方だよ。初めの頃はすっかり人間不信に陥って心を開いてくれなくなってる。今でもハルにだけは、ああやってトゲトゲしく当たったりするんだ」

「ハルくん、悪気はなかったんでしょけど、ラッパーちゃんが可哀想です。乙女の気持ちをなんだと思っているんですか！」

「あ、ラッパーがメスだってことに良く気づいたね。乱暴な言葉遣いだからわからないかと」

「同じ女性ですもの」

「そうなんだよねえ。もっと女の子らしく、お淑やかになって欲しいんだけど。…二度と裏切られてもへこたれないように、強く逞しく生きるんだ”って、決意しちゃって」

「…ラッパーちゃん、」

「それと、“ちゃん”付けで呼ぶと怒るよ。自分はオスだって言い張るから」

「ハルくんは、謝るべきです」

第五話 穏和な一時（後書き）

映画の題名はもちろん“夕”から始まらない。

『S・S・Anne』

第五話 園生の徒花

荒れた抜け道から緩やかに坂を下っていけば、広い盆地にある小さな町が見えてくる。良い香りに誘われたミツハニーやガーメイルが、時折強く吹く風に揺られながら、町の上空をヒラヒラと飛び回る。

ケムツソより少し速いくらいの歩みでやってきたダイ達の前に、一面を埋め尽くすほどの花畑が広がった。町全体の六割を色とりどりの草花が彩る、ソノオタウンだ。

自然の多いフタバやマサゴでも見られなかった美しい景観に、三人はしばし足を止めて花々に魅入る。

「うわあ！　すごく綺麗です。なんだか気持ちが落ち着きますね！」

「おー、“あまいかおり”のおかげで色んなポケモンが集まってるぜ。よっしゃ、虫取り大会やろうぜー！！」

「あのポケモンはまだ図鑑に登録してないなあ。あそこにいる子もだ。博士への“おんがえし”も兼ねて、生態を調査しておこうと」

「…」

素直に感動していたのはフラァーだけ。男の子二人組は、それぞれ別の部分に着目して花を見ていなかった。

「綺麗なのに…」

〈5〉

町へ訪れると、早速ハルが騒ぎ出した。

「ポケモンジムは、何処だー！」

「ソノオにポケモンジムはありません」

「はーい、通過通過」

町へ訪れて早速出て行こうとするハルを、ダイががっかりとホールド。

二人が一悶着している傍ら、蚊帳の外にいるフラーは、交わらうとはせずに辺りを見渡した。家の敷地内や歩道に沿って作られた花壇の鑑賞に夢中となっている。

目を閉じて深く息を吸い込めば、花の数だけあるたくさんの匂いが鼻腔をくすぐる。花の香りが持つリラクゼーション効果で心身ともに癒されている彼女だが、花の一つ一つに目を移すたびに、ある人物の顔を思い出していた。

「ナナカマド博士、無事でしょうか…」

もしもここにいたなら、一緒に花を見て厳つい表情を精一杯緩めただろうその人。ダイやハンサムは無事だったのが、健康に害のない生活は送れているのだろうか。考え出すとキリがなくなる。

大丈夫、とフラーは言い聞かせる。ギンガ団はナナカマドに危害を加えない。ナナカマドが研究内容を吐かない限り。

ダイとハンサムがそう言ってくれた。“大丈夫だよ”、と。

——大丈夫なはず、ないのに。

「え？」

「…、フラー。ちょっと聞きたいことがあるんだ」

はっと息を呑んだフラーを密かに覗き見ていたダイが、それとなく声をかけて意識を逸れさせた。フラーは考えついたことを整理する前に言葉を聞き入れ、返事をする。

「えっ、ええ。なんですか？」

「うん。その、フラワーの髪留めの花飾りさ。この辺りの花は全部わかるんだけど、その花だけはどうしても見覚えがないんだ。町に咲いている花の中にも似たものはなかったし、作り手のオリジナルデザインかな」

ダイが示したのは、フラワーが前髪を分けるのに付けている花飾りだ。左は丸いプラスチックの髪留めで、右には指摘した珍しい花が留めである。

「これですか？　：確か『グラシデアの花』だったと思います。小さい頃にお母さんから名前だけを聞きました」

よく見えるようにと、フラワーは留め具を外してダイに手渡した。花飾りは樹脂を加工した材質でできており、薄いピンクの花弁が六枚、茎から下側に繋がり合った葉っぱが二枚と、特徴的な形状となっている。

花の名称に心当たりはなく、ダイは興味深く飾りを見つめる。片方の手は逃亡者の首根っこを掴んで離さず、半ば諦めたハルも関心を持って口を挟んだ。

「なあ、店の中にならおんなじのがあるかもよ？　ほら、そこにあるフラワーショップ」

ハルが指差した先には、ソノオタウンでもっとも大きな生花店が建っていた。店頭飾られた花だけをみても、トラックの荷台一台分は裕に超える数がある。ジムのこともサクッと忘れてハルは向かい、後を追って二人も大量の花が生けてある店の中へ入った。

店内では、明るい照明の下で見事に咲き誇る花と、それを買い求めに来た客や連れ添ったポケモンで賑わっていた。先に花を探し始めたハルの姿は人込みに紛れてしまい、花と一緒にハルも捜すことになった。

「もう、油断するとすぐに先走るんだから」

「ハルくん、何処ですかー……あれ？」

他の客の迷惑にならないよう注意しながら店内を歩いていると、フラーは桶の中や鉢に植えられた花のいくつかを見て驚いた。

シンオウ地方で、夏から秋にかけて咲く赤い花が飾られている。その二つ隣には、冬から春にかけて咲く白い花が。極めつけに、シンオウの夏場では決して咲くことのない花までもが一樣に咲き乱れていた。

四季折々の花が混じり合って咲く光景に、訳を知るダイが気づいて理由を聞かせた。

「ソノオタウンではどうしてなのか、世界中の花が四季を問わずに咲くことができるんだ。土地の状態や天候でも発育は左右されるのに、この土地に植えるとどんな植物でもより長く育つし、花を咲かせて実を結ぶ。ここはまさに、花にとっての楽園——『園生』（そのう）なんだ」

多くの地質学者や生態学者が研究を続けているが、未だに解明されていない謎。一部では、神秘的な力がこの地に根付いており、植物に活力を与えているのではないかと空想する学者もいる。

返しそびれていた花飾りを渡され、また髪に留めながら話を聞いていたフラーは感嘆して顔を輝かせた。

「摩訶不思議なお話ですね。ここにあるお花は、みんなこの町に愛されて育ったんですね!」

「“愛されて”、か。確かにその表現がしっくりくるね。生まれてくる命を祝福して育む町……」

「昔の話だよ」

二人の会話に、しわがれた声が割り込む。

杖を突いた白髪の男性が近づいてきた。温和な顔つきをしているが、表情は寂しげで疲れ果てた様子の老人だ。

彼は軽く会釈してから、ダイとフラーに話しかける。

「君達はよそから来たんだね。ようこそ、罪深い町ソノオタウンへ」

「罪……。あの、おじいさん。どうしてそんな言い方をされるのですか?」

「さっき聞こえた話さ。この町で咲かない花はないと言っただろう。昔はそうだったが、今は違う」

「咲かない花があるんですか? そういう話は聞いたことがありますけど」

過去の記憶を探り出すダイに、老人は自嘲気味に笑って返す。

「自責の念が強くて、誰も語りたがらないんだ。それに、若い者はもう花があったことも忘れているからね。ソノオタウン原産の、ソノオにしか咲かない花……」

話す途中で頭を振り、老人はすまないと謝った。せっかく来てくれたお客さんに聞かせるような話ではないと落ち込み、ダイもフラ―も気にしなかったが、老人は申しわけなさそうに頭を下げた。

「悪かったね。こんなどうしようもない話をしてしまって。どうか、この町を嫌わないでくれ」

「いえ、貴重な話を聞かせて貰えて嬉しかったです。できれば、その花の名前を教えてくださいませんか？」

「花の名前は、『グラシデア』だよ」

老人の言葉に、二人は顔を見合わせた。様子のおかしいことに気づいた老人も二人を眺めて、そこでフラ―の髪飾りに初めて注目した。

とても驚いた顔で、打って変わって、とても嬉しそうな表情を見せる。

「お嬢さん、その花は……！」

「はい。この花もグラシデアですけど、これが咲かなくなった花なんですか？」

「…はっは。もう二度と目にすることはないと言っていたのに、毎日通ってみるものだな。しかし、造花か……いや、それでも……」

興奮した熱を冷ますように一息入れた老人は、ありがとうと口にした。別段なにかした訳でもないフラ―は戸惑い、それとなくお辞儀をする。

頭を上げたフラワーに、老人はさらに差し上げたいものがあると申し出てきた。

「たとえ偽物でも、あの花をまた見れて本当に良かった。これもなにかの縁だ。お嬢さんに、最後の一つをあげるよ」

「…これは、花の種ですか？」

「グラシデアの種さ。他にもたくさんあったんだがなあ。各地を巡って、植えて回って……結局、一輪すら咲かなかったんだ」

そんな貴重なものは貰えないとフラワーは返そうとするが、老人も首を振って遠慮した。なにか、これを機に未練を断とうとしている節が見受けられる。そのことを察したダイは、フラワーを説得して受け取らせた。

「それじゃ、町の見物を楽しんでいてくれ。さよなら」

「はい、ありがとうございます。さようなら…」

「あの、一つだけ聞いても良いですか？」

別れ際に、ダイは気になっていたことを老人に訊ねる。聞けば、また物悲しい顔をするのではないかと躊躇っていたことを。

「おじいさん。貴方はソノオタウンを罪深いと言いましたよね。自責の念が強いとも。一体、なにがあったんですか？　どんなことをすれば、たった一種類の花だけが咲かなくなるのか…」

老人は立ち止まって、思い出すように天井を仰いで、質問に答え

る。

「昔、グラシデアの花を好むポケモンがいた。そのポケモンは不思議な力を持っていて、花と一緒に感謝を捧げると、どんな願い事も叶えてくれると信じられた」

「感謝を…？」

「十年前のあの時を境に、ポケモンは姿を消してしまった」

ダイとフラーへ振り返り、老人は静かに微笑んだ。

「君達との出会いにも、『ありがとう』の感謝を込めて」

ワツと店の奥まった一角で歓声が上がった。ダイとフラーが駆けつけると、案の定そこにハルの姿を見つけた。

虫取り少年とポケモンバトルに勤しんでいたようで、たった今ビッパの“ころがる”で相手のヘラクロスを撃破したところだった。背後から黒いオーラを放ち接近する影を知らず、ハルは景気よくガッツポーズを決めた。

「やったぞ、ビッパ！　よく頑張ったな！」

「うゝ、ぼくのせきとりがゝ…」

「お前のヘラクロスも強かったぞ。せめて名前を“よこづな”にしておけば、もっと強かったかもなゝ」

互いの健闘を讃え合い、熱く固く握手を結んで、

「ネーミングセンスが欠片もなくてつけられないハルが言うことかな？」

耳元で囁かれたその声にハルはピシリと硬直。ギギギと首を動かしてみれば、怒りを微笑みで演出する器用な少年の顔が、真横に。瞬間、ハルは向き直って床の上に正座し、これでもかというくらい威風堂々とした振る舞いで以て怒れる友達に渾身の土下座を披露した。ダイは微笑んでいた。

微笑みが色褪せない、つまりまったく衰えない怒りを持て余したダイは、必要な単語だけを口にする。

「理由」

「断りも入れずに単独行動に走った、はい俺です」

「次回」

「反省の決意を胸に、再発防止に取り組む次第です」

「回数」

「…………覚えて、ないのです」

果たされない決意表明にいかほどの価値が？　ダイの微笑みはそう語っていた。

いつの間にか、ダイの凄みに圧された虫取り少年や見物人は軒並み遠ざかっており、ギリギリ踏ん張ったフラァが仲立ちを務めたことでダークサイドは解消。また先行されないよう二人の少年の手は繋がれて、客観的に見れば仲の良い二人とフラァは生花店を後にした。

しばらくして、神妙に手を繋いで歩いていたハルがあることを思い出して話題を振る。

「なあ、そういえばグラァシア？　の花って、見つかったのか？」

「グラシデア、ね。その名前は危険だから間違えないで。……………花はなかったよ。知っている人に話を聞いたら、ソノオには咲いてない花だってさ」

「そっか。ふーん。……………フラァ？」

納得したハルは、次にフラァへ関心を向ける。店に寄る前とその後で、彼女の様子が変わっていることに気づいた。

「なんか元気ないよな。花が見つからなかったせいかな？　また別の場所を探せば見つかるって！」

「はい…。そうだと、良いです」

「…」

ハルに励まされても、フラーの顔は晴れない。その理由を知っているダイは、心の中で自分の迂闊さを責め立てていた。

老人の口から語られた断片的な情報。その中に、ダイとフラーにも心当たりのあるキーワードがあった。それは“十年前”。

フラーはもう察している。この町で、過去にどんな出来事があったのかを。ダイも同様、花がどうして咲かなくなったのかはわからずじまいだったが、ソノオタウンの歴史に黒い部分があることを知った。

あれから、もう十年が経つ。

「ん！」

「うわ…」

「？」

三人が町の中を散策したあと、ポケモンセンターで宿を借りようと歩いていた時だった。まずはハルがソレを目撃して、ダイは嫌な顔で呻き、フラーは二人の反応に首を傾げた。

ダイとハルの視線は花畑に向けられており、次には止めようとするダイを振り切ってハルが走り出した。

「ハル、約束！」

「暢気なこと言ってるか！！」

「え？ え？ ハルくん、ダイくん？ 何処へ行くんですか？」

駆け出した二人に置いて行かれたフラーも走り、花畑の間を通り抜けて小高い丘を上っていく。

その先に見えたのは。

「いい加減に離れないと、ぶっ飛ばすぞ！」

「やだー！！」

大人二人と小さな女の子が揉めていた。二人組の男達の顔に見覚えはなく、その服装から、ギンガ団の構成員であることが知れた。いち早く女の子の危機を発見したハルは怒りに燃えて、拳を振り上げ殴りかかろうとする悪漢めがけてドロップキックを放った。一足遅れて着いたダイは女の子を庇って安全を確保し、最後に追いついたフラーへ身柄を預けて下がらせる。

ダイが息切れを整えながら前を向くと、ギンガ団とハルは一触即発で対峙していた

「このガキ、なにしやがる！」

「それはこっちのセリフだ！！ こんな小さい子に乱暴しようだなんて、恥ずかしくねーのかよー！！」

「ガキのくせに生意気な…！」

ギンガ団の二人は感情に任せてモンスターボールを手に、ハルもボールを取り出して構えた。こうなるともうバトルは避けられない。ダイは苦虫を噛み潰した顔で、なにを言っても聞きそうにないハルに声をかけた。

「ハル、博士との約束」

「止めるなよ。こいつらは絶対に許さねえ」

「僕も加勢するよ」

予想外の言葉にお？ とハルの意識が逸れた。ダイの方を見ると、ボールを手にして男達を睨んでいる。

「僕は博士と約束を結んでない。アレはハルとだけ結ばれたものだから。僕はギンガ団と関わっても不都合はないし、僕と一緒になら、ハルの約束も除外される。“ギンガ団と接触するのに、複数人いても駄目”なんて言わなかったでしょ」

「…それ、へ理屈って言う」

「理由をこじつけなきゃやってられないってこと」

相手はザコだしね、と付け足して。

ギンガ団の行いに少なからず怒りを覚えていたダイも加わり、かなり強引に制約を外されたハルは、喜びと沸き上がる激情を発散すべく悪者二人へと立ち向かう。

勝負は呆気なくついた。

ギンガ団側が繰り出したポケモンは、ダイとハルの最初のポケモンですべてノックアウト。負けた彼らは、お決まりの台詞を残してすたこらと逃げ出す。

「ガキのくせに、強いぞ!?!」

「チクショウ、覚えてろ!?!」

「へっへーんだ。出直してきやがれ!」

「二度と来ないで」

敵を追い払った二人は、場に出したビツパとナルトをボールに戻した。

ハルは意気揚々とダイに話しかける。

「どうだ? 俺達、強くなっただろ」

「うん。“まるくなる”から“ころがる”ことで守りながら威力を上げる戦法、良く思いついたね」

「あいや、これはヒョウタにいちちゃんの『堅守攻勢』を真似しただ

けなんだ。イシツブテでかなりやられてさ。他は？」

ハルに褒めるようせがまれたダイは、

「技を出すタイミングが遅い。相手ポケモンのタイプを考えるのは良いけど、技のタイプにも注意を払わなきゃ。ハルは出たところ任せが多すぎるよ。技が決まる度に喜んで隙ができるのも難点だね。理想としては、常に相手の二手三手先を読んだバトルを展開した方が、」

「もう良いです…」

良かれと思ってダメ出ししたら、ハルは気落ちして下がっていった。

二人が後ろで見ていたフラーと女の子の元へ戻ると、フラーは興奮して二人を褒め称えた。

「凄かったです。ダイくんもハルくんも、とっても強かったです！」

「フラー…！ お前だけが、良心だー！！」

「ふひゃあ！？」

「ハル、セクハラはダメ、ゼツタイ。……………君は大丈夫？ 怪我はしてない？」

「…」

過剰なスキンシップは野放しにして、ダイは女の子の無事を確かめる。薄紫の風船を手にした女の子は小さく頷くが、言葉は喋らな

かった。

ダイはギンガ団の逃げ去った方向を見て考える。こんな場所にまで現れるとは、いずれも大したことの無い集まりだったが、遭遇率には気をつけなければいけない。フラーは良いとして、ハルとはもつと行動を共にした方が良さそうだ。

「おにいちゃん。おにいちゃん」

「……ん？」

一人考えに耽っていると、女の子がズボンの端を握って引っ張っていた。ダイはしゃがんで目線を合わせ、話を聞いてやる。

「どうしたの？ お家に帰りたい？ 送ってあげようか？」

「いい。おにいちゃん、たすけて」

女の子は助けられたばかりなのに助けを求めてきた。後ろで騒いでいたハルとフラーも、様子がおかしいことに気づいて近づく。

ダイがどういふことなのかを詳しく聞くと、予想を遥かに越えて厄介な問題であることを知らされた。

「さっきのおじさんたちに、パパをつれていかれたの。おねがい、パパをたすけて！」

第五話 園生の徒花（後書き）

ハル「ダイにネーミングセンスをとにかく言われたく、」

ダイ「なーにー？」

ハル「なんでもございませッ」

ダイ「ふむ。じゃあ、ハル。ビツパに名付けるとしたら？」

ハル「ねずみ！」

ダイ「…、ヒコザルは？」

ハル「さる！」

ダイ「…。ウソハチは？」

ハル「ぼんさ」

ダイ「ハル、名付けるのは、諦めよう？」

第六話 荒ぶる火猫

ソノオタウン近辺にある、二カ所の施設。一つは花畑と川を挟んで北に位置する『タタラ製鉄所』。もう一つはテンガン山から連なっている山間に位置する『谷間の発電所』。

その日、両施設のうち製鉄所は通常通り稼働。細長い煙突から白煙を立ち上らせて、作業員や力自慢のポケモン達が汗を流していた。一方の発電所は、外観では判別しづらいのだが、機能の大半が停止状態。回復の兆しは見られず、このままでは周辺地域が電力不足で停電してしまう恐れがあったのだが。

「…チッ。馬鹿の集まりにも程があるだろうが」

発電所内で再稼働が確認されてからおよそ三時間。机の椅子に座った女性は、頬杖を突きながら苛立たしげに呟く。

「研究員共は一人も連れてきていない、プルートのクソは何処かへ行ったきりで見つからない、施設は自分達では動かせませんんだあ？ ……どいつもこいつも、能なしの役立たず共が。テメエで扱えないなら、扱える連中を引っ張ってくれば良いだけの話だろうが。こんなクソうぜえことにあたしを巻き込みやがってよお……………」

ショートカットの赤い髪の女性は、現状に辟易しているのか、不機嫌真っ只中。可憐な容姿に反した汚らしい言葉遣いで愚痴を零しては、取り巻きの部下達をビクつかせている。

彼女はギンガ団幹部の一人、名をマーズ。本来なら別の任務で活

動しているはずの彼女は、訳あって谷間の発電所を占拠する部下達の指揮を取っていた。

マーズがここにいる理由は、彼女の愚痴に多く含まれている人物名にある。“科学開発班顧問教授”という肩書きを持つその人は、れっきとした幹部の一人なのだが、現在はこの場を留守にしていた。身も蓋もない言い方をすれば、サボっていた。

「計画に必要なエネルギーが足りないから取ってこようとか抜かした挙げ句、着いたらさっさととんずらこきやがって。あの野郎……ッ」

奔放な科学者に振り回され、マーズの沸点は低下気味。少しでも気に入らないことがあれば噴火しかねないので、部下の数人は小声でやりとりをする。

「俺達の方が、とんだビンボーくじだよな。じいさんを恨むぜ」

「言うな、泣きたくなる。……ハア。願わくば、このまま何事もなく終わって帰れれば……」

「おい」

「は、はい！」

「まだ終わらねえのか。あたしが来てから三時間だぞ」

「ま、まだ、かかるのでは、ないかと……」

「チッ。ボサボサしてんじゃねえ！ もっと急がせろ！！」

「はいい!!」

怒鳴り散らされた部下は、わたわたと下がっていく。奥で作業を続ける発電所の所員達の元へ、ペースを速めるよう指示しに行った。入れ替わって、所員の一人がマーズの前に進み出る。ギンガ団の何人かは、彼の迂闊な行為に不味い顔をしたが手遅れ。マーズの眼光が肩を縮こまらせる所員の男を射抜いた。

「なにしてる。さっさと作業を終わらせろ。そうすれば解放してる」

「あの…、相談したいことがあるのですが」

彼はビクつきながらも要件を話した。発電所のエネルギーをギンガ団が持ち寄ったバッテリーに溜め始めてから、各地へ供給する電力は備蓄していた分を回していた。それが尽きかけているので、一時だけ発電エネルギーを通常通り各地へ送らせて欲しいと。

備蓄が切れれば、町や都市は大停電を起こす。それを避けるために、男はマーズへ懇願したが。

「備蓄していた分があったなら、どうして言わなかった。そっちの電気を差し出せば時間を短縮できただろうが」

「で、ですけど、あのバッテリーの全体容量だと半分にも満たないので、結局は」

「溜める必要があった。その間、周りが停電するから、隠していたって訳か？」

見透かされて、男はゴクリと唾を吞んだ。さらにマーズの機嫌が

下がったのがわかる。

「作業を続ける。団の各支部は自家発電器を備えてある。困るのはその辺の連中だろ。ギンガ団の活動に支障が出ない限り、不要なことに時間を割くな」

「で、でも…」

停電が起きれば、ポケモンセンターや病院などの医療施設は大変困ったことになる。引き下がる訳にはいかないと勇んだ男を、赤髪の猫が眉尻を上げて睨んだ。

「お前、娘はいるか？」

「は……はい。います」

「そうか。——ずいぶん前に、発電所入り口に五か六くらいのがキが来たぞ」

「え…」

男の脳裏によぎる記憶。自宅に押し入れられた際に、とっさに物置に隠してきた一人娘。何度か発電所へ連れてきたことがあるため、町からここまで歩いてくることもできる。

顔色を変えた男を見上げ、椅子に座ったまま寛ぐマーズは調子を変えずに喋る。

「パパにあわせてパパにあわせてってうるさくってよー。…どうしたと思う？」

「…………ッ。む、娘は助けて下さい！！　お願いです、あの子だけはっ、」

「だったらさあ！！」

急に声を上げたマーズの手が男の胸ぐらを掴んだ。顔を寸前まで近づけた二人は、お互い目を見開いて視線を合わせる。

「黙って言うことを聞けよ。無事に、五体満足の娘と会いたいんなら。なあ？」

「……………」

目に涙が浮かぶ。体がブルブルと震える。娘がどうなっているのか見当もつかない。

従うしか、ない。

足取り重く戻っていく後ろ姿を、マーズはつまらなそうに欠伸しながら視界から外した。本当は下っ端に任せて、適当に怒鳴って泣かせて追い払ったらしいのだが、大人しく言うことを聞かせるのなら、このくらいハツタリを効かせた方がよい。

一部始終を見ていた部下達までをも恐れおののかせた彼女は、また苛々しながら暇を持て余し始める。

次に現れる人物が新たな火種を持ち運ぶとも知らずに。

女の子の話では、本日は休暇を取っていた父親と花畑へ遊びに行く予定だったらしい。そこへギンガ団の構成員が現れて、父親をさらってしまった。

父親の機転で危機を免れた女の子は、発電所まで追いかけはしたが門前払いされ、泣きながらも諦めきれずに、今度はソノオタウンで見かけたギンガ団へ詰め寄って先ほどの状況に至ったという。話を聞いたダイは、真っ先に隣で聞いていたフラーを直視した。

「ダ、ダイくん？　どうして私を見るんですか？」

「うん。最近、似たような構図を見たなあって思ってる」

連れ去られた大事な人を取り戻すべく、後先考えずに危険人物に突撃。まさしくフラーの行動と一致していた。

愛想笑いで誤魔化すフラーを尻目に、腕を組んで難しい顔をしていたハルは即座に判断を下す。

「よし、助けに行くぞ！」

「まだ早いよ。はい駆け出さない」

一念発起したハルをダイが捕まえた。助けるという言葉に顔を明るくした女の子の手前、はつきりとは断れなくなったが、これ以上関わるのを良しとしないダイは、遠回しにハルを説得する。

「ハル、怒るのはわかるけれど、抑えて。今はまだ僕達が行ったってなにも解決できないよ」

「それじゃあ、いつ行くんだよ。時間は待っちゃくれないぜ？」

「まず、ギンガ団の目的を明確にする。どうして発電所を狙ったのか、非番の所員まで連れ出した理由とかが気になるし、」

「どうでもいい、まだるっこしい！！ そんなもん、パツと行ってキュツと捻ってグルングルンにふん縛れば、即・解・決！！ さっきみたいに力を合わせればさあ！」

「さっきはさっき。相手が弱かったから力づくで追い払えたんだ。発電所にいるギンガ団も同じようにいくとは限らないよ」

「最初っから諦めてどうすんだ！」

「もっと慎重に動かなきゃ駄目！」

二人の主張は平行線を辿って、肝心の女の子が不安な表情で見上げているのを見落としている。それに気づいたフラァは、腰を屈めて女の子を勇気づけようと話しかけた。

「大丈夫ですよ。ダイくんもハルくんも、とっても強いトレーナーさんですから。きっとなんとかしてくれます」

「でも…、おまわりさんも、なにもしてくれなかったよ。たすけてっておねがいしたのに、アッチにいけっていわれた」

警察へ頼ったが、そちらでも門前払いされていた。子供の冗談として取られたか、あるいはギンガ団の手が回っていたか。

話を聞いたハルとフラァが、見た目にもわかるほど怒った。たじろぐダイに詰め寄って二人共に叫ぶ。

「ダイ!!」

「ダイくん!!」

「待って、待って二人とも! 肝心なことを忘れてるよ。僕達には、まだ頼れる大人がいるじゃないか」

…本当は頼りたくないけど、と独りごち。

ダイは妥協案として、国際警察のエージェント・ハンサムに助けを求めることにした。一応はそれで落ち着いた二人を背に、ダイは携帯電話を取り出して以前交換したハンサムの電話番号へとかける。数回のコール音のあと、やたら弾んだ声が電話越しにあるダイの耳を襲った。

「もしも…」

『や———っダイくん!! 元気かい? 別れてからそんなに経ってないのにもう連絡してくれるなんて、ハンサムさん喜んじやうぞお?』

「…。折り入って相談」

『いや——しかし残念なこと!! ハンサムさんは現在忙しくて手が離せない状況なのだよ。ついでに話せない状況なのだよ? ハッハッハッハッ、イツツ・ア・ワールドジョーク!!』

「…………、ごめんなさい。少しで良いから話を」

『それでは、ダイくん! 君とのささやかな時間もここまでのようだ。後ろ髪を引かれながら、この通話を切ろう! ではまた次回、まった来週——! ——プツッ』

「ハンサムさん? もしもし、ハンサムさん!？」

ろくに会話も行われないまま切られてしまった。ダイはすぐに電話をかけ直すが、電源を切ったらしく、繋がらない。おかけになった電話番号は——と、録音された音声为空しくダイの耳に流れた。

「…」

「ダイくん? ハンサムさんは、なんて……………」

「ハッ! フラー、マズいぞ。ダイに近づくな!」

携帯電話片手に無表情で立ち尽くすダイを見て、ハルがフラーを止めた。小声で耳打ち、今のダイは“本当に怒る”寸前だと教えてやる。

「“本当に”? どういう意味ですか?」

「まんまの意味だよ。ダイが普段見せてる“いかり”は、実は演技で、そこまで怒ってはいないんだ。相手を叱ってわからせるためにフリをするんだよ。…俺は、一度だけ、怒らせたことが、ある。アレは……思い出すだけで……っ。だから、あの状態のダイは、絶対に刺激しちゃ、ダメなんだ！　良いか、絶対、」

「ハル、聞こえてるよ」

「はうあ!？」

大袈裟に飛び上がるハルに呆れながら、逆巻いた感情をやや落착かせたダイは溜め息を漏らした。

意を決するように、今後の方針を決める。

「わかったよ。……あのエセエージェントが頼りにならない以上、僕達でなんとかするしかないね」

「おお！　そうこなくっちゃ!!」

「ただし」

喜ぶハルをぬか喜びにさせて。

「条件がある。それを守れるって誓えるなら、——谷間の発電所へ向かおう」

岩肌が剥き出しの崖に囲まれた、谷間の風力発電所。その玄関前に、ガラス戸を遮るように直立する銀服の姿が見られる。ギンガ団の下部構成員である男は、発電所へ出入りしようとする者を閉め出して入らないよう監視する係りを受け持ち、基本やることがないのでポケットと突っ立っていた。

暇潰しに、山の高い位置などに建つ発電するための風車や、発電所裏手にある川の流れに目を移すなどしてみるものの、面白さに欠けるのですぐに飽きてしまう。早く次の交代にならないものかと焦っていたそこへ、町の方から一人の少年が歩いてくるのが見えた。前に見張っていた同僚の話では、所員の娘が父親を捜しにやってきたのを追い返したらしい。その少年も同じ類かと決めつけた男は、軽く咳払いして声音を落とした。

「おい、止まれ！　ここへなにしに来た？」

『こんにちは。発電所の見学を希望していた者なんですが』

肩に柄の強い鳥ポケモンを乗せた少年は、先日につながを入れた社会科見学の希望者だと言う。将来こういった職業に就きたいのでぜひ見学を、と話す少年に、内容の半分も聞き入っていない男は、手のひらを振って追い返そうとした。

「予定が変わったんだ。今は忙しくて誰も相手をしている暇はない。帰ってくれ」

『でも、今日は見学をしても良いって、電話で聞きました。都合が悪くなったって連絡も来なかったし。僕、発電所の中を見て回りたいんです。邪魔はしませんから、お願いします』

「駄目だって言っているだろ！ 中をうろつかれたら邪魔でしようがないんだよ。良いからさっさと帰れ！！」

やけに食い下がってくる少年に嫌気が差して、男の機嫌は悪くなっていく。最後はほとんど怒鳴るように言うと、少年は酷く肩を落として諦めた。

『わかりました…。中には入れないんですね？ 今日はどうしても見学したかったのに。今日は駄目なんですね？』

「そうだ。わかったら消えろ。もうここへは近づくな」

ようやく追い払えた男は安堵して、少年が立ち去るのを見届けようとする。少年は踵を返して別れの挨拶を、

——言わずに。

『はい。それでは“中へ帰ろうと思うので、扉を開けて下さい”』

「しょうがないな…。ほら、さっさと中に帰れ。もう来るんじゃないぞ！」

男は少年の不可解な言葉に真顔で受け応えたばかりか、何一つ疑問に思うことなく後ろの扉の鍵を開けた。

『それとついでに、帰り道がわからないので、発電所の案内を頼んでも良いですか？ 自宅は制御室にあります』

「そうか…。いや、俺で発電が帰した代わりが、お前なのは追い返すんだ？　わからないなら俺だ！」

「…あ、ダイくんが入っていきます」

「おー、よくやるよなー」

発電所からほど近く離れた草藪の陰。そこで待機を命じられたハル達は、発電所玄関前のやりとりを遠目から眺めていた。

二人の会話はここまでは聞こえず、ダイが何事もなく発電所内へ立ち入るのを目撃したフラーは、謎の答えをハルから聞いた。

「アレな、ダイが喋ってるように見せかけて、実は肩に留まったらッパーが“おしゃべり”したんだ。技の効果で相手を混乱させた上に、適当な言葉で誘導して操るんだよ。昔から、俺がちよっとやらかした時なんかには、逃げる手段に使ってさ」

「はー。でも、ダイくん一人で大丈夫でしょうか…」

「大丈夫、大丈夫。ダイはこういうのを解決するのが得意だから。俺もかなりお世話になったな」

幼い頃を思い出しか、ハルは笑いながら話す。感心して頷くフラーも、ダイとの思い出を語り出すハルが微笑ましくて自然と顔をほころばせた。

「俺とビツパが八百屋さんに突っ込んだ時なんかさー、」

「ウフフ」

「……なに？　俺、変なこと言った？」

「あ、いえ、ごめんなさい！　ハルくん達は仲良しさんだなんて、そう思っただけなんです。それと、ハルくんの、ダイくんを信頼しているところとか、羨ましいなって」

フラーはここへ来る前に行った作戦会議のことを持ち出した。

ダイが話している間、早くギンガ団を倒しにいきたいとせがんでいたハルはグツと堪えて話を聞き、ダイの提案にも反発することなく合意。先にダイが一人で潜入すると言い出した時も、反対意見を言わなかった。

ダイが取り決めた“条件”もあって、従うことなく好き勝手に動くこともできたのに、ハルはその場待機を受け入れた。ダイの発言を強く信頼している証拠だ。

「まあなー。だって、ダイがなにかしてくれた後に状況が悪くなった試しなんてないし。それに、俺はダイのことをリスペクトしてるからさ」

「尊敬、ですか？」

おう、と頷いて。

また一段と嬉しそうに、悔しがる様子も見せずにハルが教える。

「ダイってさ、ポケモンバトルが嫌いなクセに、やたら強いんだよな。俺、一度も勝ったことがないんだ」

玄関口を無事くぐり抜けたダイは、建物内部の観察を怠らない。男の後ろを歩きながら、素早く目だけを動かしてこと細かに記憶していく。

通路を進む傍ら、肩に留まったラッパーが口を開いた。

『なあ、本当に良かったのか？ 関わりたくないって言ってただろ』

「それは、そうなんだけど。でも、ハルをギンガ団と関わらせるのはもつと嫌。どんな目に遭わされるのかって、想像しただけで寒気がする」

「アイツのことよりも、お前は大丈夫なのかよ？」

心配してくれるラッパーにありがとうと言い、ダイは心配いらないよと返した。旅立ち当初はギンガ団とは金輪際会いたくないと思っていたはずだが、心境の変化でもあったのだろうか。

不思議がるラッパーに、ダイは少しだけ本音を漏らす。

「正直に言うと、ギンガ団自体は別に恐くはないんだ。もっとも会いたくないのがギンガ団の総帥——あのアカギって人で、念を入れて、ギンガ団にも出会いたくないって言ってたんだよ。だから、大丈夫」

『ふーん。そうじゃ、これからどうする？ 発電所に入ってから捕まってる連中をどう助けるのか、そこんところの具体的な策を聞いてないぞ』

「…」

聞かれたダイはうーんと唸り、ラッパーは不安を募らせた。

『…おい。まさか、なにも考えてないとか抜かすんじゃないだろうな』

「あはは。まあ、多分、相手方にリーダー格の人がいるだろうから、話をしてみるよ。上手く説得できれば、解放してもらえる…かも」

『かもて。ハルみたいな行き当たりばったりするなよ。らしくねー…』

そう言われても、ダイとしてもこの現状は不本意なものなのだから仕方なかった。人質状態の所員を解放、加えてハル、フラー、女の子の安全を確保するには、誰かが多少の無理をこなさなければならぬ。

それなら、自分が犠牲となって負担しよう——そういう我が身を振り返らない考え方をするダイが、一番危なっかしくて問題なの

だが。

『ったく。…自分も数に入れろよな』

「ラッパー？」

『なんでもねーよ。……制御室だ』

“おしゃべり”している間に、角を二回曲がった通路の奥までやってきた。会話をずっと聞かされてますます混乱した男から離れ、ダイは大型の機械が並んだ中を進んでさらに奥へ。発電所を動かしているであろう精密機器が備えられた箇所へと足を運ぶと、壁際辺りで作業する集まりと、そこから一人離れて座る女性の姿があった。女性の側に近かったので、ダイはゆっくりと近づいていく。椅子の上で姿勢を崩した女性はダイに注目して、見知らぬ少年の入室に不快感を露わにした。

「ああ？ お前、どこから入ってきた。外の見張りはなにをしてやる」

「…、」

誰が見ても苛々しているのがわかる女性に、話しかけようとしたダイは一旦口を閉じた。

彼女の纏う雰囲気や仕草の一つ一つには、荒々しい印象が見受けられるが、随所に研がれた刃のような鋭さを感じられる。並みのトレーナーではなく、恐らくは幹部級の人物であるとダイは推定した。言葉巧みに言いくるめるには少々相手が悪そうだ。閉じた口を開くまでのわずかな時間で悩んだ末、ダイは真摯な態度を心がけて話しかけた。

「すみません。僕の名前はダイと言います。折り入ってお願いしたいことがあって来ました。話を聞いてもらえませんか？」

「…」

当たり障りのない言葉を選んだ。だが、女性是不機嫌な表情でダイを一瞥すると動かなくなる。

女性の視線は、ダイと、その肩で邪魔にならないように静観いるラッパーを行き来している。思っていたのとは違う反応にダイは戸惑い、とにかく相手の出方を待ってみることにした。

これが、二つめの誤算となる。

「——お前、名前をなんて言った？」

「え…。あ、ダイです」

「聞き違いじゃあねえな。お前の名前は、ダイ。合ってるな？」

「はい。それがどうかし…」

「名前はダイ。ペラップを連れたポケモントレーナーの、ダイ……」

二つめの誤算は。

「アカギ様に名前を覚えられたっていう、シンジ湖のクソガキか……！！」

彼女が、ダイに強い恨みを抱いていたところだ。

正面玄関のガラスが勢い良く割れ、丸まった人影が飛び出してきた。草藪から覗いていたハルは機敏に立ち上がり、地面を転がった人影がダイであることを確かめる。腕の中にはラッパーが抱えられ、庇いながら扉を破ったらしいダイは急いで起き上がった。

『おい、ダイ！ 外に出ちまったぞ！？』

「わかってる！ でも、通路は狭くて避けるには不便だし、個室に入ったら逃げ場を失う！」

聞こえてくる怒鳴り声から、ダイとラッパーは発電所内部で襲われ、逃げてきたことが知れた。――先に取り決めた“条件”を満たした。

ハルはフラーの制止を振り切り、ダイの元へと駆け出した。

「ダイー！！ 大丈夫かー！？」

「ハル、来たらダメ!! 離れてて!!」

「そういうワケにいか! ダイが良いって言ったんだろ?」

自分の不手際にダイがウンザリする中、モンスターボールを片手に持つハルが駆けつけた。“争いが起きるまでは草藪で待機、その代わり、争いが起きたら力を借して欲しい”。ダイがハルを抑えるために吐いた方便だったのだが、状況は良くも悪くもハルに味方してしまった。

出番を与えられたハルは、事態が面倒な方向へ発展したのに、やたらと張り切った様子でダイと並び立つ。

「どうしたんだよ、ダイがヘマするなんて。ラッパーがしくじったとか?」

『うっせ、決めつけんな。俺はなにもしてねーよ』

「本当、僕達はなにもしてないんだよ。……名乗ったら、急に向こうがキレた」

成り行きを聞いて、なんで? とハルがさらに訊ねると、その答えが開け放された玄関を跨いでやってくる。白と灰色の縞模様、螺旋状に丸まった尻尾、そして相手をキツく睨み上げる鋭い目――“とらねこ” ポケモンのブニャットが、割れて散った硝子片を踏みしめながら、ダイとハルの前に出た。

「:サターンの話じゃあ、てめえはアカギ様のクロバットの攻撃をペラップで止めたらしいな。しかも、アカギ様の方から名前を聞かれたとか」

ブニャットの後から、トレーナーのマーズも姿を現した。彼女は初対面であるはずのダイに対して、憎しみのこもった言葉を撒き散らす。

「アカギ様はなあ、必要のない『知識』は脳に留めないんだ。特に人の名は、例え幹部であっても、使えなきゃ頭文字すら覚えてもらえない…」

「それ、」

「あたしだって頑張ってるのに……アカギ様のために、こんなに尽くしているのに。……一度だって名前を呼ばれたことがねええのにいいいいッ!!」

ありったけの力を込めた絶叫が谷間に木霊した。ビリビリと伝わる振動に気圧された二人は、半ば呆気にとられながら言葉を交わして、

「ダイ、俺これ知ってる。名前が出てこないんだけど、なんて言っただかな…」

「“やつあたり”？」

「そうそれ！」

「……和んでんじゃねえッぞ、クソガアアアアアアア!!」

二度目の絶叫。呼応したブニャットが動き出す。

猛然と走り寄る丸々とした大きな体から、ダイはハルの服を掴んで下がろうとした。その意思に反したハルは、受けて立とうと前に進む。

「クロガネジム攻略で鍛えた成果を見せてやるぜ！ ヒコザル、
“いわくだき”だ！！」

「待って、ハル……」

ダイの忠告も聞かずにボールが放たれ、出てきたヒコザルがブニャットの眉間に一発打ち込んだ。バチン！ と乾いた音が鳴り、ブニャットは。

じろりと、ヒコザルを睨んだ。

「いい？ 効いてない、なんで！？」

「“いわくだき”は岩を砕く“だけ”の技、威力はそこそこしかないの！」

「でも、ブニャットはノーマルタイプだろ？ 格闘タイプは弱点だら！！」

「Lv.（レベル）差……、あのブニャットは相当鍛えられてる。タイプの相性が良くても、そもそも実力に差がありすぎるんだ！」

口喧嘩をしている間にも、ブニャットは首を振ってヒコザルを払いのけ、再発進。

マーズの指示が飛ぶ。

「ブニャット、“かいりき”で捻り潰せ！」

「な!？」

「“かいりき”…? ———ラッパー!!」

ブニャットが繰り出したのは秘伝技の一つ、“かいりき”。戦闘に向かない中ではもっとも威力の高い技で、平時では大岩を動かすなどの力仕事に役立つ。

そして“いわくだき”と違い、その名の通りの“怪力”を発揮する技でもあった。人の体でまともに受ければ、どうなるか。

『“ブニャット、止まれ”!!』

『ッ!!』

ラッパーの“ものまね”と“おしゃべり”により、ブニャットは急ブレーキをかけて止まった。一步手前では全身を硬直させたハルが、動けるダイに引っ張られて距離を空ける。

シンジ湖での再現を見せられたマーズはチツと舌を打つ。わずかに混乱してキヨロキヨロと見回すブニャットへと近づいて、その顔を、思いっきり蹴り飛ばす。

『ッッ?!』

「てめー、自分の主の声すら聞き分けられねえのか。………声でわからねえなら、痛みで覚えてみるか!! ああ!？」

全体重を預けた足を何度も降ろして踏みつけた。ブニャットは苦しそうに泣き叫んだが、逃げることも抵抗もせずに耐えた。過激な暴力に、ハルが思わず叫ぶ。

「やめろ!! 自分のポケモンだろ、ヒドいことすんな!!」

「ハア? これが酷いこと?」

ブニャットを蹴るのを止めたマーズが、頭を踏みつけた状態で顔を上げる。ダイに掴まれてもがくハルに、彼が抱いた虐待への怒りに、彼女はハッと鼻で笑ってみせた。

「おいおい、知らないなんて言う気じゃないだろうな。――ポケモンは、ポケモンの技では致命傷を受けないし、“人間からの危害もほとんど受けつけない”。特に人間から受ける場合は、それが強ければ強いほど、ポケモンの体は奇妙な力で守られて傷一つつかなくなる。…常識だろうが」

例えとして、マーズはポケモン図鑑の名前を出した。あれは発見、捕獲したポケモンの生態を事細かに記録する画期的なシステムとなっているが、なにより特筆すべき点は、ポケモンを傷つけることなく調べられるところにある。

“傷つけられないポケモンの体に、触れることなくメスを入れられる”。

「多少手荒く扱ったとしても、こいつらには効きやしない。良く出来た仕組みだよなア、」

虐待をしてはいけない理由はない。どうせ痛みもなければ傷つきもしないのだから。マーズはそう言いたげにまた片足を上げて、

「体は良くても心は痛む、傷は残る!!」

「…へえ？」

飛びかかろうとするハルを抑えていたダイが、ハルよりも大きな声で怒鳴った。掴まれた腕がキツく強く絞まるのをハルは感じた。両者は睨み合う。怒りに燃えるハルと、怒りながらもこの状況から脱するために頭を働かせるダイ。対峙するのは、荒ぶる波が極端に引いて静けさを取り戻したマーズ。

取り仕切る者などいない、ルール無用の野良バトルが始まる。

「ブニャット。ヒコザルに“のしかかり”」

先攻は素速いブニャットが取った。払われ、地面にへばっていたヒコザルに接近し、太い体に似つかわしくない跳躍力で飛び上がる。てっきりトレーナーを狙うだろうと予測していた二人は反応が遅れ、ヒコザルはブニャットの下敷きにされた。

マーズの引いていた波が、津波となって押し寄せる。

「ヒコザルに“かいりき”。手加減はするなよ。どうせ技では死なないんだ……。ククッ、“死ねない”んだからなあ…！」

残酷な命令に従ったブニャットが、前脚を振り上げてヒコザルを襲った。地面が窪むほどの威力で容赦なく殴りつけ、華奢で小さな体が打たれる度に悲痛な“なきごえ”が上がる。初撃で体力は根こそぎ奪われたのに攻撃は止まらず、行為はトレーナーの心までも打ちのめしていく。

「やめろ……やめろ!! ヒコザルを離せ!!」

「イヤ。止めたきや勝手に止めろよ。ブニャットに攻撃するなり、あたしに攻撃するなり」してさあ」

「ラッパー、 “オウムがえし” ！！」

マーズの軽口には乗らず、ダイの指示でラッパーが飛んだ。下に敷かれたヒコザルと乗っかるブニャットの合間に割り込み、翼を翻して “かいりき” を受け止める。力では劣るものの、技の効果でブニャットの前脚は弾かれ、自身を襲った。

ブニャットの体が仰け反ってヒコザルから退きかけた。さらに追撃してヒコザルを助けようとするラッパーへ、マーズからの指示でブニャットが反撃。

「 “ネコのと” 」

『 …アツツ！？ 』

息をたらふく吸い込み、吐き出されたのは “かえんほうしゃ” 。ラッパーの羽根を焼き散らしながらふきとばし、ブニャットの体はまたヒコザルの上に乗る。

出遅れたハルも、ヒコザルを助けようと新たにビツパを繰り出した。

「ビツパ！！ “まるくなる” 、 “ころがる” ！！」

ボールのように丸くなったビツパの攻撃。対するブニャットは、巻いていた尻尾を解いて転がってくる茶色の球をバチンと弾き、岩壁へと叩きつけた。回転はすぐに弱まり、ビツパは意識を失って地面に倒れた。

「ビッパ！ ……ヒコザルッ！！」

ビッパを倒されたハルの目の前で、再び暴力は繰り返される。マーズはニヤニヤと笑い、ダイは急いでナルトを繰り出そうとし、ラッパは黒くくすぶって、ビッパは動かず、ブニヤットに打ちのめされるヒコザルは、

涙と鼻水と血でぐしゃぐしゃになった顔を見せられた、ハルは…
……。

「——ッ」

頭の中が真っ白になった。

嫌な記憶が蘇ってきた。思い出したくない過去と現在が重なった。ハルは無意識のうちに走り出した。

待ってましたとばかりに舌なめずりするマーズの鼻先に、飛び出した。

「ブニヤットオ。馬鹿で間抜けなクソ餓鬼に“かいりき”」

ヒコザルを抑えつけていたブニヤットが、一転“でんこうせっか”でハルに急接近、力を込めた前脚を振り回した。ハルはこれを避けることができず、

「ハル！！」

「ダッ……!?!」

とっさにハルを追いかけていたダイが庇った。ハルの体を押しつけ強引にブニャットとの間に入り、“かいりき”はダイの右半身を殴打した。

殴られたダイの体はハルを巻き込み、二回三回と転がっていく。二人共息を詰まらせて呼吸困難に陥り、ダイは骨が折れたのではと疑いたくなるような激痛に見舞われる。

狙い通りに嵌ってくれたのを眺めたマーズは、ご満悦の表情でダイに近づいていく。

その横腹を蹴り上げ、面を上げさせて見下ろした。

「ハッ……。あたしを直接狙えば、少なくともブニャットの気を引くくらいはできただろうによ。甘々のクソアマだな」

「…っ」

「ダイ……!」

ダイが危ない。そうわかっていても、ハルの足に力が戻らない。予想以上のダメージがハルの体を襲っている。巻き込まれただけでこれなのだから、ダイはもっと深刻だ。遠目から見ても、ダイの顔は真っ青で脂汗が滲み出てきている。

ドクン、ドクン、と心臓が鳴っている。今まで感じたことのないナニかが、全身の血管を駆け巡る。

「…、」

ダイはマーズを見上げ、震える唇を動かし……チラと目配せした。

「……………」

「アン？」

「……つ、聞き……が、……ます」

弱々しく口を動かし、途切れがちな声でダイが喋った。ブニャットをそばに控えさせたマーズは、トドメを刺す前に、興味本位で耳を傾ける。

「一つ……疑問に、思ったことがあります……」

「ハッ、遺言にしちゃ勤勉だな。なんだよ？」

「僕がブニャットに殴られたことについて……。おかしいと思いませんか？」

「なにが」

「ブニャットの素早さなら、僕が割り込むより早くハルを殴っていた」

ダイは痛む体に鞭を打って起こし、マーズを睨み上げる。

「僕がブニャットの攻撃に間に合ったのは、ブニャットが躊躇いを見せたからです。ブニャットは、本当は人へ攻撃したくなかった」

「チッ。しつげが足りねーか。あとでまた蹴っとくよ」

「ポケモンは、トレーナーの在り方を良く反映することがあります。ペットは飼い主に良く似るって言いますよね？」

「…なにが言いたい」

ダイは、憎々しげに自分を見返す女性の核心を突く。

「ブニャットの躊躇いは、貴女の躊躇いではないんですか？」

「…」

マーズは答えなかった。ただ無表情で目の前の獲物に狙いを定めて、攻撃を命令する。

「ブニャット、“かいりき”で潰せ」

『…!!』

躊躇いなどなかった。

見上げた獲物の顔面へ、鈍器と化した前脚を振り下ろした。獲物の顔はひしゃげ、頭蓋骨は粉々に、首はめり込んで、

凄惨な姿となるはずの獲物は、こつ然と消えた。

「あ……？　おい、何処行きやがった？！」

一瞬で様変わりした光景に、慌てたマーズは周囲を警戒する。ブニャットも戸惑いながら捜し出すが、少年の姿は何処にも見当たらない。そればかりか、同じく倒れていた黄色髪の少年、ヒコザル、ビツパ、ペラップ……。マーズとブニャットを除く全員が、跡形もなく消え失せていた。

（なにをしやがった？　……“テレポート”、エスパークタイプのポケモンを連れていたか。いや、）

マーズの目が風車に留まる。谷間から吹き抜ける強い風で回るプロペラ部分。それをジッと見つめると、“二重にブレた”。不可解な現象の理由を突き止めたマーズは、奥歯をガリッと噛み締め、苛立ちと共に自分の側頭部を殴る。

「グッ……！！　ソ、があ……」

手加減なしのげんこつで、強烈な痛みをこめかみに与えた。顔を真っ赤にして肩を怒らせるマーズの視界が“正常”に戻った。直後に、マーズの目が離れていく二人組の後ろ姿を捉える。

「そこかアア……！！」

「うわっ早いな！？　ダイ、気づかれたぞ！」

「良いからっ、走って……！！」

足取りのおぼつかないダイと支えながら走るハルの二人へ、マーズがブニャットを向かわせる。

先ほどの出来事はなんだったのか――。

答えは変わらない。ダイがして見せたのは、ラッパの固有技“おしゃべり”だ。

ただし、マーズに対して使われた“おしゃべり”は、これまでのものと違う点がある。あらかじめ考えておいた文章を記憶し、ダイの唇に合わせて喋っていたのに対し、今回は完全なアドリブで“おしゃべり”した。

唇の動きに合わせるのではなく、その動きから言葉を読み取って代弁する。現在進行で会話が成り立つため、より確実に相手を騙して混乱させることができる。

より自然体で、高い技術を用いて、――ダイは“おしゃべり”という技を最大限活用してみせた。

「……………認めねえ。いくらアカギ様が認められたからってえ、あたしは認めねえぞおおお!!」

さらに燃え上がり激昂する追っ手の雄叫びが轟く。ハルはもう初めの頃より相手にする意欲を失い、げんなりしながらダイと会話する。

「ダイ、しっかりしろ。……………ごめんな。俺のせいだ」

「大丈夫、謝らなくて良いよ。それよりも、とにかく、あのブニャットを、なんとかしよう…」

「ここから一番近いのは『Bポイント』だ。ダイ、保つか？」

ハルの問いかけに頷いて、ダイは後方から迫る猫へと首を回した。

ギンガ団幹部の一人から逃げながら、実力と考え方の違いをまざまざと見せつけられた彼は、臆せずに強い口調で言い放つ。

「チャンスは、一回。でも、その一回があれば――、」

「あのブニャットは、倒せる」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5818v/>

時の彼方に咲く一輪花—Pokemon・D.P.P.—

2012年1月10日08時47分発行